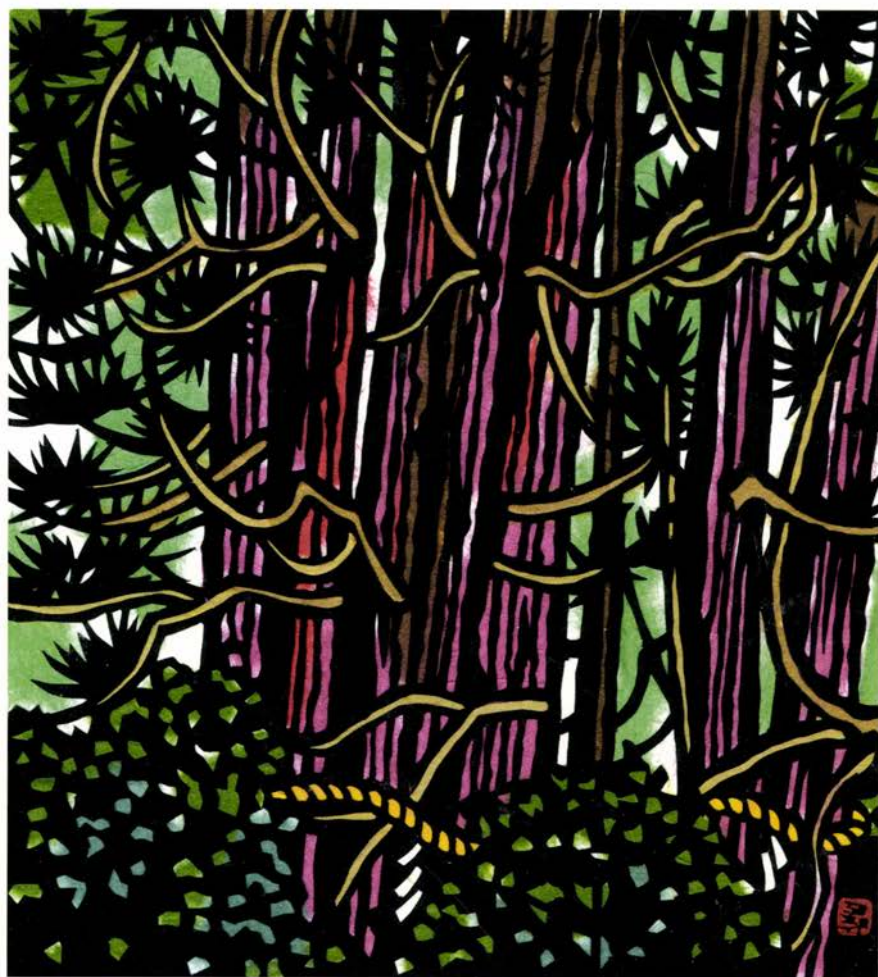


川柳塔



昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成二十三年五月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇〇八号

日川協加盟

No. 1008

西尾 葉 十七回忌特集

五月号

暑中見舞広告募集

本誌七月号に掲載する暑中見舞広告を募集いたします。同人・誌友ならびに各句会（川柳会）のアピール及び誌上名刺交換の場として、積極的にご利用をお願い申し上げます。

★個人 一口 1/9頁 二、〇〇〇円

1/6頁 三、〇〇〇円

（巻末の台紙に原稿を貼付または記入してお申込み下さい。）

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円

② 1/2頁 九、〇〇〇円

③ 2/3頁 一二、〇〇〇円

④ 1頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 五月二〇日

川柳塔社

医療法人社団

湯川胃腸病院

・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得

健康保険取扱 看護2A・緩和ケア病棟

- ・消化器科・内科・外科
- ・放射線科・ホスピス
- ・デイサービスセンター

診療時間

月～金 8:30～16:00

土 8:30～11:00

JR桃谷駅徒歩3分

<http://www.yukawa.or.jp>

電話 大阪 (06) **6771-4861**(代)

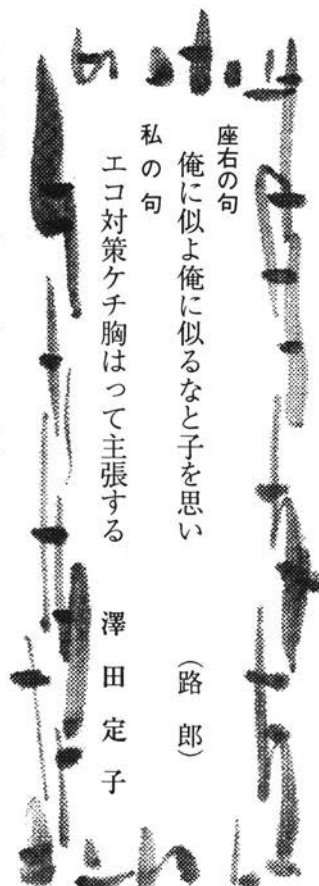
ひとすじの光

小島 蘭 幸

3月11日に発生した東日本大震災は、マグニチュード9・0の大地震、大津波、原発事故と未曾有の大災害となりました。大震災で尊い命を一瞬で奪われた多くの方々のご冥福を心からお祈り申し上げます。又、被災された地域の皆様の日も早い復興をお祈り申し上げます。今、各地で支援の輪が広がっています。サッカー、野球、芸能界、ありとあらゆる団体、個人で…。八百長問題で揺れる大相撲も立ち上がりました。そして私達川柳界も、(社)全日本川柳協会は東日本大地震の義援金協力をお願いを各柳社に発信して、団体、個人の義援金を受け付けています。4月3日に開催された二〇一一ふあうすと川柳大会では、募金箱も設置される等、阪神淡路大震災を経験された皆様の

心配りが会場のあちこちで見受けられました。二百八十名を越す出席者の皆様一人一人の作品も、被災者の皆さんと共に頑張ろうという熱い思いが伝わってくるようでした。私達川柳人は作品で、この一句でひとすじの光を与えることが出来る。そういう思いを強く感じる事が出来た大会でした。

4月6日に開催された郵政川柳大会での柳都おかやま代表の西原知里氏のおはなしは、正に被災にあった柳友の魂の叫びでした。何度かけても通じなかった柳友からの一本の電話。3月11日、盲導犬と一緒に出かけていて駅の近くで大地震に…。「せめて盲導犬だけでも助かって欲しい、ゴー!! ゴー!! ゴー!!」盲導犬はその場を離れなかったそうです。間一髪、駅員さんに誘導されて高台へ。大地震、津波の中で奇跡的に犬の餌が二袋無事に残っていたのに、「私が食べないと食べようとしないうです」と犬の餌を食べて見せた柳友…。大地震の中で、「それでも私は幸福です」と最後を結ばれた柳友はその場で魂の一句を投句されたのです。



座右の句

俺に似よ俺に似るなと子进行

(路郎)

私の句

エゴ対策ケチ胸はって主張する

澤田定子

川柳塔 五月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「榛原・千本杉」

■巻頭言 ひとすじの光

小島 蘭 幸 (1)

継続は力なり

竹治 ちかし (2)

川柳塔 (同人吟)

小島 蘭 幸 選 (4)

自選集

(46)

温故知新

(49)

川柳塔の川柳讃歌 (77)

木津川 計 (50)

麻生路郎句抄

(51)

水煙抄

西出 楓 楽 選 (52)

■西尾 栞 十七回忌特集

栞この一句——西尾栞十七回忌に寄せて——

(75)

一分間の柳論

西尾 栞 (84)

西尾栞50句

(85)

俳風柳多留——一篇研究 69

(86)

■寄稿 蒨葎草が伸びるとき

小池 正 博 (88)

継続は力なり

竹 治 ちかし

昨秋川柳塔社において、通巻千号記念大会が立派に執り行われ、全国各地から多くの柳友が集いました。まさしく継続は力なりという素晴らしさを目の当たりにし、感激いたしました。

ところで、私たち「いずも川柳会」も地方にありながらも、創始者・尼緑之助師が大正十五年に前身である「川柳たかせ会」を興して以来、実に八十五年という歳月を経て今日に至っています。

その間、折々の記念大会には本社から色々な方々に来て頂きました。当初の頃は幾度となく麻生路郎先生もご出席頂いたとか伺っております。昭和五十八年の緑之助師の句文集発刊記念大会には本社から西尾栞先生にお出で頂き「緑之助氏が路郎門十哲の一人だ、と路郎先生が仰られた」と講演されました。

その後も何度か栞先生に来て頂きましたけれど、聞くところによりますと、今年は先生の十七回忌だそうで、先生の鼻ひげをたくわえられた優しく穏やかなお顔を思い起こすに

愛染帖

檸檬抄「にらむ」

三宅保州・山本希久子共選

(92)

追悼 櫻庭順風さんを偲んで

齊藤 磊

(99)

一路集

「丸 い」

坂本日の出選

(100)

「たけのこ」

山岡富美子選

(101)

初歩教室「流す」

鈴木公弘

(102)

秀句鑑賞

同人吟

岩崎公誠

(104)

せんりゆう飛行船(5)

鴨谷瑠美子

(106)

津軽発おもしろ景色③

新家完司

(107)

■エッセー 私もワープロファン

高瀬霜石

(108)

四月本社句会

小川注湖

(109)

各地柳壇(佳句地十選/今 愁女)

五月各地句会案内

(114)

柳界展望

朱夏・光久

(130)

■編集後記(ひとこと/井上桂作)

朱夏・光久

(132)

座右の句

愛燦々ガラスの指輪だとしても

(岳 水)

私の句

盆灯籠点になるまで語り合う

松山芳生

つけ、何か御縁があるような気が致します。

その後六十周年記念大会から五年ごとの記念大会には、その時の主幹の先生を筆頭として、多くの先生方に来て頂いています。

そしてこの度「いずも川柳会創立八十五周年記念大会」を七月に開催することを決定致しました。しかし私たちの川柳会も例に洩れず、少子高齢化の波が押し寄せてきています。このような大きな大会を執り行うことが出来るのだろうかと思配していましたけど、会員の一人が「あと五年なんて、自信がないから今年やつてしまおうよ」と言われましたので、会員一同心を合わせてやる気になりました。思えば、全国的に見ても八十余年も続いている会は少ないのではないのでしょうか。

昭和六十三年、緑之助師亡きあと、久家代仕男会長のもとで、「尼先生の築かれた六十四年の歴史に恥じない、いずも川柳会を継承、運営していこう。」と、決意し守り通してきました。その後、尼れいじ、そして私と四代に渡って、緑之助精神を守り継いで来ていることは、大きな自信であり、誇りとするところです。これから先も伝統あるいずも川柳会を、神の国出雲の地で、守り続けて行きたいものと思っています。



小 島 蘭 幸 選

和歌山市 牛 尾 緑 良

逆上がり春をさがしているのです

山椒をたつぷり午後は自由の身

信号の赤が律義に赤になる

錠剤のひとつが謀反する食後

人間を見ているペットの目その他

常備薬明日を保障はしてくれぬ

奈良県 渡 辺 富 子

にこにこ手を振る母のいる彼岸

不合格へすり寄ってくる猫という

ブランドの似合わぬ妻とフルムーン

カラフルに咲かす花園持つわたし

おぼろ月歌って母と帰ります

吊革は持たず少年凜と立つ

和歌山市 木 本 朱 夏

ダイヤ改正身中の虫騒ぎだす

アルデンテくらいの芯はもっている

生欠伸つづく環状線は春

春の夜の紅差し指にある渴き

けなし合い庇いあつてる凸と凹

桜観に行つて桜を喜ばす

河内長野市 山 岡 富美子

国難へわたしの出来ることをする

被災地のパノラマ フィクションを超える

便利さへ警鐘鳴らす臨界点

平和主義いつも作務衣を着ています

老いという難所へ軽い靴をはく

羞じらいという美しい古語がある

鳥取県 斉 尾 くにこ

違和感も謎も時間が解いてゆく

シクラメン冬の独りをなぐさめる

井の中がこちよくなる夕間暮れ

嫌なこと煮込んで今日はカレーの日

桃の香をさせてみるまだ冬なのに

土曜日の雨は味方になりにくい

鳥取市 倉益一瑤

妻の座にとぐろを巻いているのです
黄色い声に尻尾を巻いたのはオトコ
輪の中で浅い呼吸をしています
まず食べてそれから話聞きましょう
人生の風景変えたい出会い
一筋縄をうまく捌いたのは母だ

弘前市 高瀬霜石

ケータイで用は足りるが時計買う
教養があつて話はつまらない
メニユーにはないものが出るツートカー
こんなにも節制してるのに メタボ
鉛筆の中に潜んでいる睡魔
子が生まれ孫が生まれる 奇跡だな

三田市 田中章子

ごゆつくりトイレに花は欠かさない
八百万神が日本にいてくれる
B型の集い何故だか心地よい
いい空気だいま夫禁煙中
混浴も許されていいクラス会
手を合わすからだがぬくなくなってくる

大阪市 井丸昌紀

黄信号みんな青だと信じてた
傾いているのに誰も気付かない
もう一杯飲めばハイドが出来上がる

釣り上げられ悟り開いたような顔
相槌を打つてゐるものと思つてた
ひっそりと暮らすことさえできぬ国

橿原市 居谷真理子

花屋にはどこか無理した花ばかり
原稿紙さあ大海へ漕ぎ出そう
キャンバスをあふれて裸婦のあたたかさ
石を呑む噂の風に飛ぶまいぞ
二人なら少しはしゃいで雪の中
一等賞欲しくて走るただ一人

鳥取市 岸本孝子

妥協して私の色を消している
年月が嫁を家風に染め上げる
腹の中までは染まらぬのが夫婦
大変なときには肩を組めばいい
春の服そろいぶみして春を待つ
消しゴムを持つから油断してしまふ

三田市 堀正和

エルニーニョラニーニョ四季をワヤにする
アンテナが錆びたか来ないいいニュース
足し算も掛け算もない日が続く
居酒屋で今日も地酒に口説かれる
お米までわざわざパンにしなくても
いい土になろうと菜園を口説く

吹田市 太田 昭

薫風忌風の強さが気にかかり
三色を五色に増やし春を画く
もう少し生きてみたくて靴を買う
恙なく暮れて真つ赤なワイン酌む
次々に老舗の消える冬の章
新しいペンキの臭う年度末

松江市 松本文子

するめ噛むしがらみ噛んでいるように
言い訳が多い反省してるけど
夢見てる人だ動かず働かず
ハッピーエンド私には物足りぬ
どきどきする郵便物がたまに来る
大阪は春と言うけど霰降る

神戸市 山口 光久

ご機嫌な男の声はよく響く
僕に似た手配写真が貼ってある
根掘り葉掘り聞く子の明日が頼もしい
その時に背中を押したのはワイフ
冗談も言わずに逝った怒り肩
走らねば置いてけ堀をくいそうだ

高知市 小川 てるみ

菜の花の海でいつとき蝶になる
生老病死 作法とやらを聞いてくる
スタミナは十分妻の皮下脂肪

いろはにほ話をすればいい人だ
老いるとは悲し十年後の私
真つすぐに生きて柔軟剤がいる

羽曳野市 吉川 寿美

余寒なお冬の微熱がまだ残る
器用には生きて行けない柿の蒂
走らねばわたしの手火花が消える
ひとり旅渚はこんなにも多弁
桜吹雪忘れ上手に老いてゆく
独り相撲だったか風が吹きぬける

奈良市 米田 恭昌

背伸びしてアイデンティティーを見失う
喫煙室さながら阿片窟のよう
お互いに言わぬが華のこともある
読経中自分の葬儀など思う

婚活のハードル下げろという鏡
日本晴れ喜寿を祝ってくれた富士

岸和田市 岩佐 ダン吉

アフガンの子らも同じ月を見る
ひっそりとでも九条にある鼓動
一步引け母の言葉が耳にある
人間をつくる手間ひま惜しまない
揺れながら一点めざす旅にいる
殴られた人いつまでも忘れない

大阪市 谷口 義

十二支の留をつとめております

入院したかったのに日帰りの手術

恥ずかしいのは洗濯物が乾くまで

晩年を迎える姉も妹も

大抵のことは正当防衛で通す

炊飯器の向こうで春が笑つてゐる

大阪市 小谷 集 一

七色の虹に自分の色を足す

温度差はあるが異常じゃあない加齢

ギブアップではありません背伸びです

志望校ではなかったがサクラサク

幸せに慣れて感性にぶくなる

頼られていると錯覚して生きる

竹原市 石原 淑子

噴火地震津波 地球の怒りおさまらず

惨状をうつすニュースに凍り付く

日本地図広げ祈りの中に座す

新築の介護施設の招待状

魂の彩ぬりかえる草いきれ

そよ風に心あずけて鳥になる

鳥取市 福永 ひかり

景気への春一番が来てほしい

かけているだけで美人にするマスク

施設への入所が絵空事でない

誕生の祝い自分で買っている

多数決いつも正しいとは言えず

踏み絵だとしても決心変わらない

和歌山市 古久保 和子

春のページへ届ける花柄の切手

かくれんぼうの好きなわたくしの椿

町を変える桜一本切り倒し

セールの電話お相手してあげる

二日目のカレーに人気あります

夕焼けて鬼も故郷を思い出す

大山市 関本 かつ子

イントロのリズムになって来た桜

職安の隣のビルはフラダンス

育メンのお手本見せている野鳥

ぴったりと歳を当てられても不満

いいことがあったか孫が三杯目

真ん中で撮られるようになって古い

出雲市 岸 桂子

ソバ枕わたしの死期をしってるか

いい人を買われて行った花の種

さみしいネ自由過ぎてもさみしいネ

雨の日は少しみだらに髪を梳く

明日あると信じて洗う足のうら

控えめな咳であなたを振りむかす

和歌山市 坂部 紀久子

寝る条件整い過ぎて眠られず

八十路です恋をするのは罪ですか

心耕し春の息吹を包み込む

わびすけが咲いて電話をしたくなり

やわらかい日差し一人の春ごたつ

夢の中岩手の友が逢いに来る

鳥取市 土橋 睦子

若返る煙がほしい玉手箱

それ御覧短所ばかりが似て来たね

錆びついた農具に先祖影を見る

ふる里へ帰りたくなる花見酒

鶯の美声も遠く七回忌

達筆からワープロになる寺の寄付

大阪市 津村 志華子

炊飯器明日生きるとも果てるとも

雨の日は何して過ごそひとりぼち

長寿箸有難いとも不安とも

たんぼの綿毛は私より健気

まだ傘寿びよんとぐらいは跳ねられる

右脳が怠けるから頭痛薬

香芝市 大内 朝子

産声をあげた五月の風に会う

新緑へ萎える心が四股を踏む

お月さま竹馬の友が逝きました

負けん気が酒に吞まれたのは内緒

一日の無事極楽の湯に浸る

生きるとは喜怒哀楽を積む遍路

松山市 宮尾 みのり

私の歩幅で通すひとり旅

かなしいな好きになれない人がいる

死ぬよりはましと気楽はすぐ思い

体力も気力も運もある達者

個展案内そろそろ幕を下ろします

天敵の存在ボクを鬼にする

大洲市 中居 善信

仮の世に地獄絵ばかり描いて来た

雨垂れの同じ音を聞いて喜寿

生真面目な仮面を一つ持ち歩く

原発へ反対ですと言って来た

恐ろしい事だ地球が軋んでる

想定外などとは責任転嫁だよ

八尾市 村上 ミツ子

近くまで来た春足踏みを始め

啓蟄へちよつぱり温い風が吹く

いいことがありそう上向いて歩く

ひらめきが不意にこころをノックする

ストレスが足の痛みを連れてくる

福耳も金に困っているらしい

鳥取県 佐伯やえ

雑草が音符のように伸びてくる
合掌の手にこぼされぬ種をもつ

花と川柳のおかげ豊かな老後です

水が水色に光るふる里いとおしむ

悩みを捨てに春のステキな馬車にのる

子らの継ぐ道へきれいな花植える

尼崎市 春城年代

春雷ひとつ嚇かしてゆく朝の駅

ろう梅をひと枝挿して正す膝

真多呂雛を飾ってホントの春を待つ

春の帽子がいらだっている花粉症

独り遊びの少し多彩な夕ごはん

あの雲を掻きわけたなら逢えますか

弘前市 福士慕情

夜が明けて今日一日の生を得る

屋根雪がはるだ春だと瘦せてゆく

窓全開 仏間に春の陽を入れる

春彼岸雪に埋まった墓参り

ストーブもテレビも妻のテリトリ

今日の鬱なため夕陽はまた明日

茨木市 藤井正雄

蟻の列キャリアはいない炎天下

浮き浮きと女三人旅スーツ

針を持つ祖母横顔のまま返事

後悔の中にもしもが見え隠れ
どこをどう減らして充てる子の学資
全員がヒーロー優勝旗囲む

大阪市 升成好

達筆の付加価値つけて来た手紙

間違いであつてはしくて読み返す

寿命でも神は女性に依怙蟲眞

庇い合う頃から夫婦らしくなり

目を閉じるとつても重い自己主張

煮えたぎる音から食べる鍋料理

和歌山市 田中みね

時に触れあなたを想う半世紀

目の黒いうちに会いたいひとが居る

第六感夫婦でないと見た喫茶

恐れ多くも妻へ呼び捨てなどできぬ

イケメンのレジへ半額もち込まぬ

冷蔵庫の中ガラガラでよう冷える

伊丹市 山崎君子

胡蝶蘭彩をそえますひな壇に

早やお昼娘のさしいれを楽しみに

ひな祭昔のひなのなつかしく

昔びなぼんぼりの灯の美しく

誕生日祝ってくれるかボタン雪

ペンネーム遠いあの人なつかしい

宇部市 平田実男

参加賞の外は貰ったことがない

おはようがほぐす昨夜のわだかまり

忘れたい忘れたくない過去の人

二兎追った頃若かった青かった

問診で懐具合までさぐり

美祿市 安平次 弘道

巻き戻しすれば命にある重み

信号は青秒を見て渡り

昭和史を繰れば原罪こぼれ落ち

白い皿に盛ってあるのは命です

やはり買うことにしました電子辞書

東かがわ市 川崎 ひかり

出生も臨終も時間告げられる

しまい場所忘れまたまた買いに行く

晴れ舞台亡母の形見を付けてゆく

寄り添えば影も他人でない形

道聞いた人よ着いたか目的地

東かがわ市 清川 玲子

大望は抱いているが職が無い

心機一転望みを果したい二浪

夜の道百均の傘武器になる

群れを出る勇気をくれた春の風

金の要る話に沈黙が続く

東かがわ市 伊勢 八重子

旅立ちを見送る母の始発駅

癒される菜園猫の額ほど

栄転も左遷もあった長い道

春風に髪あそばせる万歩計

想い出を写す心のスクリーン

東かがわ市 原 賢

人並に生きる証しの涙かも

美しい花も枯れゆく運命もつ

身の程を知った暮らしの財布もつ

まだ愚痴が止みそうにない火消し壺

波一つ越えても後に続く波

松山市 高橋 宏臣

春が来て玉子売場が騒がしい

むすんでひらいてその手の先にある迷い

薔薇園にアクセス小指晴れるまで

以心伝心ふたりでうどん食べながら

ケイタイの指の音聞くティータイム

松山市 古手川 光

幕末の日本を想わせるアラブ

運命と思えば怒り凪いでくる

あの頃ヘリセットしたい枯すすき

神もいろいろトイレの神が持てている

マグニチュード9政界へ喝入れる

西予市 黒田茂代

雪陰からわたしここよと冬苺
猫柳春の日差しのページェント
マシユマロの浮き雲空を春にする
やわらかな風が散歩に誘い出す
生まれたてのシャボン玉です触れないで

高知県 小澤幸泉

悲しさに疲れて読んだ聖書です
石ころに話しかけてる遠い夢
愚かにも青い地球に線を引き
声だけが強い受話器で泣いている
ある朝に夫婦茶わんが割れていた

唐津市 市丸晴翠

避難先置き忘れた抱き人形
行李の底に青春の日のラブレター
セーターの胸のふくらみ孫も春
カードでの買物額で家庭不和
病室は鳥籠空の雲を追う

唐津市 樋口輝夫

探し物妻は手品のように出し
盆踊り誰も見えないお月様
市長選すんで赤ん坊よく眠る
乾杯のグラス持たされ十五分
転び方上手になった一輪車

手術承諾書三途の川の音

命果てる時の台詞がまだ出来ぬ
尻尾振るのが遅かった闇魔帳
悔しくて密かにいろはやり直す
石ころと承知の上で磨いてる

唐津市 山口高明

夢に見た毘沙門天は亡父の貌
陽に透かすてのひら正義の血が流れ
間違いの出来る秘書官募集され
あの女のミステリアスに一目惚れ
おんなから口説いて何所が悪いのよ

唐津市 井上勝視

建てた家と共に私もボロボロだ
衰えを見せたくないときよく喋る
老妻が不満隠しているレシビ
カネの価値老いと若さの乖離かな
病院の都合に勝てぬ救急車

熊本市 永田俊子

何もかも許して葉牡丹渦を解く
お悔み欄と花便りが並ぶ風の向き
お年ですからの医師の言葉はスパイスだ
ケイタイ持たぬ信玄袋の小宇宙
枯れてゆく心を包む赤いマフラー

熊本県 岩 切 康 子

日常の散歩にもどす春うらら
午後の受講居眠り癖になっている
待望の海外地震に呑み込まれ
先輩の優しい会で抜けられず
ひとりでも入会嬉し七十年代

熊本県 高 野 宵 草

頭脳から老いてゆく日の虚しさよ
目覚しに間がある安堵また眠り
怠けたか八十路になって五十肩
友の計のたびに生きてる価値思う
幸せは夫婦で登る八十路坂

札幌市 小 沢 淳

ぼつぼつと発酵してる僕の詩
あいっただけ安全パイと見た不覚
手は多芸託びて拝んで飯たべて
核心を外して探り入れて来る
生と死のたった一字が悩ませる

札幌市 三 浦 強 一

逃げ足の早さも最大の防衛
のんびりに罪悪感の戦前派
大國になめられている柳腰
喋る妻寡黙なほくでワンセット
ほく眼鏡妻は入れ歯を探してる

黒石市 佐 藤 古 拙

よくみれば堅物もいる羅漢さま
海底に眠る舳先のご紋章
深海魚の告白だろか泡ぶくり
アルバムをめくるとうねる黒い髪
ご乱心と言えない儘に職を退く

黒石市 相 馬 一 花

イケメンについて騙されるつけまつげ
近道を行けば出てくるモンスター
結婚をすれば貸し借り消滅す
民族によって異なる美のセンス
陶酔をさせて折伏する策士

平川市 小 寺 花 峯

いい味だ春を飲み込む深呼吸吸
陽が沈む頃には醒める二日酔い
年金の範囲で旅を繰り返す
きっぱりと決断をしている椿
ときどきは小さな炎燃え盛る

弘前市 岡 本 花 匠

飛行機の間引を笑う新幹線
絵馬笑い神のタクトの幸不幸
夕陽おがみ臉の父母へ抱く慕情
青汁で自活のおとこ灰汁を抜き
花筏次世の旅へ幸祈り

弘前市 須郷井蛙

検診に行かぬ病名怖いから

後期高齢もう死火山にされている

愛のムチPTAがうるさくて

卵米安価でどうにか生きてます

趣味ひとつ減らして心休ませる

弘前市 今 愁女

新幹線B級グルメで持てなされ

雪の山を解かすも速し春の風

列島の長さ南の火山灰

冬眠の覚めずにおくれ岩木山

おちこちに新たな命山笑う

弘前市 高橋岳水

後継ぎがなくて止められない居職

情報過多何を基準に読み解くか

暗転のドラマ引きずり季は巡る

生き様が男の背なに浮いて出る

将来を睨み捨て石打っておく

青森県 松山芳生

失意の日 母の位牌に辿り着く

限りなく裏から覗く千里眼

不況風ばつばつ連れて来る光

君の御霊抱いて家移り致します

相棒の鍵が錆びてる内緒ごと

さいたま市 星野育子

ときどきではどがいいお付き合い

信号で右左良し上下良し

子離れは早くて孫とはモタモタ

何だ彼だ言っても原因はお金

音楽は百薬の効欠かせない

東京都 岸野あやめ

地図にない道で花束もてあます

晩年の運で定まる不幸

子供運良いと易者の眼が笑う

名幹事会費上手に使い切り

補助金で買ったマイカー寝てるだけ

八王子市 播本充子

平均を生き指先も鈍くなる

ご無事でしようかメル友に涙する

思い出をそろそろつなぐ丸木橋

25時裏切り者を削除する

菓子パンをこどもの顔で食べている

横浜 菊地政勝

忘れたい事を憶えている苦痛

達筆な句箋を美女と思ひこみ

古傷に触れられまいとする焦り

行先は妻にまかせる花盛り

お人良し貧乏神と仲が良い

横浜市 小野 句多留

慣れた頃カルテにまかし医師代る

新入りへ淋しい檄の相撲部屋

溶け出したつららに春の揃い踏み

老人を書いて老人臭く生き

ひと区切りなにを食べるか考える

川崎市 三浦 きぬ

病歴はメダル級だと胸を張り

政治家の適否も仕分けしてみても

教え子よ我より先に逝くでない

口だけはまだ年とらぬ生きられる

美しく終えたい手本見当たらず

富山市 島 ひかる

春一番芽吹きはじめている心

人ごとでない家中を見て回り

どうしよう金の成る木が枯れてゆく

最高の頭脳とまどう善と悪

落ち武者の影が僻地の里にある

可見市 板山 まみ子

自死したと嗚咽の声に寒椿

信念で生きて命を絶つ無念

子の死出を見送る友の肩を抱き

サングラス帽子にマスクさて何方

念のため持って出た傘手離さぬ

静岡県 蘭田 猊沓

的を射た野次に議場を支配する

眠る町目を覚まさせる槌の音

常夏の国から味噌汁懐かしむ

修復に原画の色を探り出し

貴婦人と呼ぶSLに人だかり

犬山市 金子 美千代

リーダーの苦勞テンポが皆違い

本ばかり読んでいたのに鳴るおなか

番組に合わせて食事時間決め

頭からいつも離れぬエンディング

明日があるなんて思えぬ大地震

犬山市 吉田 幸子

ウォーキング目ざす喫茶で友が待つ

師が冥利尽きるとクラス会の華

一人立ち出来るか夫試してる

甘酒で乾杯色艶まだ確か

引き際も未練あるうち華だろう

愛知県 早川 遯行

宇都宮対浜松の餃子戦

今年のは凄いらしいぞ杉花粉

ダイエット目指す散歩は腹が減り

花だより少し歩いて見ようかな

悲しみの家にもサクラ満開に

京都市 高 島 啓 子

新しい指輪で姉がやってくる
カクテルの底錯覚が沈んでる
口挟まぬにこしたことはない
万札を持たねば丸腰の気分
鉛筆を持つとスイッチが入る

京都市 西 村 益 子

ふと浮かぶ顔はいつでもあの人だ
選りに選って今夜は粗食誕生日
大声で待っててくれる人がいる
新燃岳地球の陣痛だと思ふ
積もったり溶けたりしつつかされる

京都市 坪 井 孝 一

口笛を吹いて心を見抜かれる
チューハイは心の底を見抜いてた
原点へ帰ると意外素直な子
指切りで約束という軽いこと
焦っても二人の誤解弛まない

京都市 三 宅 満 子

天変地異あまりに惨い大津波
向き合って毎朝飲める熱いお茶
青春切符持って気ままに花の旅
不況にもめげず桜はほころんで
好奇心あふれ毎日新しい

京都市 榎 本 宏 子

自分のこと何んてバカとも偉いとも
指輪抜きおとこ束の間鳥になる
お腹減ると人を斜めに見てしまう
知らぬ間に数字上がったテレビ音
耳打ちが習い性らし元議員

京都市 藤 井 文 代

面構えだけで守った父の椅子
嫁姑の話題意味なく盛り上る
訴えるわけにもいかぬ頑固者
の一つずれた他人とうまくいく
特別視されて酔う人醒める人

亀岡市 井 上 森 生

天地を創る壊すは神の業(東日本大震災 3句)
大地震地球が背負う負の遺産
対津波どうする国家マニフェスト
胃痙なら私はノーと決めておく
生き生きと生きて朝夕スクワット

長岡京市 山 田 葉 子

その日まで秘密も嘘も抱いていく
この道を行くしかないとつつ走る
落ち着ける場所に戻るクラス会
廃線を辿って森へ迷いこむ
相性の良さかいつでも自然体

大阪市 中村 叡子

他人事と軽く思っていた事が
せめてもの今日の晴間が有難い
痛ましい生と死の間を目の当たり

大震災心正しく肅々と

高齢となり尚この地去り難し

大阪市 坂 裕之

道草を食った分だけ柔らかく

道しるべ自分で立てて歩きます

真つ直ぐな道では刺激なさそうで

この道も防犯カメラ付きました

道端のお地藏様にごあいさつ

大阪市 榎本 日の出

ライバルが時どき笑顔見せにくる

ゆっくりと煮込めば母の味になる

あの世へのみやげと思う一行詩

心まで許せる友が側にいた

元氣なら鬼と優しく手を結ぶ

大阪市 松尾 柳右子

洋箏箏着出番を待っている

水鳥の川面仲良く泳ぎ行く

イケメンのテレビ恋してまだ若い

筆箱のエンピツ話す夢ばかり

五月晴露地に咲く花和みます

大阪市 近藤 正

過去を知る生き証人が減るばかり

都構想一人占めする仕掛けです

古希が過ぎ帽子姿が亡父に似る

不況風シャッター通り吹き抜ける

彬の碑芽吹きはじめた百日紅

大阪市 川端 一步

若者が生き生き見えるボランティア

風呂の湯があふれて済まぬ震災地

来年はきつと来てねとさくら散る

心眼で明日の日本を見たいもの

がんばろうこの一点で手を繋ぐ

大阪市 平嶋 美智子

いやな過去ケーセラセラと忘れよう

子返りか爪噛むくせにふと気付く

バリバリと噛めてた今はもぐもぐと

守りたい共に紡いだ愛だから

全没は次回の糧としたいもの

大阪市 寺井 弘子

ロボットに老後の支援求めます

割り勘に下戸の友から声かける

赤ちようちゃん愚痴を一手に引き受ける

親の遺志継いでたこ焼き三代目

ホワイテデー本命でしたか義理ですか

大阪市 神夏磯 典子

地震津波ニュースへ私生きている

信念を貫きあちこち傷だらけ

化けること覚えてからの自信なり

花園で生きる力をもろてくる

散ってゆく花の素顔の美しさ

大阪市 榎本 舞夢

陽が昇る今日も上昇我が気分

華やかにキャリアつとめて今孤独

雪景色外止めて絵筆とる

探すより見つけて欲しい待ってます

満天にくっきり光る母見つけ

大阪市 小糸 昭子

若者は村起こしだと雪合戦

どの角度から見てもあいつは良いやつだ

選手より疲れてしまう大声援

どの島も取られないでよ売らないで

大声で怒鳴り散らした頃が好き

大阪市 熊代 菜月

吉野山あともう少し冬眠中

ベル鳴らし颯爽と乗る三輪車

三病と仲良くやってまだ八十路

テレビ見て独り笑いに馴れました

友達の数が自慢で忙しい

大阪市 岩崎 玲子

ストレスが溜まると私貝になる

ストレスも春の陽ざしに負けて消え

春に向け新調しますスニーカー

嬉しくて春の散歩は距離のびる

花の香が楽しくさせる散歩道

大阪市 田浦 實

自分には自分の老いとマイペース

若冲の絵から鶏飛び出そう

渦開き春の鳴門が開きました

光食べ生さる葉っぱはすばらしい

マニフェスト五月の鯉の吹き流し

大阪市 江島谷 勝弘

豆ごはんおかずなしでも三杯目

スパコンも円周率を割りきれず

本心を明かさぬ奴と言われている

ネクタイはもつぱら黒が増えている

地震国やはり原発そぐわない

大阪市 原田 すみ子

底無しの欲張りなのよ女って

天辺も底も知らない割烹着

ワゴンセール底かき混ぜてつかみ出す

これという欠点無いが響かない

預貯金も愛も小出しで共白髪

大阪市 伏見 雅明

家計簿の都合聞かずに来る計報
三寒四温戻りがあって好い夫婦
我慢する術を覚えて添い遂げる
ゲーセンが孤独な老いを引き寄せる
家守る姉の口調が母に似る

大阪市 奥村 五月

借畑も止めて免許も返す歳
鯛焼きで独りで祝う誕生日
自慢して財布を開く羽目になる
あの母が私忘れてどなた様
只今と挨拶できるランドセル

大阪市 大川 桃花

大災害報道記者の不精髭
半額がいつばい買えたウフフフ
不器用で定形でしか生きられぬ
ブランコを漕いでとび込む青い空
タイミングすごくいい日がたまにある

大阪市 津守 なぎさ

リハビリが仕事一人の日日感謝
青天に列島震う大津波
招待を受けてセレブの服選び
タクシーで有名店のそば食べに
傘寿だな杖をたよりに美術展

大阪市 鶴田 遠野

ブランコがひとりぼっちの子と遊び
常備薬飲んで渦中の人になる
輝やいた頃は無口な妻でした
ハグする癖で嫌われた初対面
お誘いを愛想笑いで逃げておく

大阪市 岩崎 公誠

頼むから過去は一切聞かないで
嘘を吐く嘘がほんとなる不思議
上役が駄馬でロマンと遠くいる
凭れあいあんた頼りと老いふたり
家計簿の記録なんにも役立たず

大阪市 池上 清治

文化教室どこも女性で溢れてる
ふる里の駅は見送る友も減り
三料理同時にできるのは女
熨斗つけていとし娘送り出し
失言のままで気まずく別れた

大阪市 小泉 ひさ乃

上下などなく平等に来る明日
咲き遅れの花へ恵みか陽が温い
ひとつの問いへ人それぞれにある答
褒められて少し気取っているお洒落
待望のひとり空しい日を送る

大阪市 佐藤 忠 昭

コンサート二階正面眠れない
デジタル化古いレコード処分する
自信持つ男の声は張りがある
時計見てもう一軒の声を待つ
囁きはアルトの声でゆつくりと

大阪市 古今堂 蕉 子

十字架の前で不覚に縛られた
未完成だから初恋胸にキユン
開ける前きつとゆすった玉手箱
よっこらしよ言うて五歳が立ち上る
箱一つ捨てられぬのに貴方など

大阪市 吉村 一 風

バックスと共に居眠る終電車
口喧嘩まだやれるから幸せだ
じつくりと聞いてじつくり説き伏せる
むずかしい顔はやめとこもう春だ
幸せのハードル少し下げてます

大阪市 澤田 定 子

先の世も見守っている仁王様
ライバルが消えて張りないプロジェクト
段差とは見えない道で蹴躓づく
下戸家族嫁さん一人大ジョッキ
菜の花で迎える司馬の記念館

大阪市 板東 倫 子

パンダ様お成りは晴れの特別機
再来を祈るマナ鶴の北帰行
落ちぶれて萎えた男の自尊心
人間の無力さ思う大津浪
人の世や悲劇喜劇のくり返し

大阪狭山市 矢野 梓

マネキンがふんわり着てる春の服
残り物チンして済ます軽い昼
あと少しもう一分と言う枕
しつかりと言われた事は覚えてる
雑音にまぎれてひと日無駄にする

池田市 栗田 久 子

今の世にいそうなおっちゃんの埴輪
夜桜に無邪気なおっちゃんの踊り
音もなくアセビが似合う春の寺
開けたくはない私の玉手箱
助け舟よけいなことであつたかも

和泉市 横山 捷 也

補聴器は買わぬと決めた老いの自負
神妙に座つてうわさ聞き流す
古希すぎて広い海図のどのあたり
妻臥してひっそり桜便り聞く
激論の席に銚子の数が増え

泉佐野市 山本蛙城

川柳のお蔭元氣という便り
針さばきドラマーに似てたこやき屋
鉄柱に鳥の巢を見た単線路
耳に手を添えて補聴器など要らず
あちこちに電話をしたい寂しい日

茨木市 島田誠一

一本も許さじと妻白髪追う
辞令には好きか嫌いか書いてある
義理チョコも無しにつぶてが情けない
民主化の風はメディアと手を組んだ
覚悟等出来ぬが手術台に乗る

河内長野市 坂上淳司

お袋の涙に弱いガキ大将
ノーサイドの後からどっと悔し泣き
涙など流しておれぬ町工場
子をもめる財産残さない誇り
優等より皆勤褒めてくれた父

河内長野市 黒岩靖博

初恋も淡い墨汁の染みのあと
ごめんネの一言いえず大噴火
偶然が重り合つたもらい事故
へらず口叩いた報い倍になり
平行線二の字描いた飛行雲

河内長野市 水谷正子

後世に残る平成大地震
宮仕え原発だけは御免です
日本丸力を合せ乗り切ろう
友が逝く恥義理かいてまだ生きる
卯月来る就活する子終つた子

河内長野市 井上喜醉

縄のれん昔が好きな顔が寄り
肩書を無くした男の朝寝坊
大穴を夢中で探す老眼鏡
老舗よりエレベーターのレストラン
影武者が火種を抱いて政治揺れ

河内長野市 植村喜代

人間を右往左往さす余震
受験生雪に滑ってから受かり
身に憶えないのに怒られ謝つとく
人のいない商店街は淋しいよね
逢つたことなくてもわかる温かい人

河内長野市 村上直樹

ニコリとも出来ぬ政治の虚脱感
ひとり夜の酎を片手につつく鍋
百薬の長だ毒だと酒の鬱
背を向けた子に背負われて老いの坂
罪すべて消えて安堵の棺の中

岸和田市 堤 植代

春一番税の申告せにやならぬ
横文字が多くてほんに困ります
あほらしい八百長勝負見とうない
せわしない遺影注文貼り出され
おひなさま おくれないようします

岸和田市 井 伊東 吉

大揺れに揺れる政界自然界
政争も一時休戦大地震
原発の想定外の恐さ見る
転倒の防止頭に刻み込む
指示器さえ出さぬ横着者が増え

岸和田市 原 さよ子

人生も八十路ひなびていく抱負
失言を取り消す言葉考える
豆噛める歯あることを感謝する
悲しみの涙吸いとる青い空
お互いに齢にはふれぬ趣味の会

岸和田市 雪 本 珠子

旨いもの食べなれた舌小煩い
作句にも時代の風を取り入れる
夕焼けに背中押されて仲直り
歳忘れパッションネートな恋をする
生き下手で待つのに馴れた影法師

岸和田市 森 元 ふみよ

重そうなマツゲが笑う新社員
バーゲン は後期高齢なんのその
年金日小声で孫が甘え来る
ゆげの中吠えてるような父の唄
年重ね夢も希望も叶えたい

岸和田市 土 橋 房 枝

歩くつて心が気持ちいいんだね
人生に悔いはないかと我に聞き
手放せば自由になれるいらぬ物
家中で電子音して惑わせる
丸顔で性格丸いと思ひ込む

交野市 森 本 弘 風

見えぬ春だんだん布団重くなる
春うらら疲れを知らぬ慣れた道
道ゆずる好意が急かす細い坂
お彼岸は混むから避ける墓参り
民衆の怒り悲しいスフィックス

堺市 奥 時 雄

白髪が染めた黒髪持ち上げる
風向きを巧みに変えるマスメディア
ヒーローにされたメディアに叩かれる
幾万の雑魚に命を生かされる
癌告知あつて命を意識する

堺市 大久保 のん子

荒廢の地球強欲極まれり

こだわりを少し捨てると生き易い
前向きで老いの一字を遠くする
調子いい嘘へ相槌打ってやる
なるようになるさ人生楽に生き

堺市 遠山 唯教

百歳の笑顔に怖いものがない
孝行をしてない腑甲斐無さに泣く
贅沢が身に沁みている体脂肪
思い遣り行きつ戻りつ生きている
残照の折れた心を立て直す

堺市 大隅 克博

まあまあと言える位の歳になる
手当なしでも動物は子を育て
大方は喜怒哀楽で化粧する
終電と始発案外混んでいる
七十の今も持つて四十肩

堺市 桑原 道夫

いちばんに陽が射し陰の水飲み場
大笑いして肩車から下ろす
ガスメーターの上にひととき置く軍手
河川敷の遊びを見てる遊び人
河口まで流れた魂いま戻る

堺市 荻野 像山

禁煙で仕事が減ってきたパート
職退いていとしく思うちびた靴
宿題が済むまでママは構えてる
それとなく精つく料理出してくれ
びっくりさせといて覚えてない寝言

堺市 村上 玄也

昼要らん言うたら妻に喜ばれ
百円と言うから要らん物も買う
チョコレート貰えぬ孫を不憫がり
物忘れ年相応と知り安堵
憂色が濃くなつてきて土気萎える

堺市 源田 八千代

梅園でバス停訊かれガイドする
追悼の人に重なる梅花の詞
詠嘆す師匠の吟に涙する
品位ある交わり消える高齢化
近隣の親切うれし春日和

堺市 柿花 和夫

愚痴ひとつ母の位牌にぶら下げる
晩酌の二合が今日を過去にする
仕合せの隅でしっかり米を研ぐ
同期会再び会える気で別れ
同情はしないと決めて友見舞う

堺市 志田 千代

大津波わたしは釘煮炊いている
糠床は守れずスーパ漉している
毎日のリズム狂わす休肝日
割り算は電卓サマに頼ってる
目覚しより頼り甲斐ある猫時計

堺市 西村 りつえ

ほどほどの欲と仲良く生きてます
まあまあ成績は無視やる気買う
大津波足の傷など小さいこと
ロボットにやがて予感が走るだろ
使い分けうまい笑顔が出来ぬ僕

堺市 矢倉 五月

溜息はあなたに見えぬとこでつく
何が何してで通じる友がいる
鮮やかな花卉の裏にあつた染み
たこやき屋さんになります孫来る日
大丈夫わたしあなたのザイルです

堺市 山本 半銭

どっかりと胡床かいてる命あり
桑を食む蚕命の音がする
花活けて何か足りない物思い
初午の赤い餅から春が来る
綱渡りが何とも常のことになり

堺市 加島 由一

ほのほのとさせる戦場カメラマン
黙祷をささげ始まるクラス会
頼杖の妻が私を見詰めてる
不始末を父が仏間で詫びている
見るたびに会うたび好きになる桜

四條畷市 吉岡 修

ありがとうをひと言添えてきた筈
腹の虫もう飼い主の手に負えぬ
笑ってる子供てほんと天使だな
五寸釘研いでうらみを鎮めとく
一つ越えまた越えたのに坂ばかり

吹田市 須磨 活恵

無になれず欲捨てきれず性悲し
海を見て心の狭さ知らされる
身の内に負けず嫌いの鬼がいる
知恵の輪がごねて答えが見つからぬ
人の輪に混って生きる知恵もらう

吹田市 瀬戸 まさよ

洗濯機朝の元気を歌います
マニキュアの足美しくご出勤
九十歳効め信じて顔バック
好物はうなぎの肝と鰻の皮
若者のブーツ子犬に見まちがえ

吹田市 木下敏子

高槻市 杉本義昭

ものの芽も夢も膨らむ春の道

若き日のこぼした夢をもう一度

カラオケの歌詞に満足そうな顔

おもいきり好きなこととして太い線

スビードは落ちたがペダル確と踏む

吹田市 野下之男

神様も鯰の機嫌直せない

火の山も何か不満があるのかも

支持率は働き具合よく見てる

どうしても受かりたいので奇襲した

猫だけがへそくりの場所知っている

吹田市 山本希久子

追いかけてみたい私だけの童話

いつも何か忘れてるよう五月闇

家計簿が笑ってくれた花を買う

無題の絵と向き合っている老後

削除キイー押しても事実消えはせぬ

高石市 浅野房子

ゆるやかにノルマこなして日が暮れる

ひとり鍋作って今も現役だ

羞恥心失って行く怖さかな

お互いに老いて仲良くなりました

流されてきたままそこで根が生える

嘘に嘘重ねて真を見失う

何だろウカレンダーには花マーク

香水をつけて少女の自己主張

倒壊のチャーチの前に立ち尽す

ゆすり発言基地の解決遠くなり

高槻市 乙倉武史

東日本仰天動地大異変

梅干しもサブリメントの数にいれ

球春へ歳を忘れて応援歌

雑草の春の歌聞き万歩計

老いてなお温故知新は忘れまい

高槻市 峯村勲弘

天国へ梯子が届くまでの夢

生きようと生きねばと飲む降圧剤

なんだ坂こんな坂とて老いの坂

活断層ネットで調べツアー旅

嬉しがらせ泣かせて消えたマニフェスト

高槻市 左右田泰雄

野の花を飾って部屋を若くする

人波にもまれて歩く春うらら

この年でバレンタインが三つ来る

輪を画き一羽遅れて行く翼

手をつなぐだけで景色が円くなる

高槻市 佐 甲 昭 二

ノックする音が伝えるよい予感
再会を果たした鍋がよく喋る

思い切り叱られ解けたわだかまり

クイズ解く妻は聞く耳など持たぬ

無駄のない言葉が沁みるガン告知

高槻市 安 田 忠 子

誕生日唄のサービスウエイター

俳画展額に入れたらぐつと映え

判じ絵のように読み解く書道展

今見ればどんな写真もああ若い

人間に棲みついていて善と悪

高槻市 指 宿 千 枝 子

太るのは嫌でもケーキなら食べる

大福餅半分こする妻と僕

家事育児に追われた日日のなつかしさ

毎日を大事に生きるのも仕事

急ぐことはなし見送った満員車

高槻市 富 田 美 義

青葉かぜ香りも入れた靴を履く

親を見て子は慎重に嫁選ぶ

脇道を持たない父の瘦せ我慢

嫁がせた夜の晩酌濃くつづく

濃い紅が女の歳を巻き戻す

高槻市 片 山 かずお

場の空気読まぬ正論聞かされる

思い出に酔って断捨離とはできず

代理出席して叩かれた会議室

立ち読みのために眼鏡をかけ変える

裏読みができずに愛を取り逃がす

高槻市 井 上 照 子

春彼岸寺へ供養の振り込みに

意地っぱり雪の降る日も万歩計

胃カメラを飲んで睡眠よくとれる

同居の身せめて笑顔で暮さねば

路郎読本面白い読んで自己を観る

豊中市 松 尾 美 智 代

笑顔よし言われストレスためている

赤ちゃんが笑うと周りまるくなる

ひとり言増えて寂しい笑い皺

携帯で友を増やして孤独です

よく絡む気嫌の悪い日の夫

豊中市 江 見 見 清

丸テール丸み話が入り混る

長生きをすればお見送りもふえる

質素でも人が繋っていた戦後

切り取り線書いては消した友が逝く

きっかけはジョークこだわりは消えた

豊中市 安藤 寿美子

椿咲く早速メジロ来てのぞく
大地震ここでは祈るほかはなく
知り人が一人宮城に居るのです
指組んで祈る形に気をこめて
コンニチワ固有名詞は抜けたまま

豊中市 水野 黒兎

出不精を外に誘えば風薫る
湯にほだけ海の広がる若布汁
グーグルでわが家探して見つからぬ
平成の竜馬を採す菜の花忌
プランターのローズマリーに春匂う

豊中市 藤井 則彦

孤独よりずっと耐えられない孤立
広辞苑にも愛夫家は見当たらぬ
来世また逢おうと妻に予約済
そのうちに電話しますは別れたな
恥じらいの仕草で恙無い夫婦

豊中市 松村 里江

良縁とすんなり決めたくすり指
一寸ジェラシー交じった拍手しています
森の風妖精達がお迎え
かくし味足しライバルに差をつける
研ぐほどの牙ではないがかくし持つ

富田林市 中井 アキ

でで虫もわたしも春を待っている
午後からは私だけのスケジュール
ふところの深い夕陽も迷っている
他人行儀に斜めから見る影法師
冬空の星と明日の台詞など

富田林市 片岡 智恵子

生きているうちしか感謝返せない
懸命に生きると光る明日が来る
国籍を越え傷ついた街想う
申告がすんなり梅の香が匂う
日々充実歳のこと等忘れま

寝屋川市 籠島 恵子

鳥になろう先ずはダイエツトをしよう
閉じこめたのは自分括弧の中にいる
懲りもせず春の誘いにのっている
キリトリ線の上でドタバタやっている
それからのメールは空気読んでいる

寝屋川市 森

茜

ビルとビルの谷間に青い空あそぶ
隠せない私の真実が咽ぶ
老齢のいたみに添寝してしまう
切株に坐る寂しいぬくもりと
想い出に甘える湖の静けさに

寝屋川市 平松 かすみ

ばあちゃんの午睡胎児の形して
出来ること褒めて日日好日になり
断捨離はあしたあしたと戦中派
平凡な日記ですけど我が歴史
ユニセフへ戦後のお礼送ります

寝屋川市 太田 とし子

睨めっこ美人をポイと捨てる時
捨て猫ものんびり梅の花盛り
恋の唄齢に関係ござんせん
首ひとつ愛しい金と怖い金
川柳も万葉集も恋同じ

寝屋川市 富山 ルイ子

何処に起きても地震おかしくない日本
妹の安否確認して安堵
改めてリユック確かめ追加する
終夜テレビつけっぱなしで地震見る
避難場所改めて話し合う

羽曳野市 福田 悦子

あじさいが女心を見せつける
母の日に贈る言葉はありがとう
初節句背負う期待のこいのぼり
柏もち新茶が届く日を待とう
夏バテの予防今年も梅を漬け

地震お見舞胸も頭も痛い

春へゴー光る猫柳もボクも

再婚の家族にユニークな絆

そっぽむくリングいつのまにか熟れる

パリコレの服はステージだけが着る

羽曳野市 安芸田 泰子

春風に運ばれて来た大きくしゃみ

四月馬鹿無口な孫に担がれる

母の日も母の差配の厨こと

境内を抜けて買物梅見頃

千本の桜見渡し父母眠る

羽曳野市 三好 専平

ボックリといきたい気持ちみんな持ち

右顧左眊するには視力弱すぎる

めくっても暦のピカソ横を向き

柊の花にさびしい雨が添い

麦を踏む姿も消えた葛城路

羽曳野市 酒井 一壺

出る前に叱った悔いが消え去らぬ

悔しいが俺が負けだと酒をつぐ

主流から漏れて人間らしくなり

出直しの効かぬラストで笑いたい

初恋の味知らぬまま妻となり

羽曳野市 徳山 みつこ

羽曳野市 吉村久仁雄

断りが周到すぎて次が来ず
生きる意味問うため酒は週七日
一眠りしてからジョークだとわかる
情けにはすぐに溺れる冬の海
悪友の酒の誘いは断らず

羽曳野市 永田章司

人間も出来たらいいな染め直し
珍しい手書きの手紙情がある
ネットにはビジネスもあり革命も
婚活も親がしゃかりきセットする
花粉症俺は無縁とくしゃみする

東大阪市 米田水昇

歳聞いて少し若いとほくそ笑む
夫偲ぶ旅の思い出椿咲く
命までとる大津波いたましい
神仏の戒告なのか地球荒れ
柏手を打って日本の無事祈る

東大阪市 北村賢子

あの人もこの人無事か大津波
住み慣れた家が壊れるえぐられる
三一一ホワイトデーが吹っ飛んだ
DNA亡父の誇りが邪魔をする
娘の安否わかり安堵の酒にする

東大阪市 佐々木満作

春爛漫暫し遊子の足止まる
ぎりぎりの交渉折れて涙飲む
休肝日お酒のあてばかり並ぶ
おそろおそろのお小遣いの値上げ請う
カラオケの十八番はいつも酒の唄

枚方市 寺川弘一

乾杯の前に酔ってる祝賀会
堪忍と我慢鎧に仕立ててる
ブーメラン出発点を忘れない
地平線より水平線に夢がある
左脳から漏れが近頃ひどくなる

枚方市 伊達郁夫

折鶴になって羽ばたく再生紙
不器用に生きる靴下干して春
品格のように座った箸袋
諦めぬ涙が虹になるまでは
ごみの日にごみを出さない日のうつろ

枚方市 小林わかこ

飲みこんだ言葉の謎は解けぬまま
大人にはいつなったのかわからない
寝台車雪の世界が待ちうける
シールにテープピンあと残し子が巣立つ
掴めない明日へとにかく眠ろうか

枚方市 安達 忠央

老僧が走らせる筆枯れた沓え
バチンコに集中無念無想なり
金婚へ何度か考えた別れ
みたらし団子あの時の恋思い出し
逆転負けリンゴ皮ごと丸かじり

枚方市 海老池 洋

春よりの便り待つてゐる樹氷林
構図からはみ出た線がやがて生き
灰色のあたりで妥協してしまふ
一枚のカルテに凍てているいのち
門前払いに耐えて男の貌になる

枚方市 丹後屋 肇

ライバルの有頂天にほくそ笑む
いい出会い五臓六腑が舞い踊る
ミシュランの三つ星別腹が欲しい
バーソナリティー正反対の睦まじさ
極楽タイム半眼になる置炬燵

枚方市 二宮 山久

梅一輪咲いてなごみのペアシューズ
僕の夢形にできぬもどかしさ
満ちたりた老後へ趣味がまた一つ
献金という名目の落し穴
嫁姑上手に生きて軒並べ

枚方市 二宮 紫鳳

おみくじにはずみをつけた今日のツキ
ブライドを捨てて老後を丸く生き
ひなケーキ孫と手作り祝う膳
春一番シューズの先につくしんば
ユーモアで心なごますティータイム

藤井寺市 吉田 喜代子

義母介護歩幅ゆっくり梅の里
有り難い朝食すめばしゃんとする
試飲して酒倉めぐりいい気分
ひなまつり招待される七十五
花粉症今年仲間になる予感

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

春はきらりと光り出すボエム
哀しいと言つてしまえば済むものを
パソコンのように素直になつてみる
うす味の部分も賞味してほしい
お近付きの印にしては重すぎる

藤井寺市 増井 ヨシ枝

クラス会恋の欠片があちこちに
トシなんて決して言わぬおばあさん
イチゴ大福老母みる友へ御茶請けに
豪快に笑いパワー撒き散らす
不用の火鉢メダカの学校賑やかだ

藤井寺市 津 田 シルク

藤井寺市 鈴 木 いさお

雪女らしくなれたとこの冬は

象の足ですうさぎ跳びなど出来ません

無農薬メッシュの野菜出来ました

介護する先に惚けたが勝ちと知る

イケメンにこだわりの婚活が続く

藤井寺市 太 田 扶美代

落しても壊れなかった自尊心

春の風つい桃色を着てしまう

バラの樹に必らず宿るキューピッド

魂は極上ですと言いつける

響き合ううちにいつばい話そうよ

藤井寺市 俣 野 登志子

順調に老いているから良しとしよ

衣食住足りて梅の香心地よい

背のファスナー夫の世話になってます

お世辞見え見え光栄ですと言っておく

平凡が一番いいと古稀過ぎて

藤井寺市 伊 藤 アヤ子

七十七路に足を踏み入れまだ達者

叱るのはそこそこにして抱き締める

金婚の記念に買ったマグカップ

逝った人妬む気持は過去のこと

知らぬ間に妬いていたかもあの人に

世界一安心できる人という

三歳のあのねを注意深く聴く

人生の第四コーナー今回る

フエイントをかけて妻から身を躲す

やさしさも脆さも持った頑固者

藤井寺市 若 松 雅 枝

菜畑に今年の蝶が舞い始め

若やいで曾孫と春の風を招ぶ

彼岸会に姉妹揃って数珠を繰る

まぐれだと謙遜してるだけなのに

下手なジョークに無くした代償大き過ぎ

藤井寺市 高 田 美代子

香焚いて眠るわたくしの至福

走りませんわたしも歳をとりました

運命とここに書いて周章でない

相槌は打たぬ共犯者にならぬ

有り難いことで大阪に生きる

箕面市 出 口 セツ子

自分だけ常に正しい気の夫

暴力で言うことかせようとする

遠くに居る子が気にかかる地震です

余震続く独り暮らしの子を案じ

つながらない電話へ子から電話くれ

箕面市 広島 巴子

八尾市 高杉 千歩

野仏に会いたくぶらり一人旅
タンポポの励まし楽しウオーキング
ほろ苦さぐいと一杯路の臺
牙をむく自然の猛威術もなく
惨すぎる津波中継手を合わす

守口市 井上 桂作

大阪府 野田 栄呼

本棚を眺めて不死を考える
ぬるま湯の老人なれどよいのか
大阪の主婦は賢い消費者だ
国技なりまかりならんぞ八百長は
この冬は異変の連鎖大雪も

八尾市 内海 幸生

大阪府 初山 隆盛

助手席は父だから乗る仮免許
点滴の間の一句がでてこない
呆けきつて仕舞えば天国かも知れぬ
停電が文明開化の末路指す
言う資格無いがときついことを言う

八尾市 宮崎 シマ子

大阪府 桑田 ゆきの

日本を潰しにきたか大地震
惨状の新聞ひとりでに涙
南海地震きたらこうかという不安
浜育ち津波の荒さしみじみと
梅も桃もこの惨状に蕾とし

躓いた石覚えてる杖の先
後出しジャンケン責めないで八十五
苦勞して解いた紐も捨てられる
引き際を思う強氣とも弱氣とも
まだ空いてます弥生三月予定表
偶然に出会った友と旅の宿
便利さを争い次代へ残すつけ
健康へ自齒が大事と齒の治療
望んでた暇に出合った味気なさ
近隣へ募る不安の高齡化
落の臺いきなり春を告げられる
家事分担愛の火の章水の章
むらさきの矢絰似合う女想う
肩のこりむかし三八銃担う
ありがとう辞世に置いてゆくことば
足踏まれにらめばにらみ返される
風ほのと潮の香まとう梅日和
世の憂さを仁王がにらむ門仰ぐ
喝采の中で紡いでいる絆
人生の黄昏時の灯を探す

大阪府 米澤 俣子

身の丈に合った暮らしに無理はない

桃は少女梅は美人の佇まい

勞られ過ぎてても氣持萎えてくる

主婦という尽きぬ円周まだ走る

アバウトな記憶に腦の中だるみ

神戸市 山口 美穂

仏壇へお願いごとが絶えなくて

お祝いが届きびつくりわたし喜寿

老犬もわたしも頑固今日を生き

自分史の自分に少し飾りつけ

自分への嫌悪言わねばよかったと

神戸市 木村 貴代子

喜びを数えて生きるリラさくら

消えかかる記憶追いかけ丸一日

食べたいと思える幸を噛みしめる

氣の早い桜だよりに頼ゆるむ

他家の梅毎日通い友にする

神戸市 伊勢田 毅

妻の留守また遺言を書き替える

病院で四科回って日が暮れる

鼻筋を塗るとピエロの顔になる

なにもない部屋にいつぱい朝日入れ

二兎を追う野望は見せぬ課長補佐

神戸市 山田 婦美子

自分史に器用貧乏と書いておく

一日一善心がけてる自分訓

一日一回鏡に向かつて笑ろてみる

氣付かない自分のよさもちよつと見え

短命の家系が吉となった喜寿

神戸市 山崎 武彦

大物は写真の隅で目立たない

大物ものにこにこ孫の馬になる

原発の神話揺らいだ震度七

晩学にあこがれ明日のページ繰る

あこがれた都会で蟻のひとりです

相生市 中塚 礎石

人並みと言われ笑っている暮らし

白と黒夫婦いまでは同じ色

千鳥足家を忘れず辿り着く

打開策運んでくれる伝書鳩

悪役を背負うてくれる母達者

明石市 梶谷 和郎

空腹を夢で満たした青春期

夢のある作り話に癒される

謎解けてゆつたり入る終い風呂

陽を浴びて蒲団は母の匂いする

嘘ひとつついて氣付いた空の青

芦屋市 黒田 能子

大根の白さ素直になれました

昨年まで価値あるものと思つてた

好きだから今日も一緒に食べて寝る

ゆつくりと自分流儀で泳ぎます

一日のゆとりふたりのお茶タイム

芦屋市 竹山 千賀子

かに鍋の横は無口な人がいい

孫のもつ夢と一緒に夢みてる

毎日を七分咲きにし疲れない

ふる里の風に抱かれて飛ぶ揚羽

乗りたくない車の横がへこんでる

尼崎市 軸丸 勝巳

灯油高知らぬか去らぬ寒気団

居座った寒の戻りにおでん売れ

スカイツリー大きな土筆隅田川

手書きして税を実感申告書

指で押す文字が世界を変えてゆく

尼崎市 林 昭三

八十路なり三割負担それはそれ

小市民私達でも国案ず

どう見ても皆で日本壊してる

慣れているオールセルフの昼餉なり

久し振りの母の電話も花粉症

尼崎市 山田 耕治

電気よしガスよし指差して出かけ

たまたまの留守に宅配便来てる

割勘で聞き役になるお茶を飲み

幹事また慰労会でもまた幹事

聞いてないカラオケ最後まで歌う

尼崎市 長浜 美籠

被災地の画面いくども掌を合わす

コンビ二へ時の流れを買いに行く

跳び立ったその後聞かないシャボン玉

噛み合わぬ紙一枚に闘志わく

欠点もそこそこあって安らげる

尼崎市 藤岡 りこ

命の電話心の病探り当て

雲に乗り風を渡つて春が来る

制帽で笑顔の孫のメール来る

探し物見つからぬまま目が覚めた

月も星もない天空はただ暗い

尼崎市 加川 靖鬼

爆発の魅力が失せた丸い石

満月の大きく見える世の不思議

塩胡椒手馴れた腕にある自信

ひと言が多くて人柱になる

遺伝子のリレー桜が駆け抜ける

加西市 金川宣子

しみシワもなかった頃の友と会う

へその奥穿り出せば母がいる

耳だこが母の小言で出来上がる

冬籠り春の化粧で浮かれ出る

お待たせと春の釘煮をお届けに

川西市 西内朋月

格安の旅館が増えていく不況

予約する事は出来ないお葬式

塩漬けの株券みんな売り払い

権利証を守ってくれる貸金庫

水晶の玉に答が浮いている

川西市 米原雪子

古稀なんて未だ青春と言う卒寿

皺いっぱい笑顔かわいなおばあちゃん

手作りで思い出開くひなまつり

ゆっくりとやったら悠悠と見られ

手を振って見送る師の目に光るもの

三田市 北野哲男

まだまだと古稀の祝で電子辞書

雑学で綻び縫って喜寿を越え

アルバムの中の切れない物語

パソコンのマニユアル目次見てやめる

玉手箱早目に開けた友見舞う

三田市 久保田千代

ひら仮名で書くと女が柔らかい

幸せを女は皿に盛りつける

解約の通帖自分史の一部

一瞬の美を競い合う写真展

目から耳から不安を探す苦勞性

三田市 上垣キヨミ

辞書に知恵借りて至福の五七五

人生の春に出合って翔んでいる

銀行へ行けば血圧上がり出す

医者よりも生命線を信じたい

命日は亡夫に出会う花を選ぶ

三田市 石原歳子

ちよつとだけ本音覗いた座談会

到来の霜降り肉に子らを呼ぶ

水仙のように背伸ばす霜の朝

春うらら菓子屋さんは忙しい

イカナゴが市場へ春を連れて来た

三田市 福田好文

物探し半日過ぎる古い二人

カルチャーから帰った妻にお茶を入れ

万歩計春を探せと急き立てる

肘掛けの椅子を知らずに定年日

説法する尼僧の笑みが気にかかる

三田市 白井二英

西宮市 片山忠

ケータイも悪用すればキリがない
ケータイはゲームしだすとキリがない
カードなど数持ちだすとキリがない
うまいもん買いこみだしたらキリがない
パチンコに首つつこむとキリがない

西宮市 秋元てる

長生きに自分が一番びっくりだ
幸せのと真ん中に居るいい目覚め
くつきりと故郷の山は年とらぬ
ぐるぐるぐる丸つけたのにまた忘れ
気のきいた挨拶出来ずお辞儀二度

西宮市 西口いわゑ

紅梅の華やかにして寂もある
盆梅を孫の自慢をするように
私に泣けてくる歌晴れる歌
近松のドラマを映す雪が舞う
お水取り済まなやつぱりあかんらし

西宮市 亀岡哲子

父母祖父母越えてまだまだよう遊ぶ
着ぶくれて燃費節約春はそこ
転がしてみる常識の裏表
成人の娘へブランドリーチョコレート
良く遊び良くバイトして就活す

ありがとう言えない人に席ゆずる
飼うまではペット嫌いのおじいさん
町内の坂にスタミナ試される
紅茶しか飲まぬ用心深い人
傷ついた犬は飼い主にも吠える

西宮市 山本義子

悪女になる電子レンジのせいだろう
晴天に罪悪感を干している
昭和一桁すばり常識ずれてくる
檜山は片道切符ですね 南無
桜木も歳とりました わたくしも

西宮市 緒方美津子

手袋の忘れものあり梅便り
牛や鶏埋める家族のこと思う
街で会い思い出すのに小半日
薄氷孫の長靴春を割り
女の声ばかり乗せてるバスツアー

西脇市 七反田順子

二月八日揚げ雲雀見た程好い日
寒うても山茶花笑うて咲いている
寒天を食べてサラサラ血を洗う
爆発だ太郎の絵から漏れてくる
罨ひとつ黄昏どきにはまります

姫路市 古川 奮 水

奈良市 阿部 紀子

春ですぞ言うな啓蟄雪が降り

理の掟学んだ目元涙見る

善悪を母が教えて丸い家

オルゴール聴かせて赤子昼寝さす

手袋の油よこれに陽が笑う

奈良市 天正 千梢

ひと口に熊野古道と言うけれど

どの病も老人性が上につき

ぬくそうな座布団敷いて無人駅

目さましに用事がなくていい身分

でたために生きて胃痛など知らず

奈良市 加門 萌子

春よ来い予期せぬことが内や外

正直に芽吹く草木に励まされ

えらばれて賢人のはず政治家よ

今年またさくらを追える幸ほのか

茶柱が立たぬ粉茶で満たされる

奈良市 辻内 げんえい

名古屋から国政変える狼煙上げ

休火山休み続けていてほしい

ゴミ出し日夫婦模様が見え隠れ

定年で積んだキャリアもご破算に

イツチャイとやつと言えたらもう二歳

五月病息子の部屋で泣いてます

逝くまでに謝りたいと思うひと

妻入院ゴミ缶出しもままならず

阿茶曰く長生き秘訣粗食です

等伯の巨大涅槃図有り難き

奈良市 岩本 浩二

色と欲やつと捨てます八十路入り

世の移りじつと見ている道祖神

癌告知されたらきつと狂います

神仏におすがりしますオペの朝

アリバイは妻の鼻にてすぐ崩れ

生駒市 飛永 ふりこ

水仙が五欲を削いで蓄つけ

うす紙をはぐよう桃色の春に

一食を抜いてしゃぶしゃぶ食べ放題

十年のファイルに星の瞬きが

小鳥たち恋のハミング五線譜に

橿原市 安土 理恵

平穏な暮らし眠くてたまらない

もういいと言うまで後をついて行く

女系家族姉の束ねている絆

こだわりがあつてブランド包装紙

生きたい日生きたくない日春彼岸

大和郡山市 坊 農 柳 弘

シンプルに初夏を口説いている新茶

追伸の母の小言に触れて初夏

初鰯旬には旬の値と味と

浮雲にひと色足して茶摘み唄

打てばびびく阿吽の呼吸良き伴侶

和歌山市 福 本 英 子

久し振り先ずハグをしてご挨拶

お下りの服が漸く身に合って

はみ出した絵手紙元氣くれましたた

一過性でなかった春のランドセル

猛暑の敵打ってくれてる戻り寒

和歌山市 玉 置 当 代

領収証掻き集めます年度末

啓蟄や虫もわたしも始動する

落ち椿愛でて濃い茶など憩う

情念がつのり蛇になり鬼になり

大津波をカメラが追っている怖さ

和歌山市 武 本 碧

縫れたら軽いジョークでときほぐす

軽く見たらしい思わぬ返事くる

ほほえみで苦手な人を中和する

咲き切ったあとはひっそり花の影

日々好日夢の欠片を食べている

和歌山市 松 原 寿 子

笑わせて本音吐いてる腹話術

素通りは出来ない耳で病んでいる

くじ運はないが覚めない夢を追う

わたくしの個性に春の彩を足す

ぬるま湯に浸り疑問符浮いている

和歌山市 上 田 紀 子

一億の涙を誘う大地震

新緑の森から童話踊り出る

途中では帰れぬきつと出る噂

美しい海を愛した森の精

つつ込みとボケで丸い輪を描く

和歌山市 喜 田 准 一

買物へ仕分けしたメモ渡される

身の丈を知って見せない足のうら

五時からの男同士で旨い酒

格好をつけると猿に笑われる

死ぬまでに捌き切れない積み残し

和歌山市 岩 本 美 智 子

救急へ身体のボロをみんな出す

娘の介護幸せすぎて恐くなる

積雪へそつと足跡つけてゆく

雪だるま親父の声がよく聞こえ

大臣様インターネットどうですか

和歌山市 堀 富美子

田辺市 岡 本 昇

手の届く距離に守られ血の絆
病室へ笑い袋を空にする

草食系女に髭が生え出した

飾らない友のハートに添うてゆく

一斉に朝が鳴り出すキャッチ音

和歌山市 松 尾 和 香

二二一段初観音へ負けないぞ

年金で夢を追ってる世界地図

暮し向きどう変わろうと自然体

風を詠み素朴に生きる私彩

長短の一生響く滝の音

和歌山市 柏 原 夕 胡

順風へちゃっかり乗っている女

三日だけ泣いて女は若返る

にっこりと恋に背中を向けられる

反省のポーズが猿よりもうまい

花を買うごめんなさいが言えた日に

海南市 堂 上 泰 女

燃えている薔薇に助言が届かない

庭に梅咲いて寒波が来るそう

デパートに高嶺の花がまだ威張る

昼の月と仲良くなった散歩道

偉人には努力の影がつきまとう

くたびれた背広が語る人生譚

おしゃべりは老後の肥しだと思ふ

梅一輪病床の母紅をひく

田舎道はつきり切って四車線

春一番目覚めた熊の大欠伸

鳥取市 鈴 木 公 弘

午睡から覚めたテレビが揺れている

人間がなんだ計器壊してくる津波

未曾有と言って逃れる研究者

噂はうわさ化学反応せぬように

自衛隊過剰に評価してならぬ

鳥取市 岸 本 宏 章

たけのこをパンダもきつと好きだろう

合格のお礼の絵馬がよく目立つ

ドラマだけ字幕表示をオンにする

およそ3の円周率が分かりよい

褒めすぎの弔辞へ主がくしゃみする

鳥取市 夏 目 一 粹

暗闇が独りの人にしてしまう

わが鎧ダウンジャケット春を待つ

玉子割る五万羽の鶏思いつつ

貧乏で育ちシンプルライフ好き

百円ショップで夜なべの亡母思ふ

鳥取市 武田 帆雀

肩に鉄腰に鎌差しい景色
たこ壺は孤独愛するいいところ
チャンネルを変えて見なはれおもしろいぜ
負けて勝つことを憶えて喜寿の酒
国会はすったもんだと遊園地

鳥取市 鈴木 一弘

唇を揃えて咲かすやぶ椿
ひな壇のあかい毛氈ゆめのあと
限りなく天をにらんで米寿過ぎ
紅つばき優しく積もるぼたん雪
いつせいに口紅をひくやぶ椿

鳥取市 中村 金祥

入口の先に鬼面の影が見え
育児休業へよくよく椅子を温める
ブランクを越えて夜学の門たたく
厄介なところでデカイ揺れが来た
シンデレラになった気分で見えるドラマ

鳥取市 春木 圭一郎

協力者必死にやればきつと出る
情熱と意欲で摩擦乗り越える
正直に本音を言える友がいる
初対面弱い自分をさらけ出す
適当な距離保つから長続き

鳥取市 平尾 菜美

かくれん坊まだ続けてる憎い人
はらはらと見てる過保護に手が出せぬ
糧生かすためだ私もだしになる
廃屋を満たせぬ父のマニフェスト
中心をねらう車輪の寒稽古

鳥取市 有沢 せつ子

満ちたりた目覚めを昨日からもう
春の陽が机の向きを変えさせる
頬紅をさしてわたしに元氣足す
不器用でチャンスに傘が開かない
へた付けた苺は鮮度誇ってる

鳥取市 吉田 弘子

三月の涙いろいろ走馬灯
豊作を占う行事春の音
洗濯日和言うほど続く傘マーク
人間らしく生きる叱られてほめられて
三食のメニュー脳トレ言うけれど

鳥取市 太田 幸枝

ミルク代稼ぐ夜なべの手がはずむ
特別な意味はないけど酒あげる
嫁さんに特別弱いお爺さん
偶然に合った二人が結ばれる
楽な道選んで老後つけがくる

鳥取市 宮 脇 道 子

食糧を買溜めしてか母笑顔
白萩を子等に植えつけ父は逝く
お弁当を待つ身になって老い暮し
崖っ縁で見てる桜に明日はない
葉漬け散歩も出来て春がくる

鳥取市 加 藤 茶 人

もういくつ寝ると悲しき受験生
本当の腹はどうなのその強気
合コンの引き立て役でまた呼ばれ
わだかまりすべてをなくすのも涙
目覚ましを四 五回鳴らす春の朝

鳥取市 福 西 茶 子

ズッコケて反省をしてまた転ける
思いやり残して愛は旅に出た
妻が看ることを信じて ぐうたらで
カンニング時代変ると術変わる
今年も無事七十歳の雛飾る

鳥取市 近 藤 佳 子

日日好日診察券が欠伸する
母の命日カサブランカに母の笑み
ひとつでいい良いこと期待して米寿
勸善懲惡の髻物に浸ってる
見る人もない銅像に雪つもる

鳥取市 田 村 邦 昭

願望がかない不断の顔になり
眠らないときの兎は春を跳び
雑草に教えて貰う底力
いいポスト貰ってからの意地の無さ
窓開けて明日の風を呼んでみる

鳥取市 永 原 昌 鼓

生きているあかしカーテン開け放つ
生きているあかし苦もある楽もある
生きているあかし今夜も旨い酒
生きているあかし老いても伸びる鬚
生きているあかしに今日も句を捻る

鳥取市 前 田 孝 子

どっかんと肝の据った妻である
大人です胸のマグマはおさめとく
血管とハートのもろさ致命的
腹の立つ事は一日経って言う
一番は夫の居ぬ間の空気です

鳥取市 竹 口 清 信

四苦八苦しても極楽待つてない
極楽の一等席は満員だ
運命と言って仕舞えば逃げになる
逃げないで運は掴みに自分から
幸せも過ぎると顔を出す不満

鳥取市 池原 天馬

忘れもの思い出してはまた歩き

ジジババの息災願ひひな飾る

ワンカップ長生きしてと話し飲む

戦死の友あれから日本語りたい

あとわずか遺言はない生かされた

鳥取市 田中 一眸

はんりの口調に拳上げられず

子を送る母は気丈に笑み作る

梅の香に心の厚着笑われる

一番でなくても君は可愛いよ

淡雪に叶わぬ恋の願かける

鳥取市 池澤 大鯨

犬小屋に入口ひとつあればよし

自動ドア風の重さで通り抜け

表から来ないネットが部屋に来る

日の当る場所に入口つけている

裏口でサイドビジネス本命よ

鳥取市 中宇地 秀四

耳たぶが溶けそうになる甘い声

忘れぬ未練が落とす一滴

お弁当作る笑顔も母の味

おおらかに生きて自分史悔いはない

やり手とは法の裏道行く事か

鳥取市 西川 和子

半世紀こんなもんだと振り向かぬ

年金の中で大海望めない

医者通い自分で立っていたいから

城跡の桜並木へ車椅子

なるように成ると明るい楽天家

鳥取市 奥谷 彩子

啓蟄の子出るには出たが職がない

今日も元氣一人芝居の幕あける

草千里未来に弾む靴を買う

君が代に戦の影を問う世代

マグマ溜め人も地球も乱おこす

鳥取市 高浜 勇

悲しみの別れ人間強くする

一杯の珈琲でこころはページユ

行く道のかなた紫かすんでる

枯れ芝に心が寒い火をつける

セピア色俺の人生こんなもの

鳥取市 土橋 はるお

旅に出る時には数珠を離さない

父さんは子等の古靴履いている

僕んちの目覚まし役はお爺さん

他人の飯食わせりや早く目覚めよう

ホイホイと野球賭博をしておった

鳥取市 深澤 千恵子

ありがとう言つて感謝の日を終える
我がままを言つて親しさ確かめる
円満の秘訣小さな我慢から
手の平に乗せれば消える淡い雪
はやぶさとさくら日本をつなぐ旅

倉吉市 野口 節子

無学でも愛の深さは痛いほど
育児書をしっかりと抱いて海は風ぎ
溢れ出る愛が育てたもやしつ子
吸つて吐いて今日も一日恙なし
健康を自問自答の祝い酒

倉吉市 山中 康子

早朝の寢床に浮かぶ二句三句
的はずればかりの矢にもある一念
お転婆に奥ゆかしさを届けたい
押えてた我慢ポロリと出てしまひ
おくすり手帖見せて安心しています

倉吉市 猪川 由美子

竹島を愛し争う憎みの日
パンダちゃんVIP来日大騒ぎ
子ども手当てには出来ぬせぬもせぬ
極上ビール偶に飲みたい癒し系
ホワイトデーモテる夫で妻準備

米子市 白根 ふみ

いざこざをはつきりさせて角が立つ
油断して其の日その日が溜りだす
約束を果たしたメモが捨てられぬ
わすれ上手でここまで生きられた小技
豪雪が戦禍のごとき跡形を

米子市 高田 振作

ここだけの話が歩き花咲かす
不器用はわが家の血筋一輪車
猪口一杯五臓六腑が待つてます
道の駅トイレだけ借りスミマセン
赤い糸たるみかけたら妻が引く

米子市 吉田 陽子

三十回忌まだ命日の浅きこと
親離れうまく育つたことにする
総括をすると自分か浮き上がる
力瘤出しやばらぬよう言いさす
二人分つくる料理を生き甲斐に

鳥取県 西谷 悦子

身の丈の個性で凜と一歩出る
我慢ひとつ崩してみたらさわやかに
五線紙に今日の楽しい音符書く
日記には忘れたこと書かずおく
鬼も棲みわたしを監視してくれる

鳥取県 岩崎和子

新子さんの本ズリ置く枕元
年忘れ愛だ恋だと歌ってる
酒キライ夫横目にビール飲む
ビール飲む友が欲しいな春の宵
ああ青春ここまで来たかおぼろ月

鳥取県 山本正光

ふところ手固く握っている砥石
じっとして居れぬ朝からいい天気
ど真ん中射抜く矢尻を温めてる
煩惱に油を注して句を探る
政治家に劣らぬ詐欺師くち上手

鳥取県 山下節子

温暖化蜜蜂までも輸入する
禅寺の修行は廊下磨きから
うるさいと言えば軒はすぐ止まる
ブランクをうめる努力はしています
場違いと悟った後は黙秘なり

鳥取県 北村稔

一粒の俺の一票世が変わる
ふるさとのあの屋根見えたお母さん
豪雪よ俺のハウスを何故こわす
やんちゃですほめる言葉がみつからぬ
プロポーズ言わぬあんたがもどかしい

鳥取県 細田裕花

幸せなイルカぼこぼこ持論吹く
楽をしてどんどん老けてゆく手足
自由席の友がちよくちよく声掛ける
春風に自由な靴が弾み出す
ひらがなの愛を注いだ頃もある

鳥取県 竹信照彦

出不精を深化させてる雪と雨
訪ねやすい家は独居のお友達
雪被害のキウイの棚を持ち上げる
剪定もやっと済ませて屑拾い
読むほどに本の重みが染みてる

鳥取県 深田俱久

鯉のぼり孤軍奮闘過疎のむら
M8・8日本にどんな恨み持つ
下がるもの探し値上げに耐えている
恋心三寒四温に揺れ動く
傷口を舐めて癒した昭和の児

鳥取県 石谷美恵子

君が代へ父さんだけが起立する
正直に生きて恥ない低い屋根
反省が廊下の隅へ小さく居る
一大事夫はいつでもいてくれぬ
蜜の味たらふく食べた自己破産

鳥取県 松川行男

時は問わずニュース速報見るために
町報に子供の笑顔今月も

雪ん中白兔伝説耳をたて

チャンネルに怒りと笑い交差する

忘れもの塔婆もありと聞く浮世

松江市 三島 崧 丘

後期高齢一步も二歩も引く余生

修復のできぬ翼を持て余す

ライバルにしつばを見せたのは不覚

わたくしの中に命の川がある

傷ついた桃のひとつが売れ残る

松江市 小川 注 湖

この土地に馴染んだ枝がのびやかだ

温もりを盛ったお粥をすする床

へそくりも溜まると心豊かなり

報道に今日も広げる世界地図

白寿今脳裏に残る弾の音

松江市 松本 知恵子

東へ西動く小さな使命感

うきうきと鍋囲んでるもどり寒

梅咲いて公園デビューベビー靴

女です鏡にポーズとってみる

たしなみの鏡はいつもピッカピカ

出雲市 伊藤 玲子

日の本を揺るがす巨大なる地震

コッコツと生きる証を波が呑む

スニーカー揃えあなたを囁す

塩分を減らしも少しご一緒に

生きられる流す泪のあるうちは

出雲市 小白金 房子

沈丁花匂う墓参の回り道

補聴器がポロリと春の音拾う

スカーフの黒がかなしい葬の列

通販のチラシが春を誘い出す

父さんの苦言聞いている膝小僧

出雲市 多久和 敬子

散歩道挨拶する子しない子も

ふわふわと風船揺れて孫を待つ

真ん中に嫁の自慢の筑前煮

夢の中欠けた記憶が甦る

あの音が今でも私眠らせぬ

島根県 伊藤 寿美

誤字のある老母の手紙に臘梅が咲く

徘徊の母が戻った鈴の音

震度六わたしの心も液状化

つぶやきがマイクに洩れていた迂闊

風花や所詮独りと言いつ聞かす

倉敷市 撰 喜子

包み紙とれば質素なプレゼント
かくしても包みきれないスキヤンダル
男女の仲積極的になれぬ歳
突然に友の計報の届く歳
髪形のきまらないとき着る帽子

美作市 山本玉恵

シナリオをがらりと変えた鬼の面
一途とや何とむなし片想い
名残り雪も溶けたグラスも一雫
マイペースのブラン他人の差出口
春眠に朝のリズムも狂い勝ち

美作市 福原悦子

終章の駅にやっぱり亡母が居る
光らせた鍋でストレス消している
真直に人間を抱く紙おむつ
煩惱を消し去る雪が降っている
錆びても母さんの針効いている

美作市 大石あすなろ

時効まで胸にあずけておく秘密
どちらにも味方をしない耳である
まな板と春のコントを練り直す
箸二膳もしもの時の話する
スローライフ時々捻子を忘れない

竹原市 時広一路

手相くつきりまだまだ生きてゆけそうな
真つ直に歩く欲の無い靴だ
賽銭の硬貨確かな音をたて
水としてうまれ海への旅のどか
花一つ一つが持っている笑顔

竹原市 岩本笑子

テレビ欄ここもあちらも雛祭り
他人事のように報道するマイク
内視鏡悪い事などしてません
三ヶ月分の薬と帰る日よ
入院も経験ですと割り切ろう

府中市 馬場利子

独り言風に聞かせて鋏をふる
古傷に触れると浮かぶ父母の顔
まんさくの黄へこだわり解けてゆく
コーヒード朝の空気を軟らげる
人生の花咲く日々を追いつけ

府中市 岩本雅代

春風に押されて浮いた重い腰
お湯の街外湯巡りの粋な下駄
健康は他人と出合う笑顔から
孫からのカキの土産に生き返る
息抜きにカラオケ喫茶青い空

(藤岡ヒデコさんの句は74頁にあります)

自選集

小島蘭幸

髭剃っていると娘が来る妻が来る
大砂丘妻と駆けっこでもするか
点滴のぼとりと虹の輪になった
歪も漫画も置いてある書齋
真夜中の囃は父の書齋から

三宅保州

染まりすぎもう真つ白に戻れない
悪いようにしないと鮎をしゃぶらされ
レントゲンの時しかない深呼吸
煩惱はお志というお布施
屋根降りてから金槌に蹴躓く

宮西弥生

見て見ないふりも上手なバラの花
人の血をもらって生きてます介護
夢一つ下さい列島叫んでる
春の字に溺れてすこし馬鹿になる
身の内と許したばかりだます春

八十田洞庵

お母ちゃーん叫ぶ声母水に消え
騒音に流れてしまう正義感
矢印に逆らい迷い深くする
ネクタイに監視させてる妻の乱
消防士紅蓮の中へ命がけ

両川洋々

履歴書が欠伸したまま新年だ
君のハートに春を吹き込むのは僕だ
号泣の果てに人間取り戻す
不況日本生きるハードル越えにくい
年金日までにお米も酒も切れ

板尾岳人

天変地異神の怒りか地の叫び
揺れ動く大地へ昼の月もゆれ
ベッドから転げ落ちるも天罰か
サクラさくら桜が散って母に逢う
妻の名を忘れたことがない無罪

奥田みつ子

天地の怒り凄まじ言葉なし
平穏という幸せに酔い過ぎた
白木蓮白い炎に励まされ
胸いっぱい春を吸いこみ出る元気
日々新たな今日は昨日と違う風

河井庸佑

逆風へ動かずじっと待つ余裕
一日を無事に過して取る仮面
見え透いた子の言い訳も聞いてやる
頂上で思いがけない風に遇う
急な坂無理に登らず回り道

川上大輪

搾りたての知恵ですひとつ如何です
晴耕雨読敵も味方も過去のこと
余罪ならいくらでもある足の裏
転居先は君の心と決めている
侮っていた給水のタイミン

木村あきら

碧い空日本男児よく泳ぐ
がむしやらの努力に運はついてくる
樹を植えて碧い地球を取り戻す
神苑に心打たれる五十鈴川
天山南路シルクロードの旅続く

小西雄々

夢のせた春の序曲へ歩も軽い
羽繕いして待つ春へ虹を織る
ご話の案内状へ年を知る
紅葉から四つ葉へ安全祈る日
近所には明治生れはもういない

斉藤 姦

人間が好きでまあなくなるカボチャ
天守閣さくら迎える顔をして
この道を行こうでこぼこだとしても
ありがとう素直に言える子の巣立ち
岩木山君をイメージして眺め

塩満敏

帰阪する日待つ燕がなければよ
熊蟬が夏が来るのを待っている
妻の庭今日も胡瓜の種を植えました
夏が来た杉句碑も汗をかく
新幹線で故郷の墓参したいもの

新家完司

つかい棒入れてボロ家をリニユア
三代バババ家族それも良し
仕事したい人に仕事があるように
ひよつこりとトトロが来そう雨宿り
箱根から西が私の守備範囲

恒松町紅

誕生日思いもよらぬ長寿箸
不自由な足を手先がカバーする
甘やかす孫もいなくて老い二人
ドカ雪に折れた庭木が痛ましい
まだ欲があるから物を貯めている

津 守 柳 伸

趣味多才招待される白寿展
生きたとは喜怒哀楽の繰り返し
花言葉慌てふためくプレゼント
星空に明日の英気を培われ
美しく老いねばならぬ志

遠 山 可 住

味つけのここから母の一とつまみ
ばあちゃんの味噌汁朝の三世代
フランスを三年食べて来たナイフ
三寒四温今年も届く芥子漬
アイデアを女性に向けて盛り返す

都 倉 求 芽

網わたりしながら春がやってくる
暖かい音を伝える春の闇
被害無限テレビへ箸がまた止まる
歯嚙みすれど後期高齢肩手足
これを機に与野党手を握ること祈る

土 橋 螢

借り入れの限度を知らず借りていた
丸坊主ではさむらいはつとまらぬ
狂わないよう清らかな水をのむ
煙吐いて大事ないのち確かめる
昭和史の影から飛んできた螢

中 原 諷 人

啓蟄の雪はどなたの怨み花
生ミルタつぷり苺かくれんぼ
パンを焼くコーヒ―淹れる城の朝
ちっぽけな城に六人四月ばか
おふくろの白寿ワインの応援歌

西 出 楓 楽

貼るカイロしのばせ伊達の薄着する
七十路まだまだ女磨かねば
ウエディングソングハワイを振るわせる (三男結婚 三句)
もしここに亡夫居たらという涙
肩の荷を下ろしてや々と余生くる

仁 部 四 郎

名も顔も見ずにカードはカネを出し
顔色を操る人を存じあげ
議場での雄叫び能ある人の顔
校長の顔をテレビが追い過ぎる
妻と主婦ピカソに頼み同じ顔

林 瑞 枝

新年祝賀祝うて爆笑ホームイン米子
粉雪の舞ういい春おいで青い空
さすが文才川柳五大家のお嬢さまよ
まあ素敵親友銀座の服を着て
マロンオレンジ神戸のケーキと神戸港

前 たもつ

人間おそろし啓蟄首を出し
よう食べた八万食を笑い合い
今日生きた快挙と思う歳になり
女性車掌の笑顔に和む郊外車
三十年妻の支えてバブテスマ

政 岡 未延子

多才な色をうまく纏める協和音
ほんの少し母校へ募金して和む
フィルムの中に止めておく内緒
年寄りになり家中を平らにす
幕おろす準備ドラマもシンブルに

八 木 千 代

(葉先生ご遺品の杖と)

幻にあらず師の優しさと杖の艶
この杖を支えに上る石の階
振り向くと危^{あぶ}なあぶなの足の跡
ありがたや今も大きな傘の下
月の下日の下鶴を折りながら

第124回 大阪川柳の会

日時 6月6日(月)17時開場 18時締切(席題なし)
会場 ホテルコムズ大阪 地下1階アーバンホール
宿題と選者(各題二句)
△袋 前川千津子 △行 方 板野 美子
△きつちり 木本 朱夏 △軽 い 住田英比古
会費 千円 欠席投句6月1日まで 本田智彦 宛
〒532-0025 大阪市淀川区新北野1-3-4 706

温故知新

川柳句文集『川柳寄席』(昭和51年発行)

不二田 一三夫

喪服まで借りて来たのにもち直し
全市停電むかしはこんな星月夜
死亡届ガム噛みながら受理される
生活向上やつと四球を得たほどの
誤植だらけのような人と添い
わが姓は一代かぎりそれもよし
土佐犬の元横綱は飼いごろし
机雑然枯れた一輪ざしは詩人
人生の傾斜へころげまいとする
貧乏人の足音へ子猫ついてくる
なに考えていたのかわが家通り越し
一歳の恋人不二田一三夫を狂わせる
鏡のウソつき着物が左まえ
骨揚げが調理師だった箸さばき
ボロボロにしといて沖縄身請けする
58分でここ大阪府岡山市
北まくらさせた姿の日本地図
雪空のバスへ四五人会葬者
犬抱いてコーヒーに来るミナミ屋
黙棒に前のヒップを見ていたり
作家の妻いつも背中へ話しかけ

川柳塔の

川柳讃歌 ⑦

木津川 計

還暦は男盛りであったよな

北野 哲男

「丑の年やけに、今年は五十八じゃ。家にじつとしておれば、もう楽隠居をしている時分じゃがな」と捨てられた妻が、情婦と出奔した夫を思い出す。ご存知「父帰る」は二十年ぶりにヨボヨボになって帰ってきた父を描いた。「人生五十年」の明治四十年頃、五十八歳は既にして老残であった。

が、現代は還暦が「男盛り」というのだ。

「人生百年」を哲男さんは遠望する。

充分に生きたと言つて死ねるかなあ

高瀬 霜石

「われはどきどき野心を抱いて死ぬ者あらじ」と子規は漱石に手紙を書いた。六年後、激痛の脊髄カリエスで逝つたとき三十五歳だった。弟子の漱石は朝日新聞に「明暗」を連載中、四十九歳でその生を終えた。あと数カ月の生命が与えられれば、生涯の最高傑作にな

つたと回りは惜しんだ。さらに子規の高弟・高浜虚子は八十五歳の一期であった。大「ホトトギス」の構築はなお未完であった。

霜石さん、「充分」の生はなさそうですな。

まだ誰も歩いていない道が好き

川端 一步

「この道より／我を生かす道なし／この道を歩く」と武者小路実篤は日向の国に理想郷と信じて「新しき村」をつくった。たとえ空想的、文学的であろうと、「まだ誰も歩いていない道」を実篤は往つた。

一歩さんやあかつき川柳会が、その灯を消すまいとされる鶴彬も「誰も歩いていない」プロレタリア川柳の道を厳しい弾圧のもと進んだ。どこにせよ未踏の地を目指す。それを男のロマンといひ。戦いと呼ぶのであろう。

怠けさせねば亀には勝つ兎

村上 玄也

しかし玄也さん、怠けず懸命に兎が亀を追つても、絶対に追いつけないと証明したギリシャの哲学者がいるのです。

一〇〇m先の亀を追つて兎が50m走ると亀は1m進み、兎がさらに10m追うと亀は20cm進み……兎が10cm前に行くと5mm……。結局どこまで走つても兎は亀に追いつけない。それが「ゼノンの逆説」である。

この際は、圧倒的非力な亀に「ああ栄冠は君に輝く」の曲はある、と言つてやりたい。振り袖を見れば値ぶみをしたくなる

上垣 キヨミ

「宝石の大きい方がよく喋り」という句が確かあった。身に付けたり、まとつたりの装身具や衣裳で態度が大きくもなれば、小さくもなるのである。

だが、宝石の大小や振り袖の値段が人格の高低を決めるのではない。財力のありなしを人格の条件に加へなかつた人間の知性に僕は感心する。人間の優劣は畢竟・教養のありなしに拠っている。とは別にキヨミさんは、類句は多いが人間の悲しい性をよく捉えた。

傷口を春のことばであたためる

木本 朱夏

東日本大震災。日本列島は満身ならぬ半身創痍、しかも傷は深い。3・11以前にこの句は詠まれたが、敢えて震災に牽強する。

広瀬隆は、それほど原発が安全なら「いつそ東京に原発を建ててみよう。ソ連（チェルノブイリ）を笑う高慢な日本の技術者に対する報いは、数年以内におそろしい形で訪れよう」（「東京に原発を」86年）と。

傷ついて震える被災者に「一杯春のことばを。

（「上方芸能」誌発行人）

麻生路郎句抄

(句集『旅人とその後の作品』から)

不死鳥

前書きのある句

天皇を迎えて

オーブンへ迫まるは初夏の民の呼吸いそぎ

天皇へ雨も挨りのたたぬほど

未亡人として天皇へ涙ぐみ

天皇も人気といふを御発見

妃殿下に出てほしかつた受話器持ち

天皇へ民のかまどが停電し

大阪も海が見へますほのぼのと

悼 青明

浴衣掛一寸いてくる旅なりし

桃哉を悼む

かなしくも池田は雲の青々と

長崎柳秀博士の渡欧に

東洋の皮肉をもってかしまだち

鮎美君の新婚を祝して

ふたりふたり人ごみのなかでもふたり

葉平君一女を挙ぐ

眼も涼しかろ鼻もたかかろ女の子

其象を悼む

行き先も知らさず句帳のみ残し

蘆村を懐ふ

その子等は一に一足すこと知らず

新しき職に就く

味は知らねどとりあける箸

檜重を悼む

裸婦かたづけてあるじ弔ふ

六〇号病室の人となりて

病臥しているに電話の印鑑の

一子を儲けた久流美氏に

原稿紙へ平二ところ書かれたり

佐渡支庁長に榮転された利生君に

栄転のうれしき四十五里となり

首相逝く

待ったなしの歩にさされたる犬養毅

悼 五葉

薬湯の隅にひとりの君なりし

新郎新婦に捧ぐ

よしや道は遠くともふたり

知らぬまに靴がみがけてあるもよし

柳秀・長崎博士に

停年は七曜表に用もなし



西 出 楓 樂 選

大洲市 花岡順子

父の手の固さは無駄に生きてない
子の巣立ち鎖ひとつを切り放し
働いた拳のなかには汗ばかり
家計簿に載せると無駄が見えてくる
ブライドと欲の深さが釣り合わぬ
算盤で話をつけにくる男

加東市 安達厚

手に持つて置いてまた持つ野菜高
買物と医者行きにある乗用車
つまずいた次はよい事ありそうだ
余寒よりもっと嫌です杉花粉
お水取りだから寒いとあきらめる
厳寒に母を食べる至福かな

岸和田市 増田隆昭

あちこちに温泉旅に出なくとも
お守りもつけて孫へのランドセル
黒タイの礼服ばかり忙しい

観衆を二つに分ける球一つ
桜より野球始まる春を待つ
ぎこちない初音が心春にする

阿波市 三浦千津子

世渡りへ粹なジョークを武器にして
早送りしたいニュースが長々と
おっとりとして血の騒ぐ話好き
無縁社会なんと哀しい世の流れ
春一番こころの扉明けに来る
腰痛に今日の機嫌を支配され

尼崎市 市坪武臣

福耳で鼻も太くて大物だ
大風呂敷広げ今更畳めない
妻の留守句作りばかりとはいかず
デジカメに詰め閉じ込める朱雀門
試着して買う気にさせる誉め言葉
おみくじを引いて占う恋がある

河内長野市 宮 守 正 博

すきま風背にして愚痴も言わぬ母

ケンカしてまた書き直す遺言書

連番かバラかで迷う宝くじ

消費税暴力団も納めてる

転がった一円玉を追いかける

咳一つかけよる妻がいてくれる

岩出市 村 中 悦 男

まだやれる気概をくれる野菜畑

手を借りる猫は田舎に戻らない

老妻も日やけ帽着て野良仕事

さあやると農業倉庫錠はずす

あれこれと差入れをする孫人試

なるようにしかないと言われても

豊橋市 藤 田 千 休

春眠に一番鶏も遅刻する

うたかたの夢を貪る絶頂期

大器でも自宅待機という不況

忘却の彼方に去っていく記憶

暗闇に善人の面捨ててある

花よりも団子の下戸も春が好き

篠山市 酒 井 真 由

春はすぐそこに来ている花いちもんめ

なるようになるさと神の高笑い

飲ん兵衛の嘘八百が面白い

きき耳を立てているのは洋酒壺

疑うて信じて涙ほろ苦し

かしこにて柵を断つ桜の夜

奈良市 前 田 弘 恵

一二の三やつと床出る寒い朝

加護を享けやつと八十路に辿りつく

円高と原油高騰株下落

ネット界便利さ余り罪つくり

銀世界枯木にバツと花が咲き

柵にさされた鰯とんと見ず

篠山市 谷 田 多 美 子

啓蟄に八十路炬燵のふとん干す

耳たぶを丸うして聞く好い話

大正琴弾いて桜を呼び寄せる

淡雪に老母の背が丸うなる

沈丁花咲いて回りが動き出す

梅一枝選んで亡母に供えけり

香南市 桑 名 孝 雄

晩酌に飽きて三味の音聞きにゆく

どれを着て行こうか馬子は馬子なりに

剽軽な踊り合の手入れてやる

クーさんと呼んではくれぬ八十一

酌の手が僕のペースに合うてきた

また来てネよしよし派手なお見送り

奈良市 大久保 真 澄

出世したらほめてもらえろンンキヤリア

逆らうなんてめつそうもないお姑さま

無欲にはなれそうもなく二兎を追う

切り札は出さぬに越したことはない

ブランドを着てユニクロの肌着買う

奈良市 尾 畑 なを江

野の花に芯の強さを見習おう

本音言う時は真面目な顔をする

台所たまに男と入れ替わる

蒔いたよりこぼれた方が良い発芽

きびしいな自然と共に生きること

奈良県 谷 川 憲 司

独裁者民主化の波とめられぬ

論説や見出しに大差ないメディア

近所から雷親父いなくなり

大相撲賭博八百長底が抜け

鼻風邪が春の兆しを訴える

奈良市 矢 野 良 一

駅裏のネオン恋しい帰り道

持ち歌は浩二に旭 裕次郎

お帰りの声聞きたくて縄のれん

水微温み鴨も何やら楽しそう

ゴーグルにマスク姿でする散歩

和歌山市 磯 部 義 雄

胃袋を大掃除するワンカップ

胃薬で胃袋洗う二日酔い

ホールインワンを夢みている素振り

口だけは達者足腰弱くても

七十四そろそろ墓地を探さねば

和歌山市 土 屋 起世子

自由気まま一人が良いと子に返事

主婦の座に建前あるか嫁が聞く

朝になり昨日の事は過去のこと

七色の虹に自分の彩も足す

叩かれてまだまだ弾む毬である

和歌山市 福 井 菜 摘

想像もつかぬ騙しのテクニク

毒少し舐めて掴んだ回り椅子

ページ繰る指をどきどきさせる本

携帯の指が跳ねてるサクラサク

幸せの歩幅に揺れるイヤリング

和歌山市 坂 部 かずみ

ベゴニアも寒波に負けて引つ込んだ

ニワトリのドミノ倒しが止まらない

梅が咲き桃も飾って二次試験

菜の花が伸びて慌てたお雛様

春の風カイロ忘れて飛び出した

岩出市 藤原 ほか

種明しされて頷くストーリー
それなりに自分の足で生きている
恋してる何所吹く風もピンク色
行く先を変えて一から出直そう
覗いてるレンズの中に希望の灯

海安市 小谷 小雪

健康へ無駄な小動き多くする
わくわくと新しいこと習いだす
気持ちまできれいにしたいストレッチ
熟考を発酵させて春の彩
土産にと友からもう目はりずし

紀の川市 宇野 幹子

不器用な尻尾も一度振ってみる
ふり返りや昭和ほのぼの温かい
上向いて未練吐き出す深呼吸
能面を磨いて心静ませる

春愁を抱いて煮こごり未だ溶けず

紀の川市 辻内 次根

いい天気春が生まれている空き地
非常口探す静かに目を閉じて
病院で迷わないのが情けない
宣伝費と税金飲んでるビール
目盛から少し多目に注いだ欲

橋本市 石田 隆彦

助走路に立つて度胸が試される
歩け歩け老いは足からやってくる
車庫入れは若葉マークがとれぬまま
七転びわが魂よ燃え上がれ
くり返すもううんざりの茶番劇

和歌山県 森下 よりこ

陽を浴びた布団が今宵われを待つ
腐葉土にまだ成り切つてないおちば
溜つたら洗う一人ぐらしの洗濯機
野菜洗う水は谷から引いてある
まだ出来る駅の階段登り降り

鳥取市 松原 ひとみ

子には子の言い分がありはつとする
試験日に合わせ降る雪腹が立つ
湯を浴びて手足ゆっくり伸びていく
湯につかり至福と思う年になる
十七文字脳が格闘する時間

鳥取市 山岡 紀子

ベッドから流れる雲へあのねのね
リハビリへ孫が寄り添う車椅子
お化粧もおしゃれもしたいまだ女
いい事があれば笑顔が倍になる
まだ出来る正座が老母の自慢です

鳥取市 山口 千代子

米子市 加藤 正二

散歩道雪から覗く野水仙

父さんは一家を照らす太陽だ

カスミ草真の役より派手に見え
ガンよりも認知の方がまだ恐い

訃報 爛自分の歳と比べ見る

倉吉市 前田 喜美子

やんわりと褒めて老後の舵を取る

人のこと中なか出ないほめ言葉

戻れない昨日が過去になる早さ

待つて待つて診察五分おだいじに

メロドラマ余韻残して仕舞い風呂

境港市 中井 虎尾

苦労した妻は我が家の大柱

ダメ政治でもデモなどほしくない民(日本)

いい事があつてかくせぬ照れた顔

ボケ防止頭で描く五七五

来たい春雪がじゃまして寒いまま

米子市 生田 寒^{かゆ}之^{ゆき}

国益を背負いパンダがやって来た

隣国の我欲に世界資源難

日に百句詠んでまだ詠む夢の中

豪雪を防音壁の高速度

春なかば厳寒警報治まらず

ケイタイが人間様を踊らせる

のろ足に交通保険掛けておく

血圧が老いの暮らしを監視する

年拾い口数だけは目減りなく

寄る年か踏みはずすこと二度三度

米子市 後藤 美恵子

税務署前やましい人か急ぎ足

浮気の虫煮ても焼いても生き返る

仲直り昨日と違う空気吸う

パンドラの箱はしっかり縛ってる

迫る古いダンスシューズで蹴ちらかす

米子市 竹村 紀の治

適量を一步踏み出す酔い心地

ストレスも有ります酒の肴です

ウォーキング給水をするカフエテラス

お隣の煙に秋刀魚買わされる

ストレスで活性化する脳細胞

米子市 中原 章子

出会いたい一直線に飛んでゆく

スランプに最高のスマイルをする

歯医者さんと馴染みになって元気な歯

転勤の流れに任せ速く住む

欠点をカバーし合える愛がある

米子市 成田 公一

書き終えてポストの中に夢入れる

親を見て親とは違う方に行く

帰ったら靴が違つたと叱られた

同窓会黙祷のあと開会す

雛祭父さんはまた別の酒

米子市 野川 宣子

孫のなぜ探す眼がキラキラだ

あの手この手でおいしい水を売るラベル

何処だつてついて行きます夫婦旅

お互いが当てにしている突つ支い棒

境界線乗り越え注意嫁姑

米子市 山本 ふみ子

飛び飛びの記憶を手繰る二日酔い

忘れてはならぬ記憶に紐つける

マンネリ化避けて時には駆け抜ける

謝るか意地を通すか揺れる日日

健康にいいと聞いたたら放つとけぬ

鳥取県 飯野 菖子

よく食べる孫の顔には未来ある

食文化母の味です生きている

賑やかな廊下も孫のいるあいだ

寒椿蜜蜂こない侘びしさよ

八百長に悩む相撲に春が来ぬ

鳥取県 大塚 美代子

一杯の水でファイトを取り戻す

強がつてもやっぱり勝てぬ老いの足

休みでもやっぱりお腹減つて来る

隠してもやっぱり嘘は顔に出る

足腰が老いても口は達者です

鳥取県 岡村 孝明

輪になつて語れば世界戦消え

名言は時がたつても廃れない

また雪か啓蟄の虫またもぐり

腹立てて鏡に向かい怒り顔

傘寿すぎ僕の一生小吉か

鳥取県 下田 茂登子

悪人の強さを少しもらいたい

身の上話他人が聞くとおもしろい

相棒は酒と煙草の一人者

八十路来て自問自答の日を送る

一人居に飲むな飲むなと酷いこと

雲南市 菅田 かつ子

番犬の眼吠えよか止めようか

ぎりぎりと聞くから手を貸す親心

じいちゃんが聞いて居るかと念を押す

美容院出てゐるんと何処へ行く

お互いにそれよあれよで通じ合い

雲南市 武島 ちよえ

宇部市 高山 清子

世相とはうらはら梅の花開く
癒された花に肥料の恩返し
忘れたと言えば罪にはならぬかも
髪と爪伸びてひと月消えて行き
喜んで引き立て役になる写真

安来市 原 煩惱児

寒い夜に暗いニュースで気が滅入る
国民より党を必守の各党首
警官も教師も不信世は暗い
従いてゆけぬやはり昭和が良い八十路
单身赴任終り居場所のない息子

今治市 渡邊 伊津志

縁薄い法事失礼春炬燵
正直に生きよう仁義礼智信
春隣着たり脱いだり重ねたり
息吹く春野草を探す老いの知恵
老人がパワーを見せる野草摘み

広島市 岸本 清

法悦の二字に染まってゆく信者
スペースにやはり嵌らぬ我である
物差しを秘かにブラインドに当てる
愚かさの真ん中辺に仏居る
新しい我を求めて生きてゆく

四国中央市 篠原 久

流行風邪治ったとたん花粉症
冬ごもり心身ともに縮こまる
一円は無いと困るが拾わない
人の背を冬將軍が丸くさせ
円満の秘訣の裏に聞き上手

竹原市 若年 幸子

チューリップの笑顔が春を引きよせる
ハローワーク行くのに今日も靴磨く
妻の旅俺は三度のカレー食べ
優柔不断鉛筆倒し○か×
オーバーホールきかない私のエンジン

北九州市 小松 紀子

カレンダー家中春をしゃべりだす
三月三日節分草のやつと咲き
おしゃべりの少し控え目ユキワリイチゲ
誕生日ジャンプする気の靴を選ぶ
押し買いをされる物無い幸不幸

老化自慢笑いとはして盛り上がる
忘れやすいやな記憶は飛ばします
気づくたび背筋を伸ばすくせがつき
元氣と笑顔もらった塔柳誌
句を作る苦しみありてまた楽し

福岡県 豊田 愛

春の色紙すみれ押花して作る
駅階段老いの度合を試される
浅知恵の刺がじんわり身を責める
ありがたく思い背の荷を軽くする
口惜しさは日記の中に仕舞いこむ

福岡県 本田 さくら

葉牡丹の寒さに耐えて凜と居る
天井の羊がしゃべり眠れない
豆苗が皿でザワザワ騒ぎ出す
いりこたち金子みすゞの声がする
天気予報当たって困る旅行先

唐津市 北村 松風

温もりの里をはなれぬ母ひとり
掌で体温はかる亡母だった
半額の値札未練の手が震え
値段など気にせぬ妻の化粧品
絵日記のパパとママとが手をつなぎ

唐津市 吉富 節子

駅ベンチ笑いと涙のドラマあり
故里に友の絆を確かめに
くじ運が悪いと言ってくじを買う
せせらぎを聞いて別れた旅の宿
世紀末の前兆なのか大地震

山鹿市 三谷 たん吉

連れだつて出かせぎに來たパンダの子
出張でこれ程かせぐ社員なし
日が沈みやつとなんだかやる気出る
節電で先ず動くのはお年寄
政治家を除けばみんないい人だ

山鹿市 米加田 恭代

期待する甘い自分に嫌気さす
逃げてたら追いかけてくる不運たち
辛い事みんな自分がまいた種
正直に生きることから始めよう
どん底と思つてたけど浅かった

シドニー 坂上 のり子

何という苦しさ瓦礫見てる日々
ああ我が子かと思えばテレビむご過ぎる
無事に古希迎えた運のいい命
力強く今中東に民の声
冷たさに湯で米洗うバイトの子

弘前市 高橋 洋子

三寒四温弥生の風に気もそぞろ
ストレスを捨てて近道探してる
トンネルの真ん中にある県境
苦勞した話は伏せる母の口
思慮深くなつたあの日の赤っ恥

塩竈市 木田 比呂朗

吐息つく湯舟に浮かぶ五月病
年金も歓迎しない五連休
プランター手抜きどおりの春が萌え
トップにもなれずブービーにもなれず
中東政変家計簿にも波及

福島県 七ツ森 客山

アサツキを畑から貰う散歩道
恋猫のソプラノになる月の夜
締切日何も書けないまま眠る
外は雪親鸞を読みまた眠る
青空に梅檀の実の風に揺れ

東京都 井上 つよし

道楽が鑑定団で大当り
禁酒宣言ヌーボーを見て延期する
飲み会に部長も誘う下心
御祈祷も厚いお布施に念が入り
クラス会仇名で浮かぶ幼な顔

東京都 高岡 弥生

お返し欲しくて渡すバレンタイン
還暦で淑やか静か目指します
人気ある教師当たれば儲けもの
生きているだけで充分我が子達
失敗を沢山ためて幸もらう

佐渡市 高野 不二

昔遊んだ玩具に万の値をつける
大臣が止めさせられるはした金
あいつがと思う男が出る選挙
いきなりに後期後期と呼ばないで
百薬の長が効いてるから元気

富山県 有澤 嘉晃

宝くじ当てたら妻に買うダイヤ
晴れた朝身震いしてる洗濯機
割り切れぬ円周率と人生も
家族じゅう合鍵持つてすれ違い
幸不幸真ん中辺の痛快さ

岐阜市 平野 あずま

民衆のマグマ独裁押し倒す
古老から郷土の味を教えられ
正直な鏡といつも揉めている
補聴器を買い替えさせた好奇心
老い楽し割引券で名画観る

大山市 奥村 百合江

大丈夫期待しながら手当てする
マスクするでも友達をすぐキャッチ
セールの断わり方を決めておく
映像でワクワクするよ旅した気
薬よりおいしい薬甸の物

江南市 脇田雅美

千鳥足車が避ける闇の道

新緑に演歌を聴いて農作業

天の地図リアス海岸ちぎれ雲

とびつきり美人女将のおもてなし

土筆採りはかま外しに爪のこす

京都市 清水英旺

とりあえず元本割れのない人生

今の世の寵児ネットの罪と罰

目に見えぬ敵は強者杉花粉

冬枯れた枝空向いて春を待つ

大方は積木の家に住んでいる

大阪市 安藤なつこ

別れより花粉が泣かす卒業式

マスクかけサングラスして見る桜

おひなさま飾ればパツと春になる

雪の朝出社の列は武士の顔

トンカツを食べてあしたの元氣出す

大阪市 岡田元

踏み出さねば花も実もない老いの春

初投句書く手ふるえて心満つ

点数を溜めてもらつた不要品

消費税拒否してる間にツケは子に

おさな子の握つた未来見てみたい

大阪市 笠嶋恵美

電話番号住所氏名の出る怖さ

おどろきは墓地にも鹿のふんの有り

友入院あわてて医師の検査受く

盆梅の香り威厳に去りがたく

レストラン隣もひとりカレー食べ

大阪市 栃尾奏子

本音まで溶かして角砂糖ふたつ

スロットを回す女神に会えるまで

地図にない町で暮らしている小人

母さんに会える気がするケンケンパ

笑顔だが決して交わることはない

大阪市 高杉力

春よ来い海辺の町に早く来い

同じこと言うてないかと妻に聞き

転勤の場所を訪ねる二人旅

ようするにもう歳ですということか

定年後迷わずニンニク入り頼み

大阪市 松田聰

チエジュ島に二泊三日で骨休み(韓国旅行 5句)

優しさと素朴さに会う済州道

日本語を皆が話せる島の人

初めてのアカスリはカルチャーショック

正直にはじめてですと言うカジノ

池田市 上山堅坊

海の上張り合いもなく雪が降る
満足な日であつたなと床につく
息子へは少し頑固を押し通す
勢いをセーブしている下り坂
怠け癖振り払いつつ日を送る

泉大津市 助川和美

水戸黄門炬燵でみかんこの平和
ねんねこが柳行李に眠りけり
ひとり鍋叱ってくれる人もなし
昔の映画手書き看板懐かしい
地デジ化に逆らいラジオでもいい

泉佐野市 稲葉洋

南天の一葉に故事が添えてあり
巢立つ子を見送るたびに親は老け
割れ鍋を案じなくても蓋はある
念仏講此処でも祖母の声が清み
カンニング祖父の時代はシンブルで

柏原市 森吉留里恵

寄り道の田圃で春を掴まえる
花粉には強いんですと干してある
寡黙さを大人物と勘違い
煩惱も芽吹いて元氣取り戻す
夢ひとつあって暮らしが温かい

河内長野市 内海綾乃

牛鶏も悲しい誰が悪いのか
豪雪だ今年の夏は冷夏かな
母の介護何時まで続く分らない
雪の重さ屋根から落ちるすごい音
眼の手術遠くの山がくつきりと

河内長野市 梶原弘光

立ち枯れの菊に手落ちをおわびする
スプリングキャンプはどこも威勢良い
日向はこしながら人のうわさする
梅の香を花粉マスクは受け付けず
献血が無理と言われてムツとする

河内長野市 木太久正一

同年代計報気になる昨日今日
老いひとり気になる暮し隣組
のど自慢ブラジル青年日本一
派手な上着買ったけれど身につかぬ
人生の越えた山坂振り返る

河内長野市 木見谷孝代

手仕事の針と糸とが消えてゆく
針仕事静かに過去を振り返る
くじけないで白寿の詩人そつと説く
いい陽気無心で庭の草を引く
あれば苦になれば淋し庭仕事

分岐点越えて穏やか嫁姑

河内長野市 谷

久美子

海域を越えて黄砂が飛んで来る

亡父亡母を越えて米寿の賀の祝

背中には心を映す顔がある

一輪の香で帰り待つ沈丁花

河内長野市 辻村 ヒロ

おみくじが奮発させたお賽銭

本を借りお札に少し知識詰め

鍵盤を華麗に踊る指をもつ

ニュータウン若者消えてからつ風

弱音吐き友に叱られ奮起する

河内長野市 針生 和代

春の庭いのち膨らむものばかり

夢希望燃えてた日日の知識欲

今日という時間しつかり燃えつくす

お互いの我慢実って五十年

人間に牙を向けてる大自然

河内長野市 松岡 篤

意に反し年寄り色に染まり行く

入学の難関越えたさあ遊ば

賭けごとは勝った事だけ覚えてる

初恋がほろ苦いのは皆同じ

貴方だけ安くしとくと誰にでも

ちらちらと酔ったふりして出る本音

ためらわずポイ捨てしたいわだかまり

叩いたらほこり舞いたつ武勇伝

背筋伸びお洒落ステキな高齢者

腹の底見せてしまった悔いがある

岸和田市 中岡 香代

まだ遠い還暦なんてモノロUGE

ケータイのゲームを誘うコマースィヤル

叩いたと子供が泣いた3D

隅っこで用を足してた三歳児

プレートの子供に足して惚け防止

堺市 近藤 治子

思春期へにらみを効かす父の背

猛犬ににらまれ通る屋敷前

期せずしてうれしい事がいつ時に

外歩きヒートテックと組んでいる

積雪に子供にかえり雪だるま

堺市 澤井 敏治

愚痴言わず独り我慢の父の酒

念入りに行く当てのない靴磨く

眉の濃さ女の決意示される

ついた嘘上手くゆき過ぎ怖くなる

足音を待って呉れたはポチとタマ

堺市 内藤 憲彦

高槻市 島田 千鶴子

僕抗原妻は抗体にぎやかに
ママさんはお金だす人すぐ見抜く
朝食後くすり数えるのが日課
新型と聞いたとたんにアレルギー
お浄土へ釈迦の足跡追って行く

堺市 羽田野 洋介

もう一度チャンスが欲しい老いの意地
飽きもせずコント演じる老いふたり
念入りに片づけ過ぎて大慌て
英文法得意だったがしゃべれない
入試パスさてこれからが正念場

堺市 増田 和幸

免許捨て無事故無違反エコロジ
車捨て省エネエコは優等生
国会も相撲と一緒八百長だ
南北戦火まじえぬこと祈る
大学は就職塾か予備校か

吹田市 二宮 栄子

旅帰り疲れは言えぬ夕支度
目で習い舌でおぼえた母の味
発表会家とはちがう孫をみる
口実に届ける孫の忘れ物
かぎっ子のぶらんこゆれて夕焼ける

花吹雪浴びたくなつて桜坂
六人の愛が重荷のひとりっ子
レンタルのパンダ二世を期待され
水面に風を揺らして花の雨
踏ん張った膝にシップのお礼する

高槻市 初代 正彦

生き様の足跡遺す父だった
勘違い濡れた瞳は花粉症
混んでも美人のレジについて並ぶ
女房の歳と体重秘密です
押してみても駄目ならちよつと引いてみる

高槻市 田中 由美子

残り火を消してはならぬ風送る
風呂敷に一つ残らず包む恩
鬼は外 追われた鬼は寒かろう
はじめから解らぬと決めピカソの絵
ハードルは下げても夢は持ち続け

豊中市 荒巻 夢

逝った子と心通わす明けの星
自分史に花を添えてる恋心
高音に泣いてる老いのコーラス部
衰えをどんと構えて受け入れる
飛行雲ブルースカイを真つ二つ

豊中市 池田 純子

春風はうららうらと頬なでる

三回忌母は友達できたかな

亡母さんの時計はあっち向いている

嫁ぐ子に一椀の幸念を押し

添え木ある梅に亡き父居るような

豊中市 石橋 優明

安らげくあれかし陸奥の御霊

遠野郷河童は無事にいますかや

鎮守の森命の息吹き盛りあがる(白河神社)

暗闇に立ちあがるもの人間よ

月光よ一切浄化せよぞかし

豊中市 源田 啓生

老春と言えど桜がときめかす

寝て起きて川柳を詠む笑顔して

点火してもう燃えないな胸の奥

ケイタイが入学試験掻き回す

専政をフェースブックで暴かれる

富田林市 山野 寿之

胸襟を開けば春のドレミファソ

猫の額に小さな花を見る至福

嫌なこと耳に栓して笑つとく

怒るより怒られることばかり増え

急がねば奮のままでいる私

寝屋川市 岡本 勲

損得は言わない母の深い海

足腰も脳もそこそ喜寿の春

急いたって順番がある黄泉の国

あやしげなところあるのがまた魅力

乗り替えはできぬ行くしかない余生

羽曳野市 宇都宮 ちづる

一病があるから元氣あるわたし

百歳の元氣の秘訣興味ある

会話ない夫婦の隙に孫の風

二度寝して夢の続きに会いに行く

物故名簿に初恋の人載っている

東大阪市 西田 いくひろ

日向ぼこするとぼんやり眠くなる

深い謎探ると冒険心が湧く

印象は名刺の裏に書いておく

生き様に今さら悔やむ事はない

深い訳ありそう涙こぼしてる

枚方市 河内 洋子

白旗をあげてつき合う古希仲間

お便りに余白を埋める五七五

飽食にたまに食べたい麦の飯

砂糖塩間違え今日は店屋物

熟睡を念じて今日も布団干す

箕面市 寺井柳童

七分を切つて余裕のゴールイン
振り向けばまだ見送つてゐる離別^{わかれ}
単身赴任いつも戸惑う行く帰る
性格が良いとおだてに嫌な役
俄雨駅の置き傘われ先に

八尾市 赤木妙子

美人薄命あらあらと八十路坂
三世代敷居の高さ無くてあり
ごめんネと言つたら取れた鬼の角
リビングの窓越し春の陽が伸びる
ニックネームないのもちよつとさびしいの

八尾市 田邊浩三

節分の鬼は炬燵でテレビ見る
初雪の車上の雪は子の宝
日本のママは恐いと鬼子母神
特級品マグロも牛も中国へ
家計簿に子ども手当をどう組むか

八尾市 前田紀雄

毎日が人畜無害恙なし
食べて寝て毎日続く平和です
義理人情保つた儘で現在地
知恵袋使う所を間違えず
法案が密かに匂う消費税

八尾市 山根妙子

あんな事こんなこと過ぎ難の月
ひとひらの雪がショールのすき間から
投稿のクイズに春の言葉添え
あつぱれも喝も程よく歳をとる
日脚のび夕餉もわずかおそくなり

大阪府 小栢こずえ

人格が山盛りにでるバイキング
老斑も生きた証しと自負してる
お誘いの便り何より効く薬
我も欲も感謝に変える法話聞く
春雨が眠る自然の目を覚ます

大阪府 神野千恵子

金太郎飴が並んだ入社式
春うらら黄砂花粉も浮かれ出す
パソコンの顔色ばかり診るドクター
相撲見るために払った受信料
高齢化より恐ろしい平和ほけ

大阪府 中井記久乃

物忘れ誰もが通る老いの道
お水取り春告げ催事盛り上り
バスに乗りたこせんべいと旅をする
デジカメでデコボコミカン写しとる
勇気出しこの橋渡り春を待つ

大阪府 畑 中 節 子

尼崎市 田 原 一 兆

宿浴衣心も口も軽くなり
南天の実の赤赤と雪帽子

くきくきと雪踏みしめる散歩道

遣伝子の良い種買つて春を待つ

頼られて頼る日も良し湧くパワー

大阪府 若 月 祐 作

地味に着て気品は保つ薄化粧

ちやつかりと優先席で化粧の娘

ペン先がきこちなくなり返事止め

雪もやに煙る湖中の嫁が鳥

インパール作戦渡り歩いた兄も逝く

神戸市 木 村 忠 義

花三つつけて老梅自己主張

鈍感を何度も言つて気を静め

賢くを何度も言つて策を練る

妻が居る金では買えぬ有り難み

ゲートボール観客いると熱を入れ

神戸市 白 川 淑 子

花の道乙女にかえるヅカファン

一駅を歩く春色スニーカー

春やから大目に見てね姥うかれ

春こたつ猫も私も出られない

自分史に書く春に背を向けた日も

自尊心が弱音吐くのを許さない
褒めことは脳細胞がリズムとる

メルヘンの世界にあそぶ母を診る

一つぐらいあつていいでしょ内緒事

信不信五分五分ならば信をとる

川西市 日 野 岡 和 之

天地人繋がり断つ大地震

親も子も離れて生きて増す絆

ひたむきに生きて男の回顧録

別れるも会う楽しみの事始

角がとれ丸く健やか古希の坂

篠山市 石 田 久 子

八十路すぎ賞味期限がぼつぼつと

惚け防止脳天に灸据えよかな

書きかけの亡夫の日記外は雪

冗談が過ぎて纏れる赤い糸

消しゴムがだんだん丸くなる月日

篠山市 永 井 か ほ る

ヒヨどりの集団畠あらしに來

リハビリと思えば畠苦にならず

去年駄目今年立派な黒豆を

作り方かえて自分でほめている

野菜本見ているだけで楽しめる

篠山市 藤井美智子

老いの字にリハビリさせて若く行こ

デイサービス母の笑顔を送り出す

夕暮れの窓辺の灯り温かい

若者の髪型老いには良く見えず

送り主確かめ受ける宅急便

三田市 雑賀一泉

親孝行年金あてにしていること

風呂上がり鏡がなんか言いたそう

日の丸をはた目隠んで揚げている

ピロリ菌ことわりもなく居候

胃カメラに耐えた褒美の生ビール

三田市 辻開子

頑張れの言葉に悩む介護中

週明けは粥をすすって胃整え

孫が来る年金が飛ぶ弥生月

月一回介護疲れを取る日ほし

おはようの言葉を聞きに通学路

宝塚市 丸山孔一

落語家が薬になると笑い売る

妻と娘は海外俺は犬の世話

年数え医者に頼るか放つとかか

雪解けの道の駅にも色が増え

絵馬ずらり何人合格出来たやら

西宮市 泉水牙子

理想論ばかりで汗は流さない

ITに掻き回されている頭脳

今日からはシングルママの花名刺

イケメンと美人ばかりでつまらない

スケジュール一年先が埋まる趣味

西宮市 株元玲子

またひとつ生き甲斐みつけれ胸躍る

平凡の日波風立ててうれしそう

幸せねと言われてハッと気付かされ

愚痴こぼす人の心を思いやる

川柳詠む百歳翁に惚れました

兵庫県 上田ひとみ

風の強い日はあなたに逢いに行く

よかったら荷物はんぶん持ちましよう

見てくれる人がいるから背を伸ばす

ほほえみを返してくれてありがとう

着ごこちのいいシャツみたい君の声

神戸市 山根弘子

大物になれと背を押す春の風

大物はドンとかまえて時を待つ

あこがれの友も老いてたクラス会

人情に触れて戻った忘れ物

あこがれの宇宙を夢で旅行中

紀の川市 北山絹子

母の忌へ雪しんと胸に降る

納税を済ませた後に出る吐息

この季節覚悟している花粉症

今日も無事二人でグラス傾ける

田辺市 大峠可動

燃えよ日本民は貧しく子を生せぬ

四月馬鹿己の馬鹿の一句かな

啓蟄や蟻の一族人に逢う

昭和を語り己を語り喜寿の坂

鳥取市 大前安子

日当りのいい席今日も亡母のいる

真つ直ぐで丸いハートを育ててる

釣り糸を流して掴む今日の風

たけのこも衣を脱げば親となる

鳥取市 近藤秋星

何回も同じ答弁国会で

冬將軍とくどく帰れ故郷へ

出会いの季節どんなお方と出会うやら

春本番までは冬物しまわれぬ

鳥取市 坂本とも湖

春を待つ老母のベッドを風覗く

相撲界不祥事ばかり愕然だ

大学の関所も越えて夢を抱く

芽吹く春楽しく散歩葉の変化

鳥取市 津村律子

お彼岸はぼた餅作り亡兄と会う

天空へ日本の技術今日も伸び

富士山が下界に見えるスカイツリー

世界へと羽撃く夢を消す地震

倉吉市 藤井美津恵

流し雛ゆつくり流れ水ぬるむ

散歩道つくしのあたまここかしこ

ストレスをためたか友の長電話

新聞の明るい記事を拾い読み

米子市 小塩智加恵

無理するないつつあてにする息子

花粉には負けませんよと婆の意地

運転はするが掃除は下手な嫁

通販を買い馴れました衣食住

米子市 田村周子

うまい話電話勧誘乗りません

背の高い孫が買物かごを引く

就活もようやく終り息ついた

まぐれでもたまには入る針の糸

米子市 見山温子

指を折り辞書を広げる呆け防止

ピンポンに居留守を使い昼寝中

友情のなれあいすぎに距離をおく

賞味期限老いた身だから気にしない

米子市 湯浅久司

正直は強い武器だと顔上げる
いいことが何もなかった日を重ね
二杯目はあふれるほどに酒を注ぐ
犬を撫で俺より早く行けと言う

鳥取県 加賀田 志 延

白菜の貰う予定を鳥が食い
灰汁付けて土からもぎるフキノトウ
飛び跳ねる花粉に罪は無いものを
惨状に手をこまねいて手を合わす

鳥取県 田 口 清 帆

八十の手習い春と書いてみる
幸せのワルツをメロディーで歌う
人生は浮かぶ瀬もなく老いてゆく
ふと浮かぶ一句メモする野良仕事

鳥取県 橋 谷 静 江

てっぱんを見てから朝が動きだす
嫉妬心持ちつづけてる認知症
ストレスが溜まると海へ出たくなる
心にも疲労骨折きたようだ

鳥取県 吉 野 いさお

春門出親の夢まで負わされて
徒然に生きる勿れと兼好師
喋ったら程度の知れる亭主の座
仕事より人を纏める管理職

松江市 相見 柳 歩

桃色の声がたまらず通う店
かけ蕎麦のうまさがる店で逢う
この先を想像しつつ鏡見る
指動くそんな幸せだつてある

松江市 錦 織 禮 子

腹筋がよじれそう創作落語
今どきはプロジェクターが講師席
突然の情報足が棒立ちに
湖畔から胸にしみ入るコンサート

松江市 松 浦 登志子

プロポーズどちらが先とからかわれ
居心地がよくて長居をしたようだ
若いころ体は無理をきいてくれ
体から出す信号を受けとめる

松江市 山 根 邦 代

ふる里で見つけた野草春の味
春の陽に背中おされて回り道
どうしても分らぬ事の多すぎる
この惨事食事しててもいいかしら

雲南市 福 間 博 利

雪が消え椿の赤がいとおしい
呼びリンよもっと大きく鳴ってくれ
幸せは十時三時にオーイお茶
足腰に聞いて欠席老人会

竹原市 土井輝恵

いい加減にしてよ三月工事中
枝振りを褒めて夫婦のウオーキング
精一杯生きた表彰お葬式
おくり人の手により義兄の男前

竹原市 六田半徳

テレビみて地震発生知らされる
気象庁今日の地震を命名す
政治力今こそ真価發揮とき
大津波日本列島試される

唐津市 岩崎 實

お座敷の床の軸まで日脚伸び
南無阿弥陀仏わが真筆の御名号
ぐいのみになみなみ妻のその笑顔
新幹線青森鹿兒島乗りたいな

札幌市 佐藤 登美子

携帯音猫も杓子も追ってくる
苛立ちもあらわな客へ低姿勢
辛辣なジョークで友と仲違い
自治会の幹事になって胃の痛み

弘前市 稲見 則彦

ほどほどの酔いが明日のエネルギー
味が濃いまだわだかまり残ってる
雲行きが怪しくなると笑う癖
辺境の地に住む人のいい笑顔

弘前市 高森 一吞

苦労人らしい気配りあったかい
人生の相棒先に逝かないで
黄泉の路はつばつ草鞋支度する
天井の節を数えて羊待つ

昭島市 野口 忠

二歳児のハテナことが膝で羽化
佑ちゃんの追っかけ握手まではムリ
新妻の日課レシビを母に聞き
振鈴が起きろ起きろの永平寺

横浜市 巖田 かず枝

オレオレに鎧兜で身構える
テレビ越しエールを送る民主化に
国会の野次をテレビでやじつてる
治療する薬に薬飲んでいる

静岡市 渡辺 芳子

年相応カガミの中に居る私
八十一歳生れ変った誕生日
友人が寺でころんで顔にケガ
ボチボチと今日の一日動き出す

八幡市 今井 万紗子

身の程の丸い世界で生きてます
妙な縁小さな指輪はずせない
残り火に時が拍車を加速する
脳トレに世界の地図で遊んでる

大阪市 太田 としお

大阪市 吉川 弘泰

寛平ちゃん丸い地球を一巡り
一番も二番もないわ人生は
骸骨の形のまんま瘦せてゆき
今のうち逢いたい人に逢つとこう

大阪市 小林 杵香

草餅の縁を食べて春を待つ
つぶらな目大切なもの探してる
わくわくと夢語る横顔が好き
怒り出すパターン知りつつ地雷踏み

大阪市 田中 都

初釜で中立ちも済み座が和む
節分会豆を横目に寿司食べる
満開の梅を散らせた春の雨
別れ霜今年の新茶待つばかり

大阪市 平井 露芳

被写体は最高雪の金閣寺
修正液ようけ要りますマニフェスト
作文は五でもあかで検事さん
ウーロン茶下戸の代行してくれる

大阪市 前川 善之

吾が人生に重ねてしまう親の影
札束で命を買える事もある
リーダーはキャリアと勘と度胸いる
叱られた時だけ孫はしおらしい

花散つて葉桜青く艶を出し
傘寿でも若いつもりが腰痛で
お互いに嘘つき合つて共白髪
満月も黄砂をかぶり泣きべそを

大阪市 吉田 知之

アナウンサーも興奮気味の大地震
学者でも読めぬ名付ける親の愛
狸寝がさつと目的駅で下車
薬より医者言葉に病癒え

河内長野市 山本 エミ

酒隠し愛の鞭だと言ひ聞かす
鬼の目も子に叱られて頬濡らす
手作りの鞆論吉が気に入らず
夢望み鞆に詰めて持ち帰る

富田林市 関 よしみ

自立する子に遮断機が上がる
透かしたら一つの嘘が見え隠れ
自分史の余白に朱を一寸混ぜ
柵越えの筈を掘る朝をほる

富田林市 古田 千華

産土の神に詣でる初節句
人間も家も没つた大津波
未曾有な地震と野党手をつなぐ
悲しみを丸い背中がたたえてる

寝屋川市 小谷 滋彦

柳友をライバルにするつむじ風
いかなごの腰の曲りは我に似て

梅桃桜繋ぐ転回の春舞台

頰杖の折れんばかりの眠い春

羽曳野市 安本 美喜

戦闘機乱気流には気にしない

梅林の香り仄かに浸る幸

留守番の口にするのはわれ煎餅

延命の治療いらぬとサインする

枚方市 小川 良吉

山動き八百長相撲腕に落ちた

妻難聴ほくの小言は素通りか

海老蔵よ五輪の書よみ復帰せよ

両国に櫓太鼓はいつ鳴るか

枚方市 坂本 ミヨノ

財産も借金もゼロ明日がある

そこそこに貯まる幸せ夢が湧く

黄昏れて月ほんやりと雲かかる

ああ言えばこう言う愚痴も夫婦愛

大阪府 坂口 公子

ガラス越しました見惚れてる梅の花

焦っても腕いてもと言う怪我事情

蟄居して金が減らないのも淋し

子や孫の愛に抱かれて生かされて

大阪府 高木 道子

寒暖にはち切れそうな蕾たち
庭先に春待つ雀一羽二羽

啓蟄に迷うていらし蜥蜴見る

落ち所決めかねながら消えた雪

大阪府 西川 冷子

家流れ涙が視野を阻みけり

家探す放浪犬も泥だらけ

荒れ狂いガレキ突き上げ風ぐ恐さ

流される我が家を留めるすべもなし

神戸市 興水 弘

一人居の窓を開ければ青い空

怒鳴る癖いつしか萎えて仏顔

軋ぶたび強気弱気が闘ぎ合う

ありがとう目立たぬように手を合わす

尼崎市 小池 幸子

ポケットの飴は社交のパートナー

遣伝子の良い所だけとはいいかぬ

未知数の未来にかける虹の橋

振り返りや若気の至り背負う罪

加東市 岩本 美緒子

送迎車古い身集わすレストラン

雛の折りほつと和ます今むかし

土筆ん坊目の出す頃と土手訪ね

押し車四つ葉クローバー持ち帰る

加東市 黒崎 美紗子

ごくろうさんまだ配達の日暮れでも

朝の寒さどこへ青空春が来た

グランドの球どこ行くのまとはずれ

歩けると感謝静かに日をおくる

篠山市 北澤 稠民

最近チョコをもらったことがない

親心新米すぐに子に送る

辞書を引くたった一字を探すため

久しぶり晴れた天気土匂う

篠山市 沢山 啓子

隅々がパワースポット村に住む

勝鬨を上げて芽を出す夏野菜

なんとまあ二日続けて鍋焦がす

サラサラは砂漠化進む耳の底

三田市 尾崎 一子

ほめられて孫とおんなじ顔になる

春よ来い口笛牙える霜の朝

ひとときで一年分を喋る友

着ぶくれと思っていたらメタボなの

西宮市 吉井 菜々子

丸ビルに腰掛けてみる朧月

雨音は気怠く時計止まってる

桃色のグラデーションになる睡魔

おめでとうありがとうから花の宴

三木市 山口 久子

迷子予防ケイタイ持って老母行く

ニトロ持参リハビリ頑張る今日一日

病み上り慰めあえる待合室

寝酒する祖父の笑顔が嬉しそう

(前月分) 吹田市 二宮 栄子

寒がりの重ね着六枚笑われる

胸底に開けてはならん窓がある

和服着て鏡にうつる亡母見る

亡母手本まあるくなつて逝くつもり

この寒さ布団が私はなさない



(つづき)

府中市 藤岡 ヒデコ

信州の旅へほほえむ富士の山

年金の旅は気取らぬ方がいい

冬眠を春一番が揺り起こす

三寒四温老いの体をもてあそぶ

ふきのとうあれは寒さを耐えた味

お願い

川柳塔への投句(川柳塔・水煙抄・愛染帖・一路集・檸檬抄・初歩教室)は、毎月15日必着で締切っています。日曜日、祭日に拘わらず締切りを厳守して下さい。



栞この一句

——西尾栞十七回忌に寄せて——

自我没却という泳ぎ方である

栞

小島 蘭 幸

平成二年に開催された第八回夜市川柳大会で、私は課題「泳ぐ」の選をしました。天位に頂いたのが栞先生のこの作品でした。以前「姿勢」というタイトルで書かせて頂いた時にも紹介した一句なのですが、選をしていてとても強烈だった印象が今も鮮やかに残っております。

自我没却という泳ぎ方である

栞

この句破調ですが、指を折りながら数えてみると、キツチリ十七音になっているのです。没却はどんな時に使う言葉かと広辞苑で調べてみますと「自己を没却して奉仕する」とありました。選をしていてこの悟りの境地は何だ！凄いい！と何度も思ったものです。「栞」という呼名を聞いてとても嬉しかったのを、鮮明に覚えています。

今、私は栞先生と奥様が一緒に写っているスナップを見つめています。竹原の名利照蓮寺の石段で撮ったものです。

ご夫妻の穏やかなお顔の写真と「自我没却…」の作品を重ねながら…。

平成三年に開催した、竹原川柳会創立35周年、学生句集発刊・山内静水追悼大会で栞先生は「竹原川柳会」というタイトルでお話をされました。一部を紹介します。

——「君！川柳は情熱だよ」と喧伝した静水さんは路郎先生から直接の馨咳に接した、たった一人の幸福な弟子だったのです。私は三十有余年、お傍に師事したが、そんな立派な言葉も指導も受けていません。ただ「川柳は人間陶冶の詩である、そして句はその人の心である、十七音字はその人の姿である、リズムはその人の呼吸である」ということを先生の著書で知ったままであります。入選と没句だけの指導であつたのです——記念大会からもう二十年経ったのです。歳月の重さを痛感する今日この頃です。

今年の八月二十八日、二十年前と同じ会場、ホテル大広苑で竹原川柳会創立55周年記念川柳大会を開催するのも何かの縁だと思えます。

人恋し人煩わし波の音

琴

西出 楓 案

葉先生の思い出はたくさんある中からお詫びを二つ。

その一——表記の句は先生の有名な代表作である。私が川柳を始めた昭和五十四年頃、夫と二人でよく近郊の山歩きをしていた。ある夏の暑い日、比良山系へ行った時、当日は終日登山の人に会わなかったで、その気持を「人恋し人煩わし山路ゆく」と詠んだ。その頃は無知のため上五・中七が先生の句と同じだとは全く知らなかった。後日それを知ってからというもの、思い出すたびに今でも顔から火が出て、消え入ってしまいたい心境に陥るのである。

その二——平成一、二年だったと記憶しているが、川柳塔の常任理事会が天王寺公園内の貸会場で開催されていた頃のこと。「私の担当している添削講座をあんたはん交代してくれませんか」と先生から突然言われた。私は即座に「申し訳ありませんが……」とお断りした。事実、当時私の父が大腿骨骨折に続いて寝たきりになり、宇治の老人病院にお世話になっていたので、父と母との世話に忙しく、とても時間的にも精神的にも余裕がなく、自信もなかったのである。けれど、今考えてみると先生はその頃八十歳近かったはずで、重荷になっておられたのだろう。無理をしても引き受けるべきだった。先生ごめんなさい。

産声は黒潮太郎という叫び

琴

川上 大 輪

この句は今から三十八年前の昭和四十八年三月十八日、八尾の葉の花句会・川柳わかやま吟社・川柳しんぐう吟社の合同吟行句会を新宮市の丹鶴城跡にあった「二の丸旅館」で行なった際、葉先生から長男誕生の祝いとして揮毫していただいた句である。おそらく葉先生のどの句集にも収録されていないと思われる。

句会場の正面右側に、全紙に黒黒と葉先生の麗筆で書かれたこの一句が掲げられ、生まれてまだ一ヶ月の長男も参加した句会であった。翌日は瀬峡観光、ジェット船の中でも句会が始まり、この様子は「早春の瀬峡にぎわう」と題して、その夜三回もNHKのニュースで放映された。参加者は四十五名程で錚錚たる方々の参加であったが、今ではほとんどの方が鬼籍に入られている。

この時の模様を「川柳塔」五五三号（昭和四十八年六月号）に高杉鬼遊さんが参加者の集合写真と共に紹介されているのでご参考までに。

この貴重な先生直筆の句を表装しようと思うどこかへ仕舞い込んだのだが、二度の転居で現在も行方不明になったままである。残念でならないが忘れられない一句である。

人恋し人煩わし波の音

葉

小西雄々

庭値打というお屋敷が売りに出る 葉

都倉求芽

昭和五十年代、構造社出版(株)から「昭和・大正・明治の著名好作家を網羅する川柳全集」が発刊され、No.12に葉先生が執筆された全集の、巻頭の句が前記の句です。

さて、平成元年七月、葉先生の叙勲記念川柳大会が大阪のなにわ会館で開催され、参加者四八〇名で大盛会になりましたが、参加者に配布されたのれんに染めてある句もこの句で、今もこののれんは廊下に使用しています。

また、平成二年一月十五日、川柳塔本社の新年おめでとう会に出席し、ここで葉先生に二つのお伺いをしました。

一 川柳句集『松露』を発刊するので序文をお願いします。

一 句集発刊記念川柳大会を開催するので選者をお願いします。

葉先生から「それは良いことだ」とすぐOKのご返事をいただき、薫風・紫香の両副主幹のご出席のご了解も得た。句集は八月十五日に発刊、記念川柳大会は九月二十四日に開催、参加者一三四名で盛会を喜びました。

平成七年五月十五日の朝、川島颯云児氏から葉先生の計報を知らされた。葬儀は五月十七日と聞きましたが、この日は医大病院で検診を受ける予約日で、葬儀参加はできず弔電を打ち関係者へ電話連絡をして、山陰の田舎町から遙か大阪の八尾市へ向かい合掌。(古日記から)。

葉先生と言えばなんと言っても

人恋し人煩わし波の音

となるわけで、この句をご自筆で染め抜いた暖簾も戴いており、木造の時の前の家ではずっと掛けておりました。

しかし私には別に思い出の句があります。昭和59年7月の京都塔の会第150回と小生の句集発刊をかねて、ささやかながら記念句会を東本願寺別邸の枳殻邸で行いました。

その時に当時の三羽鳥、水客、紫香、潮花のお三方や、高杉鬼遊さん、ご遠方から福本英子さん、それに西尾葉主幹もご出席下さいまして、会長の松川杜的さんも感激しておられました。

当時のことで、おまけに古い建物ですから空調もなく、蚊が飛び交う中での句会でした。勿論それを心配して蚊取線香もいくつか用意していましたが、それ以上のツワモノの蚊でみんな往生していました。

葉主幹には特別課題「庭」の選をお願いしました。その軸吟が冒頭の一句です。『定本・西尾葉句集』のなかには載っておりませんが、私にとっては記念の句で、心の奥に大事にしまっております。

人恋し人煩わし波の音

葉

遠山 可住

張り替えた障子の中に母が居る

葉

恒松 町紅

葉先生と川柳ささやまの始祖、小西無鬼先生とは特別のご昵懇の間柄で、姉妹句会のような交流があり、秋の松茸狩り句会や、夏のデカンショ祭などに大勢の方々をお迎えした思い出があります。また、特に両先生の間には「酒」があり、無鬼先生の遺句集『わらじ酒』の編集にも題簽、序文、句稿の選まで葉先生にお世話になりましたが、その序文の中に「呑み友達どちらも髭を生やしてる」という葉先生の一句が飾られています。また、無鬼先生の句碑建立にも選句と共に見事なお筆を刻んでいただきました。

そんな両先生の御交際の中で私も川柳の道を歩ませていただき、更に私の句集『ふろんぼ』発刊にも題簽、序文を頂く等、不肖の弟子をねんごろに育てて戴きました。

—人恋し人煩わし波の音— 私も後期高齢の大正生れ、人恋いし、人煩わしの実感がようやく身に沁みる年齢になりました。人恋いし、人煩わし、までは何とか従って行けそうです。結びの「波の音」は、とうてい私の頭では届かない世界。何回口ずさんでみても、その句想の深さにウーンと腕を組むばかりです。夏になると先生から戴いたこの句を染めたノレンが、私の家の玄関を入った正面に吊るされます。来客に自慢出来る私の大切な宝物です。

本社編集部から葉先生作品一句を選んで、鑑賞なり、感想或いは思い出なり書いて送るようにとの依頼で、早速本棚を探して、目についた平成五年の全日本川柳協会発行「全日本柳人写真名鑑」の中から表記の作品を選んでみました。鑑賞などおこがましいですが、この作品は見たままの光景が表されていてよくわかります。そして張り替えた障子というところが、何かほのぼのとしたものを感じます。部屋の中の母をどう見るか、そこには嬉しそうな母の顔や姿が浮かんできます。

葉先生が亡くなられて十七回忌という本社からのお便りを見て感無量です。今、思い出せるのはもう三十年以上ももっと以前のことだと思いますが、先生がわざわざ来松されて、当時の全日本川柳大会を松江で引受けてくれないかという話だったと思います。あの時は松江番傘川柳会の代表の方も同席で、とても受けられないと断ったと思います。今でこそ「松江川柳会」としてまとまって来ましたが、当時は一緒に何かやろうかという様な雰囲気ではありませんでした。何処かの旅館でお逢いしたと思いますが、その時の葉先生のお姿が、今でもはっきりと浮かんできます。今思い出しながらこの一文を書きました。

元旦や我れ泰山の如く座す

葉

高 田 博 泉

張り替えた障子の中に母います

葉

西 口 いわゑ

葉先生は、私が川柳をかじり始めた頃に教えを受けた恩人の一人となります。川柳は、庶民の文学と昔から言われて来ましたが、誰にでもわかり易い表現が、先ず第一だと言ふ事です。葉先生の作品は、その点では、一級品の折紙がつけられると思います。「決断は一杯呑んでからにする」「そう言えば赤の他人であつた妻」「好きな丈吞ませてやれと見放され」「約束を破る電話は妻にさせ」「寄附帳へ眼鏡かけたはずしたり」等々一読しただけで、滑稽味や風刺のある作品に目を細める事でしょう。

さて本題の推奨句「元旦や我れ泰山の如く座す」について……堅苦しいことの苦手な男連中だが、せめて、一年の初めの元旦ぐらいいは、殿としていたいいものである。

男としての面子、プライドが、この様な態度として、出てきたのでしょうか。「泰山」の表現が、この句を引き立てていると思われます。名句と言うことでしよう。

念の為、葉先生の秀逸二句を記録しておきましょう。

人恋し人煩わし波の音

一步出ずれば我旅人となる心

右の二句は、きれいな表現で、誠に位の高い代表作のひとつです。じっくりと味わつて下さい。

真つ白に張り替えた障子、私は勝手に冬を想像しました。母上様が炬燵にて、読書でもなさつておられるか、それともお茶など召し上がつておられるであらうかと、先生はお声を掛けないのも愛、と、見守りつつ静かにお部屋の前を通り過ぎられた。(障子の中に) えも言われぬほのぼのとした情景が浮かんできます。私の大好きな一句です。

編集長からの依頼に接し、改めて「定本 西尾葉句集」を読み返してみました。

酒をこよなく愛し、家族を愛し、万人を愛する、その先生の包容力が路郎イズムの命ある、すばらしい誰にも真似の出来ない句に移行したのだと、今更に尊敬の念を深くいたしております。

現在は「川柳塔まつり」に変更されましたが、その以前は一月十五日が「おめでとう会」でした。宴では分け隔て無く私などにも酒を注いで下さいました。恐縮しながらとても楽しい気分にならせて頂きましたのを、思い出しております。川柳のお陰で、偉大なる先生にお目にかかれましたことは生涯の宝と思っております。

十七回忌にあたり改めて、西尾葉先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

酒仙とも言われ中毒とも言われ 葉

川 端 一 歩

川柳塔の同人であつた神谷凡九郎さんから、「川柳雑誌」昭和二十九年から昭和四十年終刊号まで、「川柳塔」誌創刊号（後日「川柳雑誌」と通巻）から平成二年十一月No.762まで譲り受けました。大八先生の「路郎物語」を読んで感動したことは本誌で前に書きました。

もう一つの感動は、葉先生の巻頭言を読んで、あの温和人柄に惚れたことです。残念ながら葉先生とは「川柳大阪」の五〇〇号記念川柳大会でお会いしたのが最初で最後となりました。先生のご葬儀の折「もつと早くお近づきしていたら…」と悔みました。二年程前、古今堂蕉子さんに「父の本を整理するので手伝ってほしい」と言われ、その折に、「誹風柳樽通釋」三巻、「川柳漫談」など数冊頂き、その中に、合本「たまむし」（卓球の愛好家で組織した吟社）昭和三年、五年がありました。「たまむし」は、川柳よりも柳論がおもしろい。相手が三太郎であれ、久良伎であれ論争を喰つかかる愉快な吟社です。葉先生は巻頭言（第732）「受身」の中で、「受身とは投げとばされる練習である。人の前で叩きつけられる練習である。人の前でころぶ練習である。人の前で負ける練習である。」と。先生のやさしさときさの原点はここにあると思っています。

一步出ずれば我れ旅人となる心 葉

宮 西 弥 生

西尾葉先生を偲ぶ一句となれば、あまりにも有名なこの旅の句に尽きると思います。

早いもので「葉先生」とお呼び出来なくなつて今年で十七回忌。「光陰矢の如し」です。その昔「人間は何故に死ぬのでしょうか」、ふとこの言葉が脳裏を過ります。

先生は大の旅好き、一年の半分はお留守だったと伺いました。川柳塔社でも奇抜な旅を發案され、私達はお供を致しました。中でも海外、ハワイ四泊六日、日米親善川柳大会が最も印象深い記憶です。

それからの幾星霜の年月、わが川柳八尾句会の紆余曲折を乗り越え、先生の門下生、内海幸生さんも、余儀なく闊病の折柄、ある日、夢枕に葉先生のお姿。「弥生さん頑張ってますなあ」。幸生さんその一言に發奮。それから句会へ出席というエピソードに、先生のひたすらなる川柳の情熱に感謝のみであります。

今も尚、八尾天神社で、地域の連携で賑やかに存続して居ります。先生の「和顔」とその温もりは太く長く消えないでほしいと願う熱い人達ばかりです。

最後に、このたび葉先生の思い出を記す機会をいただきました事を、心よりお礼を申し上げます。

牛の瞳に人間何をあわてとる

葉

林 瑞 枝

人恋し人わずらわし波の音

葉

福 本 英 子

昭和45年の山陰川柳大会にご出席をさせて頂きました時の葉先生の句が素晴らしかったので、掛け軸にして二階の客間にいつも飾っております。その頃は私も若かったので、津山川柳大会に選者で行きましたら、何と葉先生が大阪から私の応援にご出席を頂いているのに驚きました。その後、高知の川柳大会に選者で行きました時にも葉先生の御姿が見えたのに驚きました。

沢山のご出席者の中から、お上品な男性の「葉」のお声があり、とても嬉しくて選者という舞台から全身の震える思いが致しました。やっぱり葉先生の御出席ということは、川柳の大会の価値を高くするのも……と思いました。

葉先生の御自宅は八尾市のご財閥ざいぶつなのかも知れないと、御自宅におうかがいした日もあり、御家族のお優しい御顔にお会い致しました。その頃は古今堂蕉子さんはまだ少女で、西尾家の綺麗なお嬢さまでした。

昭和60年9月葉先生の句碑金婚祝賀大会が大阪であり、上阪して川柳塔社の柳友の皆様と握手を交わし合うてよるこびました。葉先生より頂きました直筆の文字は、美しくわが家の宝物にしております。川柳のおかげにて大阪の御立派なる先生とおつきあいをさせて頂き、この幸運をいつも感謝をさせて頂いております。

独り暮しの長い私にびつたりの句です。昔から好きな句でしたが、若い頃はそれほど思っていなかったのが八十歳を越えて、つくづく身近に感じるようになりました。

お陰で人恋しくなるほど暇がありません。身内は勿論ですが、川柳の先輩や仲間をはじめ、いろいろな友だち、近所の方々と賑やかに日々過ごしております。

珍味が届いた、おすしを作ったと言つてはお物葉まで、たびたび運んでくれるのです。嬉しいことです。

年寄りを大切に、まるで昔の下町そのままの生活をしています。長屋ではないが一寸の風邪でも氣遣い見回つて尋ねてくれます。

マンションの孤独死などニュースを見るたびに、良い処に住めて良かったとご先祖さまに感謝しています。

それでも時には一人でゆつくりしたいと贅沢な悩み、そんな時、人わずらわし波の音と呟いています。歳ですね。

お洒落で大らかでいて、細心の先生に地方の大会や本社句会には可愛がっていただきました。川柳塔始め、先生に接しられた方々は、みなさんそう思っているでしょうね。

もう十七回忌そんなに遠く思えないのに……。
葉先生本当にありがとうございます。

無人駅を發つて無人駅へ帰る

葉

岩佐 ダン吉

「無人駅」冬枯れの中でも時に梅の香りを運んでくる風。早春のふる里・広島県（現）三次市から大阪へ向かったのはもう半世紀も前のことでした。見送る母は「（姪の）靖恵によろしく、下宿の皆さんには迷惑をかけないように、手紙を書きんさいよ」と小煩い。きつと私は「もう、わかった、何べんも同じことを言うな」そんな言葉を吐いていたのでしょいか。

「無人駅を立つ」農業で立ちゆかなくなった故里でたったひとつの交通だった三江線も無人駅に、兄弟三人のわが家もその日から母ひとり。今にして思うと峻険な山々を縫って帯のように流れる江ノ川、小さくなっていく母の姿には心に迫るものがあります。

ローカル線すべての駅に母が立つ

（ダン吉）

反戦川柳人・鶴彬を訪ねた石川県の七尾線、無人駅を通過するたびに和服姿の小さい母が立ちつくしているとそんな思いがしました。今や母もなく存続すら危うい三江線、でも私にはこの駅に安堵と少し哀しみの思いを抱いて帰る以外にありません。

ふる里の空でほんとの背伸びする

（ダン吉）

いつだったか葉先生が「ダン吉さんか、雅号を考えてあげよう」と言ってくれたことがありましたね。

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

葉

清川 玲子

四季の移ろいをいち早く感じる山間に、この句碑の建つ白鳥温泉がある。地元はじめ近隣の県からも大勢の温泉客を迎えて居る。

平成十五年、全日本川柳二〇〇三年香川大会の前日には、まだお元気でおられた薫風師と川柳塔のご一行がバスで立ち寄り下さり、おっぱこ吟社の方の心配りのお茶を召し上がったのだいたいの、この温泉の広間でした。

平成四年九月、川柳塔とおっぱこ吟社合同川柳大会にご出席くださった葉主幹は堂々の恰幅のお体にも、優しい目を四方に向けられ選者席に座られて居た。白鳥町でのこの大会は、私にとつてもはじめてづくしの川柳大会であった。県内外の柳人の方々から多くのものを学んだ貴重な時間だったが、葉先生をはじめ拝顔致し二度とお会いできない大会でもあった。

平成十三年五月、八尾グランドホテルでの葉先生七回忌川柳大会は幸いにも出席でき、ホテルご自慢の温泉にくつろいだ。翌日の大会は自信句持参の柳人連で埋り、西尾主幹の統一力の強さに触れ、薫風師編による『和顔愛語』葉句集をいただき、この上ない有意義な一日だった。白鳥温泉の句碑の前に佇むたび、年月の移り変わりの早さを感じることが、川柳塔一員の誇りが胸一ぱいにひろがってくる。

湯煙りの鹿野の里の別れかな

葉

(平成二年鹿野みか月大会において)

土 橋 螢

私が鹿野みか月会長るとき(平成二年)西尾葉先生ご夫妻をお迎えし、とても盛會に大会を成功させたことを思いだします。その後葉先生から丁寧なお手紙をいただき、今も大切にその教訓を守り、川柳塔に投句を続け、橋高薫風先生、河内天笑先生と川柳塔主幹のご指導を仰ぎ、現在は小島蘭幸先生へと發展しています。いま川柳塔鹿野みか月があるのは、「継続は力なり」と教えてくださった諸先生と先輩柳友のお陰であり、感謝感激の日暮しをしております。葉先生との出会いとお別れを愛しんでおります。「握手味」のお手紙を今日も開いて、涙が滲んできました。十七回忌とは夢まぼろしのようです。平成二年の大会の前と、大会後のお手紙を表装して、二本の箱入りにして私の道しるべとしています。葉先生の「継続は力なり」の言葉を胸に秘め、生涯の宝物としてこれからもいのちある限り川柳を愛し続けてゆきます。あれから二十四年の歳月が流れ、葉先生に教えられた五七五の道を大切に、死ぬ日まで忘れないよう勉強させていただきます。

葉先生の十七回忌にあたり報いきれないご恩に感謝して師のご冥福をお祈りいたします。これからも川柳塔の發展と先輩と柳友のご指導ご鞭撻乞い願いたてまつる。合 掌

老夫婦鬼も逃げない声でまき

葉

米 田 恭 昌

葉先生の句には名句佳句数多あるが、この句ほど一読明快で誰にもわかり且、川柳の三要素を含み、川柳とは何かを説明するのに適した句は他にないと思う。川柳は省略の文芸であること、川柳には軽味、穿ち、ユーモアの三要素があつて云々と、そしてユーモアの中に哀感、風刺の中にもほんわかした和らぎ、暖かさがあれば——と私はカルチャーでもまた友人に訊かれた時にも、先ずこの句を例にあげて説明している。

今年の節分は丁度ボランテアでデイケアホームへ行った日で、この句を筆頭にあげて、この句から脳裏にどんな情景が浮ぶかを聞いて回りつつ、川柳の話をしたのだった。子も孫も独立して別に住み減多に帰って来ない。でも老夫婦は昔からの慣わしで、豆まきをせねば落ち着けない。だから豆も噛めない入れ歯をもぐもぐさせて、頼りないか細い声で豆をまいているのである。居間でばあちゃんが熱いお茶を入れて待ってくれている。何か面白おかしく、それでいて何か切なくさみしい節分の夜なのです。でも句の全体を通して老夫婦の醸し出すほのほのとした温かい夫婦愛を、読む人にジンと感じさせる句ではないでしょうか。ユーモアとパース、一読明快、私の大好きな句の一つです。

西尾 葉 略歴

本名 西尾 巖 いわお

明治42年3月6日富田林市富田林町で誕生

大阪府立富田林中学校卒業

関西大学法学部中退、藤田銀行を経て大阪帝国
大学医学部事務局に勤務、戦後、七宝製菓株式
会社を設立

昭和6年 阪大川柳会入会

昭和12年 川柳雑誌不朽洞会会員

昭和31年 不朽洞会理事長

昭和45年 川柳塔社副主幹

昭和45年 句集『水鶏笛』刊行

昭和55年 大聖勝軍寺山門脇に句碑建立

「一步出ずれば吾れ旅人となる心」

昭和57年 川柳塔理事長・主幹

昭和58年 川柳全集12『西尾葉』刊行

昭和63年 秋の叙勲で「木杯一組台付」受章

平成4年 社団法人 全日本川柳協会常任理事

平成5年 香川県大川郡白鳥町に句碑建立

「温泉や座り羅漢に寝る羅漢」

平成6年 川柳塔社名誉主幹

平成7年5月15日死去 法名 水鶏院釈眞諦

一分間の柳論

西尾 葉

恩師麻生路郎先生は「川柳は人間陶冶の詩である」と教えて下さった。我々は柳論を聞かすのはどこまでも聞わしてもよいが、そのために人間関係を断絶しては、川柳をやっている価値はない。川柳をやる大らかな愛の眼こそ、愛の心こそ、川柳が立派に伸びていくのではないか。

川柳塔の同人は余りにも仲が良すぎると、他の結社から噂されている。それも恩師の教えを心しているからである。川柳を詠む人が排他的なことをするようでは、如何に佳句、秀吟をものしても、その句には心が通っていないのではないか。川柳には寛容の精神と抱擁の心があつてこそ、命ある句が生れるのである。

人類は悲しからずや右派と左派 路郎

という句を、先生は詠んでおられる。そして、「これが私の世界観である。私は常に川柳に生きることによって、平和な世界を生み出したい念願に燃えているものである」と仰言っていた。もう一度言おう。

川柳は人間陶冶の詩である。

仲良くしてゆこう。

(構造社出版『川柳全集・第十二巻・西尾葉』)

昭和五十八年三月三十一日発行より)

西尾 葉 50 句

兵児帯のゆるみへ春の雲がとぶ
おつうじのあつた話題も老夫婦
迎え傘妻に教える水溜まり
孫がきて碁石がたりぬ駒がない
雨漏りの型ピカソともマチスとも
カメラアイ蜻蛉の目玉蝶の髭
旅枕雨にしあれば雨の詩
路郎忌や美濃の大八備後の亜鈍
死んでまで薨去卒去と段があり
あの晩の風邪よと女嬉しそう
恋人は刺客のようにより添うて
最後の最後の味方は妻なりき
油断がならぬとは伴のことであり
社長今日孤独の二字をかみしめる
母者人炬燵のかさの尊とけれ
働いた色で夕陽も沈むなり
長生きも芸のうちなり秋叙勲
ボーナスは妻の入歯にもつてかれ
炎の如き言葉を吐いて淋しけれ
てつちりや路郎門下の生き残り
初旅や伊豆は菜の花豆の花
塔あれば影 人あれば旅の影
旅だより港の雨を書いている
カンナ咲くわが血の音をきく如し
花曜 酔曜 黙曜とて盃をもち

うす糊がきいてる母の小さい足袋
時雨よし河内のはての灯を守る
意見する儂がまだまだ遊びたし
仮縫いのお世辞前から後ろから
ご近所が舌打ちをする家が建ち
白樺の道 団体でゆくあほらしさ
ワテが通りまっせという歩きぶり
持つて死ねなんだらしい銀行から楮
友遠方より来たるまた保険なり
待ち呆けさすには惜しい美人居る
逃げ腰で四十の恋をしてるなり
酔昆布の匂いで妻にささやかれ
虞や虞や汝を如何せん四十八
結局は大島にして古都の秋
読初めや句集旅人福寿草
膝を抱く癖も恩師に似てきたり
駅を出る五百羅漢は定期持つ
和顔愛語元旦の心しる
元旦や七十年の猿芝居
紫陽花や色即是空昼の雨
蓮の花一会の旅は続くなり
十二月邪魔なところへ人が佇ち
子供部屋静かに爆弾作つて
文字読まぬ今日一日の不倅せ
太陽に我八十の肋骨

誹風柳多留——一篇研究 69

小栗 清吾・伊吹和男

山田 昭夫・増田 忠彦

山口 由昭

清 博美

536 長刀をはつして来たと木くすりや

小栗 木葉屋は、狭義には、まだ調剤してない薬品を売る店。広義には、一般の売薬店。

(二江)

句意は、そのまま、木葉屋が長刀を外してきたというだけだが、長刀に特別の意味があるかどうかわからない。類句を見るに、木葉屋が薬の売り掛けをきつちり取り立てる句がある。主語句も御不勝手屋敷から、売り掛けの代に長刀を外して持ってきたというのである。武家相手にそんなことができず、作った句ということにしておく。

木葉屋せげんのそばで五両取り

五 20

くやみいひながらせたる木葉や

八 42

山田 礎のように解する他はなさそう。

山口 傷を負った男が木葉屋へかけ込んで来たのではない。多分喧嘩であろうが、傷口を見た木葉屋が「傷は大した事はない。長刀は外している」と元気づけているのでは。

清 礎稿が面白い。

537 墨染めの御身たハきうの過言也

小栗 過言は、相手に失礼になるような、度を過ぎた言葉。(一日)

遊女の妓夫が、医者に化けた坊主に対して「墨染めの御身だ」と正体を暴露するようなことを言ったのは、いかにも失言だということ。『墨染めの御身』は文句取りかとも思

が、分らず。

山田 賛。必ずしも文句取とは思いません。

山口 同。「墨染めの身なのにあまり注文を付けるな」とでも言ったのであろう。

清 賛。

538 くらわせてかつて置クハとていしゆいひ

小栗 亭主が女房を罵倒している句だろう。朝帰りの喧嘩かと思うが、そのような措辞もないので、オーバーな罵倒の言葉を句に詠んだだけとしておく。万句合の前句は「きやうさんな事」。

清 賛。

539 顔上ケていなとつき出ししかられる

小栗 突き出しは、禿からではなく、素人女のいきなり女郎となった者。(二江)

突き出しは、まだこの世界に慣れていないので、張見世に出ても恥ずかしそうに下を向いている。それで遣り手などが「顔を上げていな」と叱るのである。

つき出しのしるしひたいで人を見る

清 賛。

一三二

540 前髪をならんでおとすこふく店

小栗 「前髪を落とす」は、男の子の元服。大店の呉服店では多数の丁稚が働いているので、元服も大勢並んで一斉に行うのである。

げんふくも一どきにすることふく店二二五
清 賛。

541 すいながら跡トをひねるハげびたもの

小栗 煙草を吸いながら、片手で次に詰める煙草を捻っているのは、いかにも慌ただしそうで下品だということ。清博美氏『川柳江戸喫煙志』によれば、煙草が喫み始められた頃は作法がうるさかったそうだから、そういう事情が多少残っている句かもしれない。

清 賛。

542 手打だと常世しなのものがものハあり

小栗 謡曲「鉢木」の句。佐野源左衛門常世は、時頼に粟飯をふるまい、梅・桜・松の鉢の木を焚いたために、梅田・桜井・松枝を賜った。その伝で行くと、もし「手打ち蕎麦」でも振る舞ってあれば、信濃国ぐらい賜ったかもという意。

源左衛門酒だとしてうし貰ふ所コ 二七二
清 賛。

543 五日迄たてゝ置キなとさかるとし

小栗 「下がる年」は「宿下りをする年」の意と思う。商家の丁稚が年一回敷入りがあるのと異なつて、御殿女中は毎年宿下りを許されたわけではないようで、『川柳江戸エロティック・リアリズム』の「江戸城大奥秘話」には、

大奥では御目見以上に宿下りなく、御次より以下の者だけに、毎年春先、宿下りを許された。それも奥入りした当座は駄目で、三年目に一回六日、六年目に十二日、九年目に十六日の暇を賜わったという。

主題句は、そういう三年に一度の宿下りの年のことを詠んだもので、実家ではふだんの年と違つて「五日まで立てておきな」と言うということ。立てておくものは、宿下りが春先が原則であることを勘案、四日に収納するはずのお雛様のことだと思ふ。

清 賛。

544 女房がよめば手紙もつの田川

小栗 亭主の悪友から来た「隅田川へ出かけようじゃないか」という手紙を、女房が読んでしまったのであろう。女房は、隅田川から

吉原への計画を察知して、早速に角を出す。
「角田川」ならぬ「角田川」という次第。

角田川女房たつねて来ぬばかり 安七亀一
清 賛。

545 二三年でつちハ素人手ほんなり

伊吹 商家などに奉公する丁稚は、最初の二三年は手習の師匠に付かず、奉公先で読み書き算盤を習った。先輩の手代や番頭の書いた手本をなぞつたりして字を覚えたのである。手習の師匠のところでは、それぞれの仕事に応じて、「商売往来」「番匠往来」「百姓往来」「江戸往来」などが教科書となった。

小栗 一般的に六、七歳で寺子屋に入り、三年位勉強してから、丁稚奉公に上つたものと思う。丁稚奉公先で、更に寺子屋へ行つたとは思ふえぬから、先輩の手代が、より実地に則した教育をしたのだらう。そのことを、寺子屋の教科書が「往来物」などの刊行本であるのに対して「素人手本」といったものか。

清 同右。

菠薐草が伸びるとき

『麻生路郎読本』を読む―

小池 正博

昨年九月、『川柳雑誌』『川柳塔』通巻一〇〇〇号記念として『麻生路郎読本』（以下、『読本』と略記）が出版されました。千号というのは気の遠くなるような数字であり、その持続的努力に敬意を表します。

大阪市立中央図書館には麻生路郎が寄贈した川柳関係の蔵書「短詩文学文庫」があり、私もしばしばそのお世話になっています。「川柳雑誌」のバックナンバーもそろっていて、川柳の歴史を調べるためには不可欠の資料です。過去に生み出されたおびただしい川柳の言葉は、その大部分が書物として残ることもなく消えてゆきます。それは実に贅沢な言葉の消費です。そういう意味で川柳は「蕩尽の文芸」「無名性の文芸」だと私は思っているのですが、往時の川柳の息吹を肌で感じとるには、川柳誌を手にとってみるのが一番近道でしょう。

「短詩文学文庫」について、路郎はこんなふうに述べて

います。

「六十余年を短詩界に生き抜いて来た私として、その晩年を日本短詩界のために、余命を燃え尽くしたいと考えて、短詩文学文庫の創設を思い立ったのである。この文庫は一大阪市民のものでなく、オール日本の人たちの洗脳に役立たせるためのものであることは、大原孫三郎氏の創った倉敷美術館が一倉敷市民のためでないのと同様である」（『川柳雑誌』四二二号、『読本』「語録」より）

残念ながら、短詩文学文庫が大原美術館と同じように利用されているとまでは言えませんが、この文庫によって自身は川柳史に対する眼をひらかれました。「川柳雑誌」だけでなく、『新興川柳詩集』をはじめ川柳の宝物を手に入れることができるのは路郎蔵書のおかげです。

麻生路郎の業績に対する評価はさまざまですが、この『読本』に収録されている文章で言えば、河野春三の評価がポイントを突いたものだと思われれます。「詩性と大衆性との中で」という文章で春三は次のように書いています。

「大正末期のいわば、混沌とした社会思想の転換や、新興川柳と伝統川柳との思想的軋轢の情勢を頭に描いていただと、麻生路郎が、日車や半文銭等と親しくし、また半面、当百を主流とする五葉、水府等の伝統川柳にもあきくららず、しかもかつて路郎自身が刊行して来た『雪』『後

葉柳「土団子」の高踏を捨てて大正十三年二月、「川柳の社会進出」というテーゼを掲げて、平易でしかも内容の清新な、いわば「詩性」と「大衆性」の中で一つの文学運動を起こそうと決意したことに、彼の存在価値を公平に客観的にボクは評価したのである。

「詩性」と「大衆性」は常に川柳につきまとう問題ですが、春三の文章は麻生路郎についての客観的評価として過不足ない捉え方のように思えます。ただ、一人の川柳人の仕事には要約や評価からはみ出す要素が必ずあるはずなので、「読本」を読みながら更に広がりと思った路郎像を構築していくことが読者一人一人の課題になるでしょう。

「雪」（大正四年八月創刊）や「土団子」（大正七年七月創刊）のころの路郎はかなり過激でした。「行く末はどうあろうとも火の如し」はこの時期の作品と言われています。また、「土団子」には次のようなラディカルな主張を掲載しています。

「現代の柳界は例せば青い玉と赤い玉の時代である」

「青い玉は静的である。池の中の水である。水底に沈殿せる黒い土である。その土に壓せられたる朽葉である。彼等は遂に自己の流れ行く運命をさへ知らないのである」

「赤い玉は動的である。天上に燃ゆる太陽である。世にありとあらゆるものを焼かんとする火である。この故に頗る危険である。しかしながら此の危険のない處に真の革命はない筈である」

こういう青春時代を経て、大正十三年二月、彼は「川柳雑誌」を刊行します。大正十三年にはすでに新興川柳運動が巻き起こっていました。路郎の友人だった木村半文銭や川上日車はこの運動の強力な推進者でした。このときの路郎の態度は特徴的です。半文銭・日車の誘いを彼はきっぱりと断って、経営的に自立した川柳雑誌の発行を目標としたのです。「読本」（「麻生路郎文集」）には「半文銭氏の一読をのぞむ」という文章が収録されています。

「自己のために川柳があるのだから主張を貫くためには急進する」といふ事と、自己のために川柳があるのだから主張を貫くためには漸進するといふ事とは同じでなければならぬ。だから、その一方が一方を非難することは出来ない。ゆく所まで行つて仆れる方が芸術的だといふが、それでは主張を貫くといふことはお留守になつてゐないか。主張を貫くためには途中で死んでも死にきれぬといふことの方が、どんなに人間的で、しかも悲壮で芸術的ではなからうか」

ここには川柳人の二つの生き方が浮き彫りにされています。半文銭と日車が「小康」を出すことになったとき、日車は路郎にも参加するよう強く要請したということです。けれども、路郎には薄っぺらな雑誌を不定期に出したところで、川柳が社会的に認知されるには至らないという苦い認識がありました。彼は現実路線をとって、「川柳雑誌」に人生のすべてを賭けることにしたのです。川柳の社会進

出、川柳の社会化が彼の目標となりました。大阪市立中央図書館で「川柳雑誌」のバックナンバーを手にとると、この時代の熱気がこちらにも伝わってくるようです。

昭和十一年八月の「川柳雑誌」に掲載された「川柳職業人宣言」は有名です。「私はいよいよ川柳で飯を食ふことにした。イヤ喰べさせて貰うことにした」という宣言です。

『読本』が興味深いのは路郎自身とは別の視点をもつ川柳人の文章がかなり収録されていることです。そういう例として、私には森田一二の文章がおもしろかった。周知のように森田は新興川柳側の人物です。彼は「川柳職業人宣言」についてこんなふう述べています（「川柳職業人宣言」を読んで―麻生路郎への公開状―）。

「君が『川柳雑誌』を創刊した当時から僕は君を芸術家麻生路郎としてよりも、むしろビジネスマン麻生路郎としての手腕を高く評価していたものだ。これは事業としての経済的関係を離れては、芸術もまた社会的価値をもつことは出来ない」と云ふ僕の持論からしては当然なことでもあったのだ。君は果して如何にも事業家らしく雑誌の経営にその片鱗を見せてゐた。従つて内容的には可成りレベルを下げた編集振であつたことも見逃せなかつた。けれども、一面またその事によつて「川柳雑誌」が今日の成長をなし得たと云ふ―吾々にとつて苦い現象ではあるが、大阪と云ふ産業都府と、それを反映する處の市民性なるもの、特殊性を知る事によつて、一応あゝした形式の雑誌もあつて、の

だ―と云ふ認識にまで達したことも事実である」

物事には常に二面性があります。森田が路郎を否定しているのではないことは明らかです。文芸とビジネスの両立は短詩型文学では至難のことでしょう。特にマーケットが成立していない川柳の世界では路郎の望んだことを現実化するのとはとても困難で、情況はいまでもそれほど変わっていません。

ここまでは、「大衆性」の方にスポットを当ててきたので、次に「詩性」の方について述べてみましょう。本書には麻生路郎作品として「旅人」「旅人その後の作品」が収録されています。

君見たまへ波菰草が伸びてゐる

路郎の作品の中でもとりわけ有名な句のひとつです。『詩川柳考』の著者・高鷺亞鈍はこの句を「詩川柳」として高く評価しています。高鷺亞鈍は詩人・藤村誠一のペンネームです。高鷺の言う「詩川柳」は革新川柳と言われる「詩性」とは随分異なっていますが、平明でポエジーのある路郎の作品は彼にとって川柳の理想形だったのでしょう。

二階を降りてどこへ行く身ぞ

嘘をまろめて書斎けうとし

「二階を降りて」は「旅人」の巻頭句です。一読して気づくように、五七五のリズムではありません。麻生路郎は「七七句」をときどき作っています。『読本』からは離れませんが、路郎著「川柳とは何か」には「七七型の句に就いて」

の章があり、次のように述べられています。

「明治四十二年に物故した小島六厘坊は川柳と詩形が違以上、これを川柳と称せず、十四字詩として全然別個の詩とした方が穏当であると述べているが、私は寧ろ従来通り、川柳の一形式として川柳中に包含するのが穏当ではないかと思うのである」

路郎作品に七七句が時々見られるのはこのような考えに基づいて意識的に作句されていたことが分かります。

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

いつまでも肉と葱との仲であれ

雲が欲しいといふ妻のうらわかく

君・君・憂鬱を配つてあるのは止せよ

雲の峯という手もありさらばさらばです

路郎の川柳観については「語録」の部分に端的に表われています。よく知られている言葉ですが、やはり引用しておくことにします。

「川柳とは人間及自然の性情を素材とし、その素材の組合せによる内容を、平言俗語で表現し、人の肺腑を衝く一七音字中心の人間陶冶の詩である」

『読本』の読みどころは様々ありますが、東野大八の「麻生路郎物語」が完全収録されているのが嬉しいのです。「川柳塔」昭和五十年一月号から昭和五十二年七月号に掲載されたものです。麻生路郎論として、これを越えるもの

は当分ないでしょう。また、これまで読む機会がなかった麻生霞乃作品「福寿草」が読めるのも本書の魅力の一つです。

『麻生路郎読本』にはさまざまな資料が多角的に収録されているので、読者には自分なりの路郎像を作り上げる楽しみがあります。そこには現在にもつながる川柳のさまざまな問題を考える手掛かりがありそうです。「川雑岡山最後の日」のような、ある意味で路郎に不都合な文章もきちんと収録されています。これだけの資料を集めたのは編集の勝利であり、読者のひとりとして深い敬意を感じています。これまで麻生路郎について調べるときは川柳全集第二巻「麻生路郎」(構造社出版、橘高薫風編)を利用していましたが、今後はこの『読本』を参照したいと思っています。六大家のひとりとして神格化するのではなく、その人間像を深くとらえ、川柳の未来へ向かって更に前進していくことが後からやって来たものの課題ではないでしょうか。

小池 正博プロフィール

昭和二十九年生まれ。「MANO」「バックストローク」「豈」「五七五定型」同人。「現代川柳点鐘の会」「きさらぎ連句会」会員。句集に『セレクション柳人6・小池正博集』『水牛の余波』、評論集に『蕩尽の文芸―川柳と連句』、編著に『セレクション柳論』。

愛染帖

新家 完司 選

和歌山市

古久保和子

お隣の前まで掃かぬのがルール

(評) 親切とお節介は紙一重。嫌味とか当て付けと受け止められたら不本意。境界線の外側、五十センチぐらいまでが無難なところか。

シドニー

坂上のり子

自慢する人には嘘もついておく

(評) 不愉快な自慢話をいつも我慢して聞いてやっているのだから、それぐらいのお返しは閻魔さまも許してくださるだろう。

米子市

高田 振作

葬儀屋の見学会に妻が行く

(評) 新しくできた葬祭場。もちろん、奥さまとしては亭主の葬儀を考えてのこと。「自分が先に逝くかも」などは、まったく想定外。

寝屋川市

平松かすみ

友達でいいな便秘の相談

(評) 亭主に対する不満や献立の話ぐらいならまだしも、便秘の相談までできるとは…。何でもあけすけに話せる友人は宝物。

横原市

安土 理恵

本当はわたくし善女なのですが

(評) 「誤解されているようですが」という弁明。何をもって「善女」とするかは難しいところだが、本人が言うのだから間違いない。

三田市

雑賀 一泉

顔以外なんでも揃う貸衣装

(評) サイズを言えば宅配便で送ってくれるレンタル衣装。タキシードから十二単まで何でもある。顔も貸してくれたらいいのにね。

鳥取県

平木 公子

結論の要らぬ雑談盛り上がり

(評) 何かを決めるとなると、多少は責任が伴うが、そのような条件はゼロ。まったく自由な雑談の輪。これも人生のオアシス。

堺市

澤井 敏治

朝昼晩酒の代わりに風を飲む

(評) 「風を飲む」というのだから普通の呼吸ではなく、心肺機能を高める深呼吸。たしかに、酒よりは身体のためによさそうである。

大阪市

岩崎 玲子

損得が瞬時働くまだ元氣

(評) 身体の動きは緩慢になってきたが、頭の回転は衰えていない。「損か得か？」を瞬間的に判断するのは、生き抜くための本能。

奈良市

岩本 造一

色と欲八十路でやっとなめる

(評) 若い頃には、莫大なエネルギーを消耗さ

せられた色と欲。薄れるにつれて、まるで仙人のように清々しい境地。であろうか？

八王子市

播本 充子

この世の終りかぐらんぐらん揺れる

大阪市

津守 柳伸

戻り寒追い打ちかけてきた地震

箕面市

広島 巴子

救援の様子じわつと陰濡れ

東大阪市

北村 賢子

いのち救う水と命を奪う水

鳥取県

竹信 昭彦

大地震日本の明日が試される

和泉市

横山 捷也

父逝つて再び髪を染めぬ母

豊中市

荒巻 夢

ひっそりと老母くの字に眠つてる

香南市

桑名 孝雄

逝つた子に手に乗る程の雪たるとま

高槻市

初代 正彦

空白を後で埋めてる日記帳

堺市

矢倉 五月

時事吟は詠めぬ動きが早過ぎる

奈良市

初代 正彦

百歳体操そんなつもりは更けない

高槻市

初代 正彦

若者の街でエトランゼの気分

高槻市

初代 正彦

イヤホンで知った左右の聴力差

高槻市

初代 正彦

羽曳野市 永田 章司
染めた髪気にする君はまだ若い

米子市 小塩智恵
雖まつり錦糸卵をたつぷりと

大阪市 伏見 雅明
適当にメディアが選ぶ街の声

東京都 岸野あやめ
初曾孫抱き出鱈目の歌うたう

河内長野市 村上 直樹
男たる威厳胸毛の二、三本

鳥取市 倉益 一瑤
カーテンをピンクに替えて魔女気分

河内長野市 梶原 弘光
気を抜くとすぐに背中が丸くなる

酒二合丁度手頃な自制心
忙しくすると幸せそうに見える

藤井寺市 太田扶美代
夢多き孫でダンブに憧れる

札幌市 三浦 強一
毒舌の所為で風邪ひき治らない

一息を入れて人生九合目
豊葦原瑞穂の国に美酒があり

羽曳野市 徳山みつこ
シーンとしていたら心配をかける

ちよっとだけ変わった人と半世紀
豊中市 水野 黒兎

常備薬飲んでから乗る終電車
ほどほどの暮らしに似合うしじみ汁

京都市 高島 啓子
物置くとそこへ埃が寄ってくる

宇部市 平田 実男
男でも女でもない老い二人

鳥取県 細田 裕花
ストライクばかりでつまらない会話

堺市 奥 時雄
掛け捨てで良いの地震とガン保険

香芝市 大内 朝子
こてこての化粧落として皮膚呼吸

四条畷市 吉岡 修
遺言を考えてると元気でる

なぜですと言いたくもなる薄い運
和歌山市 木本 朱夏

撮り鉄に乗り鉄春は忙しい
咳込んでぼろぼろ落ちる目も鼻も

紀の川市 辻内 次根
飲兵衛のブログ見ていて父のこと

同性的気持の悪い手の温み
橿原市 居谷真理子

午前三時製造というお弁当
努力賞ばかり溜まっていくなの腑

弘前市 高瀬 霜石
胴上げを見ている側にいつも居る

クライマックスで外れるばかりの歌
鳥取県 加賀田志延

春雪に二度寝のような谷の村
八つ当たりの日はキッチンがピカピカ

黒石市 相馬 一花
酒と水交互に飲んでつつがなし

芦屋市 黒田 能子
長生きは最高などと言いくらい

大阪市 吉村 一風
邪念消し人の顔見ず万歩計

枚方市 小林 わこ
改札を通って好きな人消えた

唐津市 仁部 四郎
月へ行くそこからどこを狙うのか

八尾市 高杉 千歩
口笛が何時も聞こえていた昭和

ひと手間をかけた料理を三日食べ
堺市 志田 千代

腹ばかりすかしゴメンとお爺さん
苦にしないルックスなんて見馴れます

和歌山市 牛尾 緑良
丸ふたつ描いてあなたですわわたしです

重心の高さに主張また揺れる
西宮市 吉井菜々子

貰い泣きソースの焦げる匂いして
エコエコとうるさい君も厚化粧

神戸市 山口 光久
安物の焼酎だつて同じ酔い

横丁の地蔵へ今日を告げにゆく
大阪市 西川 冷子

猫が来る放尿させずにらみ追う
浜風いでテトラポッドがじゃまになる

八尾市 村上ミツ子

書かぬ日のだんだん増えていく日記
やせなはれ歩きなはれと言われても

大阪市 笠嶋 惠美

しゃべるのがいやでメールにしたらしい
お葬式行つて疲れて二日寝る

西宮市 片山 忠

男でも憶えています初キッス

鳥取市 近藤 秋星

冬將軍うちよろせずにもう帰れ

堺市 村上 玄也

女房の話にいつも主語がない

大阪府 米澤 俣子

錆びてでも保つ夫婦と蝶番

鳥取市 土橋 螢

君が代のあとに歌つた海ゆかば

尼崎市 長浜 美龍

同じ波長らしいすなり気が抜ける

京都市 坪井 孝一

モナリザの顔が歪んだ欠伸かな

藤井寺市 鴨谷瑠美子

春一番通過 白線までさがる

大阪市 小谷 集一

勝ち組はめつたに來ない縄のれん

海南市 小谷 小雪

出かけ際見ていたように鳴る電話

唐津市 岩崎 實

歳とつて私の賀状今年まで

和歌山市 柏原 夕胡

あら居たのなんて傷つく言葉だな

太田としお

神よりも頼りにできるガン保険

川崎ひかり

孫の声夜空に響く鬼払い

寺川 弘一

男の乳首何かの役にたちますか

板東 倫子

鬱という漢字覚える程使う

岡田 史郎

菜園に雑草萌える春となる

後藤美恵子

ひとり暮らし家計監査はフリーパス

東吉

スキヤンダル暴くチームがあるらしい

田中 章子

運がいい自分で自分ほめている

太田 昭

脛の傷見せなくなつて友に会う

山下 節子

マスクにはため息愚痴も溜まつて

松浦登志子

肩たたき券見つからず貼るシツプ

山口 高明

余裕さえあれば私も伊達直人

津田シルク

宝クジはずれ今年もつつがなし

堺市 遠山 唯教

遺伝子に逆らい切れず酒を飲む

中上千代子

蟹食べにならつて行く紙マスク

喜田 准一

言い訳が出来てピッチの上がる酒

森 茜

ぐつすりと入れ歯が眠る洗淨器

福田 好文

焼酎が主流で閑な猪口銚子

岩崎 和子

朝食の献立うつら床の中

木田比呂朗

気がつけばマイクいつもの早春賦

栗田 久子

出し惜しみしてはいません並の知恵

石田 隆彦

義理チョコも絶えて世間にはじかれる

沢山 啓子

また来ますドアに見慣れた友の文字

宵草

歳だなと思う軍歌がひよいと出る

悦子

ふきのとう待ち切れなくて買い求め

増田 和幸

八十路すぎいまだ懷素寒貧

森吉留里恵

身構えていたらヒヨロヒヨロ球が来る

大臣がビエロのようによく動く

富田林市

山野 寿之

日本の国破綻せぬ間に彼岸まで

和歌山市

福本 英子

戒名は要らぬ雅名が好きだから

豊橋市

藤田 千休

取りはずし可能です 自尊心

兵庫県

上田ひとみ

美代ちゃんに恋して五十年過ぎた

大洲市

中居 善信

代わり映えするよう磨いてる鏡

倉吉市

山中 康子

世渡りが下手で地吹雪ばかりみる

弘前市

高森 一吞

地方紙と共にころげるデコボン五ツ

岸和田市

森元ふみよ

禁煙のチャンスくれた値上げ幅

堺市

荻野 像山

春はもうすぐそこ脱皮急がねば

西予市

黒田 茂代

川柳家の辞書に退屈見当たらす

高槻市

乙倉 武史

郵便の来た音ころ弾ませる

鳥取市

有沢せつ子

目から耳今順調に老化中

三田市

堀 正和

後ろめたさは亭主送ってから昼寝

倉吉市

野口 節子

講義聞き今日だけは嚙む三十回

三田市

上垣キヨミ

長の座に祀られ口を封じられ

福島県

七ツ森客山

スイーツに男も並ぶ平和な世

京都市

三宅 満子

お洒落して行くあてもなし鏡拭く

大阪府

畑中 節子

四面楚歌今日は一先ず縄のれん

池田市

上山 堅坊

番号の四と九こだわる日本人

岸和田市

中岡 香代

涙腺が誤作動をする生あくび

高槻市

左右田泰雄

国民に因果含める消費税

鳥取市

坂本とも湖

春うらら花粉覚悟のハイキング

奈良市

矢野 良一

灰皿の再登場は花器となり

奈良市

尾畑なを江

うじうじと決め兼ねているオベの事

河内長野市

坂上 淳司

平凡な日々を愛して磨く靴

大阪市

栃尾 奏子

井戸掘りの技術はないがボランティア

羽曳野市

吉村久仁雄

私たち今残照のどのあたり

京都市

榎本 宏子

病院で泣きじゃくる孫ボク譲り

奈良市

辻内げんい

茅葺きの家哲学が満ちていた

紀の川市

宇野 幹子

カタログは見るもの買えば金要る

鳥取市

中宇地秀四

はつといてそう言われたら放つとこ

西脇市

七反田順子

大口を叩くチャックが閉められぬ

松江市

三島 淞丘

道をさく顔にも少しこだわって

西宮市

緒方美津子

深読みをしすぎて勘がもどらない

京都市

都倉 求芽

年金が嫌いにさせた奇数月

三田市

石原 歳子

祝祭日多くて取れぬ骨休み

和歌山市

磯部 義雄

幕引きはおまかせします仏様

堺市

近藤 治子

家族にも言えぬ悩みが多すぎる

羽曳野市

酒井 一壺

折角の命きれいに大切に

大阪市

柴本ばつは

所作よりも手首の輪ゴム気にかかる

弘前市

稲見 則彦

税金の申告に行く寒い朝

高槻市

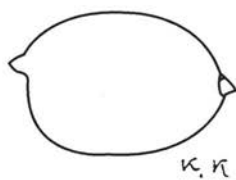
安田 忠子

共選欄

檸檬抄

(薫風書、カットとも)

(投句 七六四句)



「にらむ」 三宅 保州 選

次つぎと続く被災に天にらむ
志望校偏差値にらみ首を振る
将来をにらみ手に職つけておく
花道で十八番の目玉剥く
手抜きしてトイレの神ににらまれる
街中をカメラがにらむ擬似平和
どこからか防犯カメラにらむ街
パソコンに睨まれている肩の凝り
もう睨み効かなくなったデモの波
ソムリエにB級グルメにらまれる
吊革を持っていたのににらまれる
次の次にらんで今は耐えている
乗り遅れにらみつけてる時刻表
ペットにもにらまれている長電話
空っぽの財布の底をにらむ日々

鳥取県	加賀田志延	鳥取県	三浦 強一
大阪市	奥村 五月	札幌市	菅田かつ子
出雲市	伊藤 玲子	雲南市	吉田喜代子
京都市	坪井 孝一	藤井寺市	徳山みつこ
東京都	岸野あやめ	羽曳野市	斉尾くにこ
鳥取県	加賀田志延	鳥取県	関本かつ子
河内長野市	松岡 篤	犬山市	米原 雪子
川西市	永原 昌鼓	鳥取市	小川 注湖
松江市			

「にらむ」 山本 希久子 選

マントルもマグマも日本睨んでる
テレビばかりにらんで喰重うなる
にらまれる覚悟でわたくしを通ず
予備軍が監視カメラに囲まれる
海老蔵の睨み通じぬ酒の席
睨まれて睨み返せぬ妻の顔
目に狂いなければ出世する男
宝石を横目でにらみバンを買う
にらまれてにらみ返したのが返事
夫婦喧嘩挙げ句の果てはにらめっこ
肩越しに昨日の嘘をにらまれる
まだ亡父のにらみが利いている座敷
春雷に雨をにらんだ種を蒔く
にらめっこばかりで笑う人がない
にらめっこいつも妻には負けておく

京都市	都倉 求芽	和歌山市	磯部 義雄
西宮市	亀岡 哲子	鳥取県	大塚美代子
生駒市	飛水ふりこ	大阪市	升成 好
八王子市	播本 充子	豊中市	藤井 則彦
羽曳野市	宇都宮つる	松山市	高橋 宏臣
堺市	大隅 克博	神戸市	山口 光久
京都市	都倉 求芽	鳥取県	加賀田志延
大阪市	鶴田 遠野	札幌市	小沢 淳

通帳をにらみ思案のバスポート
 ウィンドーにらみこれからする貯金
 雑巾で拭かれてにらむ招き猫
 兄弟がじつと見つめる半分こ
 ガキ大将にらみ利かせていたむかし
 大黒柱にらみ効かせたのはむかし
 物忘れ宙をにらんで思考する
 残高をにらめば痩せてくる老後
 負けるもんかとカルテをぐつとにらみつけ
 爆弾を抱えてにらむ古い二人
 余命表手に酒瓶をにらみつけ
 年金の明日をにらみ生きている
 笑うこと無いからしようにらめっこ
 にらむ顔可愛く見えた遠い日々
 流し目で睨んで誤解されている
 好きと言う目付きでにらむから困る
 母さんのにらんだ通り三日だけ
 父さんも家に帰れば睨み利く
 まだ亡父のにらみが利いている座敷
 軍服の遺影睨みをまだ利かす
 にらまれているよう数珠が手放せず
 無礼講その気になってにらまれる
 理不尽を横目でにらんでるゴマメ

大山市	金子美千代
河内長野市	針生 和代
岸和田市	中岡 香代
大阪市	伏見 雅明
鳥取市	春木圭一郎
高石市	浅野 房子
岸和田市	雪本 珠子
鳥取県	細田 裕花
大阪市	吉村 一風
吹田市	太田 昭
河内長野市	村上 直樹
和歌山市	堀 富美子
加東市	中上千代子
堺市	羽田野洋介
橿原市	安土 理恵
鳥取市	竹口 清信
和歌山市	武本 碧
八尾市	田邊 浩三
神戸市	山口 光久
和歌山市	土屋起世子
米子市	政岡未延子
和歌山市	喜田 准一
羽曳野市	吉村久仁雄

睨んでも笑顔を返すモナリザよ
 隈取りのにらみ拍手が鳴りやまぬ
 仁王像黙って僕を戒める
 左右から阿吽の犬ににらまれる
 診察はパソコンにらみもう終わり
 にらまれているから確と生きられる
 年金の明日をにらみ生きている
 仔を守る鋭い猫の目がにらむ
 睨まれているのかお茶が出てこない
 家計簿をにらむ節約もう限度
 愛しくて憎くてにらんでる背中
 にらんだら笑って返す孫に負け
 にらまれぬうちに煙草を消しておく
 拾わない一円玉ににらまれる
 雛祭にらみ合ってる春と冬
 スーパーで値引き時間とにらめっこ
 天運をにらんで風と妥協する
 口許は笑っているが眼は違う
 木の癖をジッと睨んで宮大工
 にらんでも動じぬ太い眉を持ち
 ひらめかぬ白紙へ長いにらめっこ
 犯人じゃないよ防犯カメラさん
 情けあるにらみチームを強くする

大阪市	川端 一步
尼崎市	長浜 美龍
大阪市	栃尾 奏子
豊中市	安藤寿美子
富田林市	中崎 深雪
岩出市	藤原ほのか
和歌山市	堀 富美子
松江市	三島 淞丘
京都市	高島 啓子
箕面市	出口セツ子
藤井寺市	太田扶美代
鳥取県	西谷 悦子
西予市	黒田 茂代
奈良県	谷川 憲司
千葉市	東 志郎
東かがわ市	川崎ひかり
和歌山市	武本 碧
宝塚市	丸山 孔一
高槻市	富田 美義
鳥取市	倉益 一瑤
四条畷市	吉岡 修
和歌山市	坂部紀久子
大阪市	田浦 實

無視されるよりはにらみに耐えている
にらまれてもにらみ据えずに無視をする

和歌山県

森下よりこ

口答え出来ぬ分だけにらみつけ

寝屋川市

富山ルイ子

にらまれてにらみ返せるど根性

大洲市

花岡 順子

にらまれてにらみ返したのが返事

三田市

尾崎 一子

いやでんなそない睨んで脅かし

大阪市

升成 好

にらまれているから確と生きられる

大阪府

岩崎 公誠

睨み合い嫌で覚えた妥協癖

岩出市

藤原ほか

目に狂いなければ出世する男

茨木市

島田 誠一

ちよくちよくとにらまれながら期待され

和歌山県

磯部 義雄

にらまれてその他大勢から抜ける

和歌山県

坂部紀久子

先生ににらまれそうな位置にいる

紀の川市

北山 絹子

睨まれているのかお茶が出てこない

京都市

高島 啓子

にらんでもコビイは独り歩きする

西宮市

山本 義子

肩越しに昨日の嘘をにらまれる

松山市

高橋 宏臣

天井をすこし睨んで天の邪鬼

西宮市

吉井菜々子

ただ天を睨むしかないときがある

河内長野市

山岡富美子

にらまれる覚悟でわたくしを通す

生駒市

飛永ふりこ

長時間庭師がにらむ石の位置

茨木市

藤井 正雄

秀 句

拗ねた子にだまって置いた蓬餅

鳥取市

土橋 睦子

まんじゅうをぐつと睨んだ血糖値

和歌山県

古久保和子

蹲居した時に勝負はついていた

橿原市

居谷真理子

満月をにらめば遠い科が浮く
国政を血眼になりにらんでる

唐津市

仁部 四郎

倉吉市

山中 康子

古い先をにらみ元手の要らぬ趣味

神戸市

白川 淑子

にらんでた隙を突かれたカンニング

岸和田市

井伊 東吉

パソコンに睨まれている肩の凝り

雲南市

菅田かつ子

スカイツリーどどん伸びて睨睨す

弘前市

今 愁女

雪ゆきと暗い空見てにらむ日々

鳥取県

飯野 葛子

ばあちゃんが甘やかすからにらまれる

鳥取市

西川 和子

大黒柱にらみ効かせたのはむかし

高石市

浅野 房子

後からにらまれ首が回らない

豊中市

松尾美智代

目力は妻にかなわぬにらめっこ

札幌市

三浦 強一

花粉症豊かな森をにらみつけ

日高市

根岸 方子

にらんでも迫力のない目になった

大阪市

谷口 義

手抜きしてトイレの神ににらまれる

東京都

岸野あやめ

残高をにらめば痩せてくる老後

鳥取県

細田 裕花

妹がにらんでいるぞ姉の恋

佐渡市

高野 不二

空っぽの財布の底をにらむ日々

松江市

小川 注湖

にらむのはよそう心が冷えるから

芦屋市

黒田 能子

睨まれたあとが砂漠になっている

寝屋川市

籠島 恵子

秀 句

ただ天を睨むしかないときがある

河内長野市

山岡富美子

独裁者を睨み返した庶民の目

池田市

上山 堅坊

点滴をにらみ時間を食っている

枚方市

伊達 郁夫



櫻庭順風さんを偲んで

斉藤 功

同人の順風さんをご逝去されました。川柳塔みちのくの句会をしばらく休まれていたので、暖かくなりさくらの咲く頃には句会でまたお会いできると思っていたのに、2月15日午前2時35分、天寿を全ういたしましたという訃報に接し、ただただ驚きしばらく茫然としておりました。

順風（本名・順三）さんは大正11年5月6日生まれ、弘前中学校、東京物理学校（応用化学科）卒業。官立弘前高等学校（科学教室助手）、日本石油KK（中央研究所）勤務。その後、大平中学、弘前家政高等学校、弘前高等女学校（弘前中央高校）、弘前高校、五所川原工業高校、八戸工業高校（校長として）に勤務され定年退職。それからさらに東北電子計算機専門学校（仙台市）青森センターに勤務されました。そして平成11年4月、七十六歳の時には教育功労により勲四等瑞宝章を授与されました。

順風さんは平成5年4月から波多野五楽庵先生の川柳教室を受講され、同年7月には川柳塔みちのくの同人になり、川柳の道に入られました。そして平成8年4月27日の四吟社（弘前川柳社、黒石川柳社、岩木吟社、川柳塔みちのく）合同観桜句会で大阪からお出でになられた橘高薫風先生の特別選、宿題「どんな」で次の句が見事地位に選ばれました。

赤とんぼ京紫に憧れる

その時仲間から祝福された順風さんの素敵な笑顔が、いま目に浮かんできます。

その後、平成8年9月薫風・甲吉・五楽庵の各先生の推薦で川柳塔社同人になられました。川柳塔誌の作品で特に感動し印象に残っているのは、橘高薫風先生選の平成10年3月号の巻頭の次の六句であります。

お山見て出勤お山みて帰宅

岩木山晴れる日きりりタイ締まる

岩木山曇る日重い靴を履く

充ちた日の帰路見るお山美しく
故郷に四季黙示するお山ある
目の限り岩木の彩が我が浄土

また、川柳塔社の川柳塔八五〇号記念川柳大会、創刊七十五周年記念川柳大会、西尾菜七回忌川柳大会、並びに川柳塔まつりに参加され、川柳の道を探求された熱心な同人でありました。

また句集は、平成10年6月に川柳塔みちのく百句集第15集「岩木のお山」を上梓、続いて12年3月には「遥かな道」、14年2月には「リーフバイ」、16年3月には「岩木山」と次々上梓されました。平成15年6月には、国立国会図書館に行かれ、大切に厳重に保管されていた以前寄贈した「岩木のお山」と再開し「感激しました」と言っておられました。

川柳の道を歩んでこられたことで、若い頃日本石油時代に同室に勤務していました片柳哲郎先生（新思潮）と再開出来た喜びを、しみじみと噛み締めておられました。

いのちある句を創れ、一句を残せという路郎先生語録を真に実践された順風さんの、真摯な作句姿勢はすばらしい。順風さんの句集の中の一句一句は読む人々にいつまでも好かれ親しまれていくのであります。享年九十歳。ご冥福を心からお祈りいたします。合掌

丸 い

坊農 柳弘選



丸腰で話をつけにくる度胸
コンバスで描いた丸に隙がない
丸ばかり描いてコンバス味気ない
方言の丸い言葉に気を許す
達筆じゃないが丸文字読み易い
諍いを丸くおさめる京ことば
丸い背な流し合ってるフルムーン
車座になれば喧嘩はできません
素直とはこういうことか丸い石
丸描いて四角をかいて介護され
思い出の景色は丸い風になる
またしても欺されました丸い鼻
丸い地球地震でいびつになっている
人のエゴ丸い地球を失らせる
カレンダーの丸は女房に秘密な日
ふところの深い夕陽を好きになる
丸い背を伸ばして老いも春謳歌
丸い背もマイクを持つとシャンとする
丸洗いされた夫が干してある
産卵の鮎を待つて丸い石
どれほどの事があつたか丸い石
ご縁あるようお賽銭には五円玉

正雄 典子 裕花 千歩 (安) 泰子 一風 みつこ (金) 宣子 螢 宏子 正和 美智代 富子 輝夫 アキ キヨミ 迦行 義雄 扶美子 愁女

丸齧りするリングにもある色気
高僧のマル一筆と対峙する
丸い輪の中で喘いでいる個性
丸い地球を宇宙船から見てみたい
地図にない路地で出逢つた丸い風
偏屈な人がいないと丸くいく
車座の真ん中に居る過疎の嫁
理屈では丸い地球と知っている
趣味はしご医者もはしごの丸印
まんまるは平等地球見てごらん
丸すぎてなんだか頼りない男
親馬鹿を振り撒く孫の丸い頬
少しなら譲つて丸く治めたい
老母の背の丸さが語る一代記
いばら道越えてて空気が丸く風ぐ
佳

一花 強一 泰一 弘一 葉摘 光久 留里恵 時雄 日の出 霜石 かずお (編) 洋 玄也 賢子 哲男 (宮) 弥生 公誠 充子 淳司 茶子 朝子 福十稔情

トリック

榎本日の出選



究極のトリックでした妻の笑み
驚くな首が繋がるトリックだ
トリックか日本の総理早がわり
町工場トリック無しのミクロ技
トリックのない母さんの割烹着
特撮がSF世界盛り上げる
トリックがちりばめてある収支表
大粒の涙つかつたのは内緒
トリックの国に島々取られそう
首かしげトリックの裏読んでいる
トリックを解いたら結婚してあげる
低姿勢はトリックの原点だろう
母さんのトリックでよく生れたよ
愛される為のトリックなら赦そ
過去未来トリックの種尽きません
吉日と書いてトリックに掛ける
トリックの愛はほろほろ銀メッキ
トリックのようなものです認知症
トリックがあるか妻は元気です
ロボットはトリックだったデスマスク
最大のトリックだったデスマスク
生きている事がトリックかも知れぬ

美義 紀作 振兎 活恵 東吉 セツ子 茶子 孝雄 一風 アキ 恭昌 公一 (編) 英子 公誠 千歩 朝子 一粋 富一 弘一 愁女 美智代

トリックのように急変する天気

トリックの裏が透けてたマニフェスト

騙されるたびに人間幅ができ

神様にどんなトリックでも駄目だ

トリックに気付かぬままに大拍手

母さんのトリック家族に輪が戻る

トリックに気づいた蟻が船を下り

トリックを手直ししてるコンバクト

毒舌はトリック仲よしになろう

ごまかしは絶対しない父の升

トリックであつてほしいと言うカルテ

大詰めの見せ場トリックの出番

本当の笑顔トリックではできぬ

ふるりの四季トリックのない原画

豪雪を跡形もなく消した春

佳

トリックの効かぬ九・〇が来る

しわやしみ隠すトリック笑顔だよ

トリックかも知れぬ私の現在地

真つ暗な店天国と書いてある

隠し玉持っているふりして臨む

人

特撮を見ているような大津波

うますぎる話できつと異なろう

地

天

フアンションショーみんなきれいなアヒルの子

軸

トリックにかかった振りをしてあげる

像山

淳明

雅久

光也

五月

充子

遠野

螢

ばつは

菜摘

(宮)弥生

宏章

正雄

慕情

秀四

深雪

雪丘

(吉)修

時雄

淳司

唯教

高瀬霜石

たけのこ

山岡富美子選



春風にのつてたけのこ顔を出す

たけのこが指差す先はスカイツリー

やつと春若竹煮やら木の芽和え

竹の子を本気にさせる春が来た

松茸は我慢なら買える

うり坊も連れてたけのこかつさらう

たけのこエグみは私のお味

たけのこ生活リンゴの歌に支えられ

たけのこのレシビが旬を弾ませる

たけのこも他所の子供もすぐ伸びる

孟宗は孟宗らしい子が生まれ

少子化とニョキニョキ生えるたけの子と

陽の匂い捉え箆ぐんと伸び

竹ん子は木の芽焼きたち春をくう

たけのこが垣根越えればうちのもの

少し芽を出せばたけのこ起こされる

見落とすたけのこ今朝は児の背丈

たけのこのように伸びたら困ります

たけのこの煮付けで嫁の座を守る

ニータウン昔たけのこ取れたとこ

生意気な孫箆のように伸び

お隣の箆に飯待つ独り

(山)紀子

弘光

東吉

かつ子

玄也

宏子

扶美代

遠野

碧

宏章

孝雄

古拙

客山

高明

(翁)いさお

庸佑

一兆

千歩

准一

(白)淑子

美津子

堅坊

山寺のたけのこ僧のお吸い物

剥がされてやつと箆ひとり立ち

甘くみていたたけのこにある蕨味

たけのこが覚悟を決めて頭出す

雪解けて竹の子族が目醒ます

たけのこに土が付いてるだけで買う

一皮ずつ剥いで天高く覇気を見る

竹の皮見ると売り食いた昔

たけのこの皮が恋しいにぎりめし

初掘りの竹の子拍手して出荷

出しゃばりのたけのこ隣好きらしい

たけのこのままではすまん竹の意地

信念を曲げぬたけのこ伸び放題

朝掘りに産地擬装はありません

淡白な箆尽し春の贅

佳

たけのこの節目節目にある覚悟

宝掘るようにたけのこ掘っている

たけのこのネットワークは地下にある

たけのこよ過剰包装ではないか

たけのこが育ち静かな竹藪に

人

越境のたけのこルーツ主張せず

地

天

箆といっしょに届く青い空

軸

たけのこの旬は瞬きする間

竹の子に雑念はない伸び盛り

帆雀

孝一

くにこ

孔一

慕情

歳子

注湖

哲男

朝子

公誠

千里

一子

菜美

みつこ

淳司

典子

幹子

裕花

(吉)寿美

正和

(安)泰子

霜石

山口光久

初歩教室

題一 流す

鈴木公弘

初めての方々とお会いできたこと、たいへん嬉しく思います。

傾向としては「汗を流す」「聞き流す」「流し難」「水に流す」が多く、当時に「流す」を問うたにもかかわらず「流れる」「流される」と応じた句がたくさんありました。以下、再考願いたい句を一気に点検していきます。

原 川に転落流されちゃうよ誰か来て 綾 乃
添 私まだ大河に流すこと出来ぬ
原 流されてその都度人の情け知り 孝 明
添 善悪を流して人の情け知り
原 大津波に家も車も流される 秋 星
添 突然に家財を流す大津波
原 自由なき大地流れる尊き血 ひとみ
添 他人の血流す権力者の驕り
原 透明に流れる小川するが若 道 子
添 川無情すがって生きる若流す
原 シャンプーして貴重な髪がまた流れ 松 風
添 シャンプーして貴重な髪をまた流し

失礼ながら大変不快な句であった反面、同
情の感を強く抱きました。

原 大津波悲鳴の流れ地獄絵だ 百合江
添 大津波悲鳴の地獄絵を流す
「流す」にこだわりました。原句OKです。
原 原発報道隠し度いのに云わされる 冷 子
添 原発事故の原因流す裏がある
原 施設のお母空しい涙流れ出す とも湖
添 特養へ母の無念がほは伝う
原 うっかりと大切な事聞き流す 仲 章 子
添 聞きに来た問題点を流す耳
原 ここだけの話で流す立話し 紀 雄
添 ゴミ置き場どなたの事も聞き流す
原 あのかは流してしまひ忘れましよう 眞砂子
添 一人の男に群れた昔は忘れましよう
原 口喧嘩右から左聞き流す 登美子
添 聞き流すように二つの耳がある
原 なるほどと相槌打って聞き流す 畑 節 子
添 相槌を打った話が止まらない
原 採め事を器用に流す苦勞人 篠 清
添 採め事をさらさら流す経験者
原 浮世には水に流せぬこと多い 倫 則 彦
添 群れて人流す話もひっかかり
原 毒のある言葉に無視と聞き流す 温 子
添 毒のある言葉に知らん顔をする
原 妻の愚痴今日は疲れて聞き流す 起世子
添 夫の愚痴きょうは疲れて聞き流す

原 脳幹に栄養流す受験母 ミヨノ
添 受験子の脳に栄養剤流す
母が受験するかのように誤解されないた
め、母は抜きました。

原 辛い事沢山流して今がある 陶 弥 生
添 辛いこと流して今を生きたいく
「昔・今・」という回顧または懐古の句を
よく見かけるようになりました。できれば
「今」を描いてください。
原 選挙時に流した汗は今いすこ 篤
添 選挙時に流した汗が引いていく
【情景描写性の強い句】
原 猛練習何時かは実る流す汗 武 臣
添 猛練習のいつかは実る汗流す
原 一年の苦勞背負わせて難流す 志 延
添 感謝して流す難にも幸よあれ
原 昔年の恨み流して風は青 敏 治
添 積年の恨み流した風青し
下5を名詞で締めくくるとどうしても説明
調になりやすいです。
原 高速で黒白流すネット力 株 玲 子
添 情報流す速さを比べあう
近年の造語「〇〇力」に目が行った点は評
価します。
原 いやな事水に流してねじをしめ 開 子
添 嫌なこと水に流して無口なり
原 厄背おい遠くの海へ流し難 美紗子

添 厄背負わせて遠く海へ難流す

ちよつと可哀そうな難。私の分身でもありますので、ヤシの実が届く島まで無事であつてはいい気がします。

原 願い負い難は流れに乗って行く 安子

添 願い事負うて流れに乗った難

原 被災地に流す涙の親ごころ 勝治

添 被災地に流す涙のとどめなく

原 身体より頭脳を使い汗流す 英男

添 汗流す頭脳いっぱいまで使う

身体を「からだ」頭脳を「あたま」と読むよう指示しておられました。ルビ付きの句において問題なのは、男・女を「ひと」と読めと言われる時です。私はこれを認めています。この点についてはいつの日か論じます。

原 隠しごと本音を吐いて恥流す 滋彦

添 失敗の原因述べて恥流す

原 幼な児と笹舟り川流す 仙久子

添 幼子と流す笹舟うれしそう

原 ヒ・ミ・ツだよ桃を流したのはゼウス 真由

意表を突いた入り方は効果的ですが、問題は「…のは…」にあります。こういう作りは大抵説明です。ご検討ください。

原 流し難一期一会の旅につく 一兆

添 流し難一期一会の旅に出す

【入選句】

防犯に流すビデオが大手柄

妙子

「…ビデオの…」がよいでしょう。

聞き流す術を持たないから詰る

「詰まる」と覚えてください。

もう武器に流す涙は枯れ果てた

「涸れ果てた」がいいと思います。

今日のウツ流してくれる雨の音

流し眼の行方気になる人の妻

上役のくどい小言を聞き流す

ケータイメールもう権力も及ばない

くよくよを洗い流しているウォッカ

何もかも水に流して無念抱く

今日の憂き流すビールは大ジョッキ

「ビール」の「…」がよいでしょう。

想い出を遠くへ流す舟が欲し

花粉症こわい奥様涙出し

路地裏のギター流しが追う昭和

童謡を流す村には子がいない

わだかまり水に流して笑い合う

雪辱を誓って流す汗の玉

国会は汗を流さず法流す

鞭打って一汗流すウォーキング

方便だったとは聞き流すこと出来ぬ

まだ絡む女の命梳き流す

ストレスを流す蛇口を全開に

焦らずに潮に任せてウキ流す

おべんちゃらハイハイと聞き流す

義雄

ちづる

堅坊

寒之

憲司

のり子

菜々子

恵美

美恵子

孔一

弘泰

志郎

宣子

孝代

美知江

和幸

正二

律子

エミ

菜摘

正彦

憲彦

智加恵

中傷にかかわらぬよう聞き流す

故郷の川に流した蟠り

【佳句】

失敗をアハハで流す年の功

岩も木も母の小川はさらさらと

聞き流したつもりが深い鬱の穴

世の波に息子の肩をポンと押す

難流すまだ女です春の海

許そうか分水嶺に差し掛かる

時雨で流す程なき軒ぬらす

春雨が一気に流す冬の泥

葛藤を水に流して姑を見る

風上で噂流している花粉

【今月の推せん句】

大川へ流した胸の石一つ

後でこつそり石の分析をさせてください。

母の死に涙と汗を流しきる

パソコンに向かっていたら急に悲しくなっ

て一度だけ経験しましたので、共鳴される方は多いと思います。

流し目は私にだけ飛んで来る

この自信はどこから湧くのでしょうか。時々

辺りを見回してみようかな。

【私の句】

質屋から流した物が売ってある

お見合いの写真流した人が好き

(登載漏れ方は役員が添削して返却します)

ふみ子

久美子

(石)久子

(白)淑子

真澄

一子

治子

宏造

俊子

こずえ

幹子

留里恵

関 よしみ

雑賀 一泉

梶原 弘光

時々

秀句鑑賞

同人吟 岩崎公誠

— 4月号から

がんばろう！日本

実に幅広い視点と発想からの同人吟、千九百四十句を鑑賞させていただいた。毎月発行の川柳塔誌・本欄（一月分）で活字になるのは略々二千句、当欄の一年分総計は約二万四千句という凄数になる。今回選ばせて頂いた秀句は25句で、その選出倍数はおおよそ百分の一（1/100）となる。本誌2月号の「秀句鑑賞」を担当の夏目一粋さんが入選確率11%だと記しておられるが、当月もその通りで、数々のいい句を割愛させて頂いた。

もう少し飲んだら雲に乗れそうだ

両川 無限

ふわりふわりと軽妙さに溢れる句。大部分が水蒸気の集まりである雲に乗ることは現実にはむづかしい。だけど空に浮く雲を眺めると雷さんでなくとも乗れそうな気がする。舳斗雲に乗る孫悟空やのんちゃん雲にのるといふ童話は雲に乗ってストーリーが展開する。無限さんはお酒と雲への夢を愉しく取りあわせている。

探すまい いずれ出てくる探し物

志田 千代

加齢とともに忘れもの、探し物がふえてくるのは普通のパターン。財布・カード・メガネ・印鑑など大事なものはしっかり置き場所や入れるところを決めておきたい。千代さんは大物でいずれ出てくる……と構えているところがすごく可愛い。

腹いっぱい泣いて笑って人間だ

神夏磯 典子

パンチ力のある一句。腹いっぱい……人間を丸出して泣く、そして笑う。頭の中でそんな生き方をしたいと思っても社会常識などからブレーキが自然とかかってしまうもの。典子さんはもつともつと人間らしく生きなさい……と詠い上げている。

力まずに生きると風が和らかい

大内 朝子

受験、就活、婚活、仕事など力一杯やらなければとつい力を入れてしまうものだ。朝子さんは、肩の力を抜き一息入ると風まで和

らかい！と暖かい気持ちにあふれた句。

処方箋通りに一日が終る

谷 口 義

滑った転んだなどと言わず、淡々と一日が過ぎてゆく。また、大方の人間はバタバタと走りまわって一日が終る……義さんの澄んだ目で見た人間観察である。

捨てるもの捨てたか冬木立

木本 朱夏

人間は度胸を決めるととても強くなるものだ。この句は、人間を詠ったものと見た。

したたかな冬木立は、春とともに芽を出し葉を繁らせ立派な樹々になる。シンプルで深遠な一句である。

四月には四月の風が吹くはずや

井 丸 昌 紀

大胆な言い切りで楽しい句。直球のストレートさが凄い。四月にこの風が吹かない筈がないと言ったところに昌紀さんの創造力が光る。

喧嘩でもしているような津軽弁

福 士 慕 情

弘前市在住の慕情さんが、自らの地方の事象でモノにした一句。元気の良い声やかん高い声で会話しているのが喧嘩している声に聞こえるという面白い描写である。さて大阪弁や河内弁はどうでつか。

お化粧がだんだん厚くなる女神

播本 充子

ミス〇〇、ミス大学、ミス商店街と女神は数々。共通するのは、充子さんの見立てのように厚化粧になる。ツケマツゲは芋虫のようになり、にわか雨でも来ると大変。ハッハッハと大口を開けて笑える句——！

普通のこと普通にしたい休みの日

山岡 富美子

そうですそうです。普通のこと自分のペースでなかなかできないのが現実です。富美子さんは仕事、川柳創作、会合と多端に過さんでいるので、次は意図的に休日を取り普通の良さを満喫しエネルギー補給をして下さい。

雑魚生きる忘れ上手で寝たふり

小沢 淳

忘れ上手な雑魚は現代の社会に数多く生きています。雑魚の群れにいと一匹の存在は目立つことはありませんが、群れの流れの中でちゃんと元気に生きてゆけるのです。

十九には戻れぬ九十にはなれそう

古今堂 蕉子

若さの頂点十九歳と長寿の九十歳のコントラストが絶妙の一句。蕉子さん長寿へ、数多くの友と語らい笑い励ましあい：楽しく頑張ってください。

悪知恵はまだ回ります元気で

村上 直樹

「シンブルイズベスト」の句の見本。前向きでいつも元氣な直樹さんが堂々の宣言です。が「がんばろう——川柳人」そのリーダーの一員としても活躍して下さい。

役割を演じる椅子を拭いておく

稲村 遊子

豪華な椅子、簡素な椅子、小さな椅子、大きな椅子とイスは用途によって様々。そのひとつひとつが役割をもつ椅子に目を向けた遊子さんの着眼と表現が見事。

突き通す嘘は相手の目をみつめ

矢倉 五月

練り上げて選んだ嘘をつき通すことは大事だ。相手の目をみつめ外さない構え。隙のないイリビリと神経の張りつめた一句。

肉らしきものも見付けたカップ麺

大隅 克博

「3分間待つ」のカップ麺だから正銘の肉はもともと入っていない。肉エキスの粉末固形物が麺の間に混じっている。これが正体だ。災害時にも大活躍の即席麺である。

一つずつ部品壊れていく身体

村上 玄也

古稀前後から人体の部品にあちこちと不具合が出てくる。頭から足の先、そして身体の内

部まで故障が出てくる。部品という表現に妙に実感がある。

着陸はエコノミーでも一緒です

関本 かつ子

新幹線や在来線で、普通席に乗ってもグリーン席に乗っても到着地への時間は同じ。航空機でもかつ子さんの句の通りなのです。ユ一モア一杯に、何でもないとどこに目をつけてひかる一句。

四月一日嘘は一度も吐いてない

藤井 則彦

何よりもエイプリルフルを皮肉り、中七からのリズム感がよい。達人のつけるわざびの効いた愉快痛快の一句だ。

◎次は、鑑賞紙面のない秀句を列記したい。

前略中略後略老いてゆく

山本 希久子

へそくりがひよっこ顔を出して春

伊達 郁夫

賑やかで寒い偽物ばかり持つ

居谷 真理子

ストレッチ明日のための螺子を巻く

米澤 俣子

間違つて覚えた漢字直らない

西内 朋月

腰痛が美人に席を譲つて

荻野 像山

— 水煙抄 —

秀句鑑賞

— 4月号から —

鴨谷 瑠美子

正道へ戻してくれた道標

森吉 留里恵

日常の生活するに当たって迷うことがある。そんな時目上の方や恩師などからのアドバイスがあれば確実な道を歩んで行けそうです。秘密とは所詮は守り得ないもの

岸本 清

本当は守り通せる秘密はない。しかし兄弟なら出来る。その経験が句に表われている。

来世も同じコンビで踊りたい

太田 としお

ダンスなのか、それとも何か他のことであっても、多分ご夫婦だとお察しして、パツと言いつけられている事がすばらしい。

きくきくとおもえばきいてくるくすり

木村 忠義

そつだと思つ、お医者様を信頼して、おくすりを飲むと治ること請け合ひ。

良く出来た部品だ爪も髪も伸び

沢山 啓子

部品とは面白い表現です。この確かな事が続いている限り元気の証でしょう。

春までは大事に仕舞つておくピンク

吉井 葉々子

待ち遠しい春を感じさせます。口紅でしようか、スカーフでしようか、お似合いのピンクで颯爽とお出かけ下さい。

マンネリの絵を抜けふわり風になる

福井 菜摘

油絵の薔薇の額が永年飾つてある。見詰めてみると、絵を抜け出して自由に好きな所へ行きたい衝動にかられた。ロマンチックな句。

みの虫も父もぶらりと逆らわず

宇野 幹子

みの虫と比べられたら可哀相だけど、お父さんは包容力がある感じ、逆らわずが最適。

正直に生きたと言えば嘘になる

竹口 清信

正直な人の謙遜した句であろう、真面目な姿が想像出来ます。

テレシヨップ次から次と欲しくなり

松浦 登志子

好奇心旺盛で楽しそう。欲しいなあと思ひあぐねるひとときがあるのも夢の内。

たまにはね各駅停車いいかもよ

高岡 弥生

準急に乘れば十五分、各停ならば三十分、その分ゆつくりお話が出来た、お互いに満足をして家路につける。

体力の次に気力が萎えてくる

清水 英旺

不思議なもので体力は自然になくなって来る。気力は人から言われて出てくるものではなく、何か良い事があればシャーンと前向きになれるものかも知れません。

久し振り一瞬虹にめぐり合い

渡辺 芳子

虹を見ることはなかなかありません、旅行中の車窓から思いがけず見た事があります、めぐり合いの下五に感服しました。

校門が一番似合う桜花

稲葉 洋

ちょうど入学式のころに、満開になった桜の花はオーラを放つ、変るがわる笑顔で記念写真をとる場所だ。

鮮やかなノーの返事に救われる

上山 堅坊

ノーの返事もすっぱりと言われたのならば気持のよいものです。蟠りのなかった様子に救われました。



夫は、ツマか？

今回は「読み替え」の是非について考えます。

読み替えというのは、「夫」を「つま」と読ませたりすることです。その他では、老母や亡母を「はは」。老父や亡父を「ちち」。男や女を「ひと」。戦友を「とも」。娘を「こ」と読ませる例があります。そして、「夫」に「つま」と振り仮名をつけて読み替えを強要することを、ここでは「読み替え指定」といいます。

新聞記事などの散文では、ほとんど読み替え指定はありませんが、短歌や俳句、そして川柳という「韻文」では、しばしば目にします。韻文とは作者が意識してリズムを持たせた文で、川柳の基本は七五調の韻律です。

読み替えは、五七五のリズムに合わせるための手段です。「夫」は三音ですから、三音で七五調に収まらないときは「つま」と二音で読ませているのです。このようなことは、韻文の文芸では古くから「約束ごと」のようになっていまして、違和感なく使用している人も多いでしょう。

また、歴史的に見て、古語では「夫」のことを「つま」と言っていたこともありしますので、許容範囲ではないか、とも思われます。しかし、韻文に慣れていない一般の人たちの中には、「夫はつまとは読めないのではないか？」とか、「無理に五七五にしているのではないか？」という疑問を持つ人がいるのは当然です。

あなたが読み替え指定に違和感がなければ、使用しても

構いません。違和感があつて「好きではない」と思えば控えればいいのです。それが前回でも言いました「表現の自由」ということです。そのことを理解していただいた上で、敢えて「できるだけ使用しない」ことをお勧めします。

その理由の一つは、私が川柳に取り組んだ当初に受けた「ちよつと変だな？」とか「亡父はチチとは読めないだろう？」という疑問がまだに拭えないことがあります。

もう一つの理由は、「仲間だけに通じる約束ごと」のような狭さを感じるからです。文芸は仲間内だけではなく、自分では作らない一般の人にも楽しんでいます。そのような韻文に慣れていない人たちにも抵抗感なく伝えるためには、やはり読み替えは避けた方がいいと思うからです。

また、わざわざ読み替えをしなくても、作者の意図が明確に伝わる場合が多々あります。

春を待つ亡母の形見の雛飾り

右の句の場合、「形見」と言っているのですから、作者の母が他界しているのは明白です。にもかかわらず、「亡母」というのは説明過剰であり、かえって興趣を殺いでいます。「母の形見の雛飾り」でしつかり伝わります。

また、父の老化現象を詠っている内容なら、「老父」を「ちち」と読ませないように、「父」だけで句意が伝わるように、表現を工夫するのも作句力です。

ご質問に付随して「読み替えについては賛否両論あるが、日川協などで見解を統一すべきではないか？」というご意見もありましたが、前回にも述べましたように、表現は作者の自由ですから規定はできません。



色に暮れたお花の津軽石の瀬高

奇数月の連載になります。

3・11の巻 ③

運命のあの日。平成23年3月11日（金）午後2時46分。

僕は業界の会議で、弘前から40キロほど離れた青森市にいた。僕の生業は自動車部品販売業だが、移動は大抵電車。運転が不得意なこともあるが、電車だと本も読めるし、居眠りもできるしね。

あの日に限り、クルマで出掛けた。それがよかった。そうじゃなかったら、帰宅難民になっていただろう。運転中の僕は、すぐに地震に気づかなかった。ひどい鈍感。

信号で止まったら、クルマがグニャリグニャリしている。いくら僕の愛車がオンボロでも、これはおかしいぞと思い、ラジオのスイッチを入れた。

信号が消えている幹線道路はノンストップ。簡単に帰宅できた。普段は留守がちな同居人も、珍しく僕より早く帰っていたし、会社も、社員も、実家も停電はしているが無事。後は、塩竈市に住む目の不自由な僕の弟子、丸山あずさ（以下、マルコ）の安否である。

マルコと、彼女のパートナーである盲導犬のニコ（5歳の女の子）にはじめて会ったのは、一昨年（平成21年）の9月27日であった。記憶力の悪い僕が、何故覚えてるかというのと、その日は僕の60回目の誕生日だったからだ。その日僕は、川柳宮城野社主催の「第58回 東北川柳大会」の選者に招かれて、仙台にいた。

「僕の還暦祝いに、かくも沢山お集まり下さりありがとうございます。ハ、ハ、ハ」なんて挨拶をした気がする。

それからイロイロあって、マルコは僕の弟子になった。弟子なんておこがましいと思っていたが、娘くらいの年塩梅の子に是非にと頼まれたら、イヤとは言えなかった。

マルコは《多発性硬化症》という難病を抱えている。彼女は、朝起きたらまず手足が動くか、声が出るかを確かめるのだそう。寝る時は、今日も一日元気に過ごせてありがたいと言い、眠りにつくという。僕は、この健気で賢く頑張り屋の弟子から、毎日メールを貰い、励まされている。

塩竈は日本一寿司屋の多い街だそうで、何度かデートした。一緒に行った寿司屋は、今はもうないらしい。

彼女は、ラッキーだった。当日は友人と仙台へ出て、地下鉄構内にいたので助かったという。揺れがおさまったら、われ先にと地上へ駆け出す人々を横目に、彼女は冷静だった。こんな時に地上に出るとかえって危ない。ガラスを踏んづけたり——盲導犬は裸足だものねえ——上からモノが落ちてこないとも限らない。駅員さんに事情を説明して、その日は事務所に泊めてもらったという。

2日後。ガラスが割れ、家具が倒れたりのメチャクチャ状態の家を、友人たちが片付けてくれた。そのうち電気がつき、水もようやく出て、不自由ながらもニコと2人で暮らしているとの一報が入り、なんとホッとしたことか。

救助ヘリ盲導犬と仰ぎ見る

ウグイスの声だ私は生きている

あずさ

あずさ

私もワープロファン

小川 注 湖

本誌二月号（二〇〇五号）の編集後記に、編集長の朱夏さんが、ワープロの効用について書いておられる。私もワープロ愛用者のひとり。この感慨に同感し、ひとりニヤーと微笑んだものだ。

メディア社会の進化によって、パソコン時代であることは是とするが、パソコンが内臓する高度な多重機能全部を必要としない者もいるだろう。

ワープロ機能がパソコンに吸収されて、製造販売が中止されてから久しい。

今、思い出していることは、ワープロを必需品としていた私の利用方法は、手紙を書くように「縦書き」「横書き」をもっぱら使う。時に文字を大きくする機能を使って形をつくり悦に入る。

私はワープロで、文字書きの用を十分に達し、パソコンの高度な機能は必要なかった。

退職後、ワープロを二台使っていて、困ったことは、部品が製造中止となり店頭から消えたことだった。特にインクリボンやフロッピーがなくなったことは致命的だった。

そこで懇意にしていた大型電気店で、県内各地の系列店を探してもらい、在庫の部品をかき集めて入手、これで当分安心。この部品を使い切るとワープロの使い納めになるのだと覚悟した。それが全国的なワープロ愛用者の声があつたのであろうか、インクリボンは各メーカー機種共通に利用できる物が店に並ぶようになって、ホッとしたものだ。

元来、手書きが苦手な私だが、毎日文字を書く用があり、また作文を推敲する上でワープロのありがたさをよく知っている。

ところが皮肉にも、インクリボンは調達できなくなったのに、肝心のワープロ本体が、退職後十七年の使用に、ついに老朽、故障ばかりで動かなくなった。ときどき戦時中のラジオのように「ボン」とたたいてみると動き出すことがある。聞き歩いてみると、地方都市の松江市では修理するところはないという。

次の手は仕方がない。喜寿を迎えての手習いで、パソコンを始めた。

それにしても思うことは、パソコンの多重

機能を用意に使いこなす人、その利便性には驚きと感動を持つが、戦前、戦中生まれ世代が、しばらく続く高齢化社会の中で、お世話になっている私は考える。年を取ると指先の機能低下、言語障害も出るようになる。

単純機能のワープロは附属機器もなく、場所も取らないし、年寄りには使い易く、何とか指先だけ動けば、自分の意志を文字にして伝えることができる身近な道具といえる。

施設・病院のベッド上の食事テーブルと同じように、ベッドの上でも容易に使用できる。そしてベッドの上で川柳をつくり、投句もできて、「ボケ」防止にもなるだろう。

高齢化社会の真つただ中で、単純機能のワープロは、車椅子と同じように、福祉器具の一つといえる。高齢者が使いやすく、機能は最小限度のものに省略し、そして格安なワープロを復活製造する会社が現れないかと、ひそかに思うことがあつた。

ワープロはメール通信で子女の不純交際の誘惑や、八百長のような事件に巻き込まれることはない。ましてコンピュータウイルスにかかるとおびえることもない。

私の愛用していた機種は「東芝RUPO」で、朱夏編集部長が探しておられる機種と同じ「これも奇なり」であつた。

本社四月句会

四月七日（金）午後五時
アウイーナ大阪

四月句会は受付に3・11東日本大震災への義援金募集箱が置かれた。初出席は杉谷和雄さん（高槻市）、萩原三四郎さん（奈良市）参加者九十二名。先ず大震災の犠牲者と3月20日に亡くなられた、和歌山市の堀端三男さんへ黙祷を捧げて始まった。

お話は医師の朝田真司氏。「健やかな老後を過ごす―ボケないコツ」。認知症予防としては脳の活性化が一番よいこと。また自分の歯が多いほどボケにくいこと。脳の活性化として本は声を出して読む。カラオケ、詩吟は更に良いこと。ボケない人は料理が上手いこと。飲み会、同窓会、趣味のサークルなどに積極的に参加する。恋をする。川柳の創作をするなど……。川柳人はすでに脳の活性化をしているので、「死ぬまで川柳をなさって下さい」が朝田先生の結論であった。（朱夏記）

月間賞は、藤井寺の鴨谷留美子さん。

（司会）美籠・善純（協取り）賢子・恵子

（受付）わこ・柳昌（清記）勝弘

席題 「こぼれる」 安土 理恵選

春には春の噂をこぼす観覧車

こぼれるほど小銭はあるが札はない
わたくしが入ると誰かこぼれ出る

飽食の皿から昭和こぼれ落ち

みちのくに笑みのこぼれる春よ来い
聞き上手内緒根こそぎこぼれおち

談判もこぼれる笑みにかわされる
ほろほろとこぼれ佐助人を恋う

澄ましてやはり付け焼き刃はこぼれ
勿体ないもつたいたいことこぼしてる

笑顔こぼれやっぱ僕が負けている
上手の手からこぼれ出た放射線

おこぼれをねらい取り巻き離れない
こぼすから爺は前掛けさせられる

両手から零れ落ちて有頂天
お母さんこぼれる愛がほしいです

神の手をこぼれた海が暴れ
ふっ飛んだ幸せ涙とまらない

しぶんの手からこぼれる無駄がない
一粒の涙に許しそうになる

汚染海水にこぼしたでは済まぬ
零れそうな愛を煮詰めているところ

こぼれたら拾えぬ愛もあった冬
一から一を引くとこぼれていく男

企みがありライバルに愚痴こぼす

扶美代

勝弘

扶美代

希久子

黒兎

一風

東吉

哲子

則彦

日の出

ダン吉

玄也

修

玄也

よしみ

能子

隆彦

修

好

良一

昌紀

朱夏

蕉子

義

花びらがこぼれるように逝きたいな
紀乃

縁のないものが両手からこぼれる
真理子

仮設小屋笑顔こぼれる湯気の中
たもつ

いやでつせこぼれたお酒舐める癖
公誠

まず皿にこぼれた酒を呑んでから
いさお

こぼれそうな酒は口から迎えを
いさお

こぼれぬように注ぎこぼさぬように飲む
蕉子

佳

私の掌からこぼれるものも無くなった
蘭幸

安全神話想定外にこぼれ散る
三四郎

こぼれる程のやさしさ被災地に届く
能子

義援金途中でこぼれないように
完司

じんじんとこぼれるような天・地・人
滋彦

人

こぼれ種拾って帰る春の宵
月子

地

こぼれ落つ涙はきつと神の御意
義子

天

被災地に笑顔こぼれる子らが居る
賢子

軸

ひとしずくこぼして愛を終らせる
賢子

兼題 「檸檬」 鈴木いさお選

寝過こしをレモン噛みつつ立て直す
哲男

良い事があつて心に檸檬の香
キヨミ

熱の子のホッペにレモン当ててやる
志千代

緑色の檸檬言いたいことがある
義

一滴の檸檬に罪が軽くなる
 知恵子抄ひらけばレモンほとばしる
 純真が溢れてゆらぐ青檸檬
 レモンティー物憂い午後の句読点
 妄執をはらう檸檬の丸齧り
 レモンスカッシュ君と走ってきた荒野
 思慕一つ溶けずに残るレモンティー
 おめでたの気配檸檬をかじる嫁
 乾涸びた脳にキュキュツとレモン汁
 添えものでレモン終る気ありません
 コーヒーのジョーク聞いているレモンティー
 もやもやを一緒に晴らすレモネード
 厚切りの檸檬わたしの流儀です
 齧られてしゅつと反撃青レモン
 どなたかな檸檬漢字にしたお方
 焼酎は梅干し紅茶には檸檬
 失恋の胸の渴きを知る檸檬
 倦怠期欲しい檸檬のひとつから
 再会をはろ苦かった檸檬ティー
 本意な結末じつとレモン咬む
 さあピーク檸檬ガブリと山男
 干涸びた心に檸檬ひとしほり
 青春のアルバムにある檸檬の香
 レモンの恋膝の丸さを知らぬまま
 レモンティー少し好意を持つ人と
 ひと滴の檸檬私が蘇る
 ホットレモン内緒はなしを聞いている

郁夫 楓楽 よしみ 富美子 三四郎 アキ 三三四郎 淳司 美智代 ダン吉 遠野 光久 瑠美子 敏治 勝弘 完司 正雄 飯子 賢子 一兆 ばつは 千代 千代 黒兎 りこ 扶美代 美智代 公誠

過ぎた日は振りむかないと言う檸檬
 佳
 泣きなさい笑いなさいとレモネード
 レモンの香女独りの夜を癒す
 薄切りの檸檬はとても噂好き
 絞りつくしたレモンわたくしかも知れぬ
 青春の忘れ形見のごと檸檬
 人
 れもん一滴きりりと老いを遠ざける
 地
 悲しみの極み檸檬の黄をさらう
 天
 風聞に私の檸檬絞り切る
 軸
 檸檬かどうか試しに妻のひざ枕
 兼題 「遠い」 江見 見清選

公誠 アキ 正雄 美龍 朱夏 朝子 希久子 瑠美子 よしみ 房子 弘一 たもつ 完司 いさお 奮水 蘭幸 希久子 恭昌 妙

昭和史の遠くにできぬ黒い雨
 三日前が遠い記憶になっている
 近いのに遠く装う世間体
 デジタル化昭和は遠くなりました
 遠くから目立つようにと赤を着る
 遠くなる記憶をしかと描き直す
 遠くから見て真面目なのは分かる
 記憶力良過ぎて友は遠ざかり
 遠い日の暮しが透けている化石
 ばあちゃんの戯言遠い恋ばかり
 代表が法事に帰る遠い里
 飲み会は遠いけれどもついて行く
 妹に遠い柔和な母を見る
 青春切符遠い昔を買いに行く
 遠吠えでいいと主張は曲げられぬ
 遺跡から卑弥呼の咳がまた一つ
 遠回しに言えば言うほど出る本音
 遠かったあの世隣にいる感じ
 ひらめきに遠く地道な策を練る
 コンセント抜いて気ままに遠出する
 君がいて楽しく来れた遠い道
 仏壇を拭きつつ遠い日に触れる
 出来るだけ遠くに置いておく終り
 佳

たもつ 善純 三四郎 柳弘 日の出 寿子 義 則彦 良一 舞夢 時雄 瑠美子 美智子 瑠美子 光久 よしみ 則彦 蕉子 求芽 わこ 集一 正雄 好 黒兎 公誠 郁夫

ごめんねが言えずに遠い人になる
ゲートルともんべきれいな恋でした
人 アキ

フイクシオンを重ね美談に遠く居る
地 柳弘

遠回りまだまだ夢を見たくって
天 わこ

遠い絵の中で生きてるけんけんば
軸 よしみ

遠くからでもおばちゃんは喋り出す

兼題 「草の芽」

能子選

草の芽が出揃いみんな春の彩
准一

草の芽は被災地の地にも芽吹きます
妙

草の芽が明日の希望に萌えている
弘一

草の芽はまだ芽ぶかない被災地に
房子

うるおいが欲しい草の芽もわたくしも
シマ子

百歳の春に草の芽ふくれだす
いさお

草の芽に元氣出てきた万歩計
希久子

草の芽へスケッチブック走り出す
唯教

草の芽はかたきのように引き抜かれ
時雄

草の芽は夏は格闘する相手
紀子

草の芽は情をかけずに摘む私
耕治

草の芽が萌えてわたしもカイロ取る
勝弘

草の芽が背伸びしすぎている空地
すみ子

雑草と呼ばれることを知らない芽
草の芽も休耕田を父祖に託び
真理子

雑草の芽吹く力で立ち上る
誠一

雑草の芽が饒舌になる春の雨
俣子

芽を撫でてやさしい指になっている
哲子

草の芽が出ると話が弾み出す
良一

草の芽はみるみる萌えて自己主張
求芽

頑張らず自棄もしない草の芽で
美智子

草の芽が顔出し初心よみがえる
紀雄

陽春の戯れ草の芽が騒ぐ
柳弘

ジェラシーが草の芽ほどに伸びて春
朱夏

芽を出さず根っこは冬をじつと耐え
隆彦

下萌えが石の心を持ち上げる
よしみ

草の芽は家の事情を知っている
善純

草の芽の生き様人生の二本
佳

少年の匂いは草の芽のにおい
扶美代

蟄虫のくしゃみが草の芽を揺する
隆彦

春が好き恋の新芽も草の芽も
俣子

タンポポの咲いてる当たり温い風
日の出

何があっても明日へ草は芽をつける
美智代

踏みまいぞ我等も同じ草の芽だ
シマ子

雑草か大樹か双葉芽吹いてる
哲子

天 がんばって生きよう草の芽と握手
完司

軸 日だまりが好き草の芽も赤ちゃんも

兼題 「嗚呼」 新家 完司選

広辞苑嗚呼ではなくて始めはあ
勝弘

陸奥をぐしゃぐしゃにした地獄絵図
アキ

地図さえも変えてしまった大津波
賢子

被災地に連日嗚呼の続く記事
正雄

幾万の嗚呼を抱えて引いた波
蕉子

嗚呼日本今が一番つらい時
能子

見上げれば桜ああ被災地よ
ダン吉

嗚呼御霊がれきに海に抱かれてか
美智子

声にならぬ声で瓦礫に立ちすくむ
昭

ああ今日も生きて見あげるオリオン座
菜月

嗚呼と鳴くカラスも悩み持っている
美智代

明朗闊達そんな敵父に認知症
アキ

嗚呼無情のんびりできぬのは我が家
昌紀

嗚呼の声クロスワードが解けたらし
日の出

ロボットの第一声は嗚呼だらう
蘭幸

嗚呼ばくも父の齢を越えてきた
集一

嗚呼愉快割り勘で飲む酒の味
忠昭

嗚呼体重節酒節食してるのに
義

金持ちになるはずだったああ夫婦
朋月

嗚呼妻よ恥ずかしながら生きてます
たもつ

アラフォーのああスカートが短すぎ
朝子

嗚呼辛いああ悲しいを越えて立つ
すみ子

嗚呼鏡をこまで見せることはない
月子

誕生日嗚呼足腰をきたえんか

嗚呼夫婦診察券の数競い

寝るとする妻のああを聞きながら

鑑定士嗚呼お宝をゴミにする

嗚呼うまい気がねなく飲む妻の留守

置いてけぼりしたのは神でしょうか嗚呼

嗚呼今日も食べてしゃべって日が暮れた

五十年ぶり嗚呼また嗚呼のクラス会

嗚呼夫婦あれと言ったらあれが出る

住

ため息を溜めて大きくなる乳房

ああ家族よく似た顔でいがみあう

六法の谷間に嗚呼が吹き溜まる

ワンと吠えキャンと返して嗚呼夫婦

こんな顔になってしまった誕生日

人

嗚呼さくらこの国を皆春にして

地

めぐり来て嗚呼まつさらなこの四月

天

嗚呼を集め小さな湖になりました

軸

嗚呼この世なにしに来たかまだ不明

兼題 「師 弟」 小島 蘭幸選

師と弟子の間に深い谷がある

みな仲間師弟の垣根作らない

師弟でも勝負の世界腕一つ

何してもかなわぬ人を師と仰ぐ

保 州

恵 子

郁 夫

り こ

蘭 幸

蕉 子

則 彦

良 一

楓 楽

真理子

朱 夏

哲 子

真理子

紀 乃

久 代

朱 夏

完 司

房 子

のん子

靖 博

勝 弘

三人の師に導かれ今がある

師を囲むランチタイムでまた学び

師を越える恩返しなど夢の夢

師の背中見つめつづけてきたずっと

この世からあの世を仰ぐ薫風忌

師匠には奥の手なんか使えない

先生が恩師であつた木の学舎

師と決めたが弟子と認めたとは言わぬ

師の言葉いまだに謎が解けず冬

百歳の弟子に一目置いている

せめてもは路郎読本座右の書

孫弟子を連れて傘寿を喜ばす

先生も弟子も居ません我流です

不肖の弟子にも薫風門下という誇り

弟子の手で世に出た論語歎異抄

師の歳を越えて師の恩深くなる

師弟から夫婦へ進化した二人

冷めた茶も温い師弟にある絆

路郎と薫風うらやましい師弟

師も弟も共に細身の情熱家

弟子が師を越えても師は師弟子は弟子

鉤くす師の領域に近づいた

師と語る路郎読本中にして

饗鏖と傘寿を論ず師は白寿

台所覚えの悪い弟子は僕

生涯師は一人と決めて峰仰ぐ

紛れもなく母は人生の恩師

師を思う夜の檸檬とモノローグ

一 兆

哲 子

みつ子

扶美代

昭

日の出

好

修

郁 夫

保 州

保 州

恵 子

和 雄

恭 昌

則 彦

哲 子

いさお

黒 兎

完 司

みつ子

いさお

美 籠

蕉 子

淳 司

忠 昭

朱 夏

善 純

朱 夏

住

名人に教わりました竹とんぼ

師は一人弟子大勢の春の旅

転ぶまで弾ませておく弟子の酒

よくはしゃぐ弟子が頭の上にいる

クラス会師弟の垣根低くなり

人

晩学は楽し講師は若い美女

地

友と言う大切な師を持つている

天

腕組みをして満開を見る師弟

軸

師弟愛古いと思うことはない

原稿募集

編集部では「麻生路郎……この一句」を企画しています。麻生路郎作品から一句を選び、鑑賞・感想・想い出など何でも結構です。（同人・誌友を問わず）原稿用紙一枚半（六〇〇字）以内。タイトルは不要。締切りは五月十五日。掲載は七月号予定。編集の都合上、原稿は添削、整理する場合があります。また採否は編集部に一任願います。

寿 子

菜 月

一 風

月 子

時 雄

富美子

美智代

老心術

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。編集部

竹原川柳会広島

古田

太虚報

凍てついて吹雪いて義父の骨埋める
忍耐の限界にいる氷点下
寒風の中をろう梅凜と咲く
寒空に吹かれ迷わぬ風の糸
駅前のシャッター街と言う寒さ
税値上げ政治が寒さ倍にする
寒い世にひと息くれる伊達直人
凍てついた星と話している老婆
おめでたい顔して並ぶ一升瓶
ラムネ玉出してみたて振った瓶
二合瓶たしかあの女性ひとり者
生け花は半分花瓶で評価され
化粧瓶たつた三つでこと足りる
一升瓶亡父が座っているようだ
父の椅子をおとさかけてみたくなり
国会の討論揺れる椅子ゆれる
ピアノ弾く次男の椅子は孫が継ぐ
危機日本総理の椅子が又揺らぐ
行く度に亡父の笑顔が浮かぶ椅子

厚子 太虚 房子 千代美 輝恵 静風 白狐 一力 淑子 敬子 六口 笑子 蘭幸 栄恵 規代 半徳 汎美 慶子

若くなる魔法の椅子に座りたい
屋久杉のまんま中に神の椅子
切り株が椅子です森のレストラン
約束のない一日が暮れてゆく
兄弟の寝顔よホツとする時よ
たまご焼きやつと得意になりました

川柳塔打吹鳥歌

野口

節子報

味付けは鍛えた舌が知っている
何煮ても料理の味が口に合う
孫諭す母の言葉に味がある
私しか出せない隠し味持っている
ショウガ焼き食べた男の味がする
素材でも舌が覚える母の味
いい味が出ている九十歳の皺
川柳会背押してくれた旦那さま
あはれ風ドア一枚を押して来る
残雪を押して片付け春を待つ
押入れの中で眠っている昭和
出無精を春一番が押しに来る
一輪車押して春へと続く道
まだですか春のドアを押してみる
非常ベル押す体力のない日本
これぞ男だ押しも押されぬ日本海
気がつけば威張る夫も医者通い
爺ちゃん昔を語り威張り出す
憂さ晴らし犬に威張ってかみつかれ
立春を過ぎて冬が大威張り
春一番杉の花粉が威張りだす

節子 幸子 比呂子 栄香 史子 千枝 貴恵 富恵 美美子 勝誉 滋 完司 道子 和子 玲坊 美代子 芳光 照彦 くにこ 三津子 節子 みち子 たけ代 義人 泰山 清

蟹股で威張って歩く影法師
威張っても遺伝子だけは争えぬ
またですか酔うと始まる空威張り
芯こめて脇芽をのばす菊づくり
父さんは大黒柱家の芯
芯のある御飯が炊けたキャンプ場
キャベツの芯食べた甘い母の味
おじいさんぶらりぶらりと芯が無い
美智子様やさしい顔で芯強い
芯を研ぐ気持で今朝も顔洗う
芯のない菊弱腹に串を刺す
わたくしの芯に住んでる狭い虫
キャベツの芯しっかり食べて春を待つ

川柳塔おっぱい吟社香川 川崎ひかり報

重忠 美知江 龍枝 久芽代 勝憲 公恵 紀美恵 石花菜 悦子 いさお 楨元 紀の治 善江 ひかり はつ恵 あきら 放任 よしみ 八重子 賢 弘 いさむ 碧報 富子 美子 起世子

和歌山三幸川柳会 武本

おはようの余韻夜まで続いている
あいさつ道路書かねば出来ぬことかしら
濡れた手で挨拶交わす魚市場

あいさつを交わすと根雪解けてゆく
寅さんが仁義を切ればつむじ風
中折れ帽つまむ仕種に父がいる
あいさつは機先を制すツールかも
おはようの笑顔我が家の潤滑油
あいさつに百均の品持つてくる
あいさつと返事が減っている日本
賞味期限され挨拶も軽くなる
おめでとう言つと手を出すお年玉
耕した土命育む宝です
網膜に焼きつけてある宝物
おはようと今朝の機嫌を推理中
笑顔という宝は惜しみなく使う
集客にスカイツリーという宝
かけがえのない宝物メスの跡
錆びていく命へアンチエイジング
タイムカプセル児等の宝が詰まってる
神様がくれた宝に添い寝する
家宝など飾いは笑って生きている
一切の宝飾は無し一代記
百歳の詩集は宝みちしるべ
お宝へ出す気などない形見わけ
みつ豆に宝さがしをする長閑
原石と思えばいとしガラス玉
子宝に恵まれいつも火の車
繕えばまた弾み出す宝物
欲張りになろう知識という宝
貧乏な憶良は宝知つていた
賜った揮毫に生きている恩師

当代 朱夏 章子 東吉 菜摘 義雄 夢子 孝子 桂香 イセ 房代 かずみ 美花 次根 昇 純子 絹子 幹子 理恵 町子 みね 淑子 碧子 武重子 准一 義泰 保州

宝クジ売り場へ宝掘りに行く
一塊の土を宝として守る
お宝に目も口もあり騒がしい

川柳くらだの会鳥取 岸本 宏章報

トリックと気付いた美女のどほとけ
孫来れば亭主関白目も丸い
ろう梅が咲いたと妻が嬉しがり
円満の秘訣の裏に聞き上手
パソコンが少女の顔にしてくれる
わがもの顔だけのこ伸びてやがて荒れ
婚活の日だけ角とり丸いふり
お酒つていいなころを丸くする
年一度もらう賀状で無事を知り
いのししの親子だけのこ見逃さず
減税というトリックが票稼ぐ

川柳塔みちのく青森 小寺 花菱報

相棒が逝つて浮世がせまくなる
伏せ縫いを手にとり亡母を懐かしむ
神主の祓いに伏せる厄払い
野仏の相棒肩の赤とんぼ
春彼岸はつぼつ届く花便り
伏せてなお命削つて句生む子規
町議選はつぼつ噂触れてくる
絵手紙に本音の私伏せておく
忠告の言葉に伏せてある温み
婿という言葉を抱いて輪の中に
まだ近けぬ書いた遺言伏せてある

智三 和子 正美 せつ子 寿賀子 邦昭 清 紀子 大鯨 孝子 富貴子 仁子 宏章 一子 信子 つとむ 氏加子 きよし 初枝 吞舟 柳子 洋子 あすなろ ひとし

佳句地十選 (4月号から)

今 愁女

祖母を見る母の背中のな丸く
米櫃の底の怖さは子は知らず
潜んでは病魔出ぬ間に辞世の句
柳のよう生きてこらんと風は言う
いつの日か笑う無駄骨折っている
叩かれた背中意欲が燃え上り
媚売らず信じる道を生きる雑魚
日向は誰のものでもない自由
愛されて育った愛で子を育て
もう少しユーモア欲しい日本人

けい子 伸雄 祐康 義子 嘉子 左余 賢子 寿代 一風 さち子

八百長を伏せてはおけぬ国技館
夢あまた抱いて走つた夫婦独楽
本当の相棒だった妻だった
目を伏せて馴染みの店を通り越す
急がずもぼつぼつ老いの腰の骨
輪を抜けて迷子になった蟻でいる
ふたり旅阿吽の呼吸世を渡り
尿もれ用紳士バンティイひとし
クラス会メンバーはつぼつ消えてゆく
影法師鬱陶しくて愛しくて
ボツボツと行こうリセット出来ぬ旅
日めくりがぼつぼつ放つ花便り
花筏はつぼつ浮かぶ鯉の口
輪をつなぎつなぎさりの仲になる

美鈴 芳生 隼彦 則彦 一吞 ふさゑ 花匠 愁女 井蛙 黙人 岳水 花峯 慕情 磊

はたる川柳同好会大阪 水野 黒兎報

質素でも人が繋がった戦後
削ぎ取って質素な暮らし喜寿の春
あきつばい性質転換が早い

料金はそのまま質が落ちている
質の良い睡眠取れという羊
三歳がなんでなんでと攻めてくる

ふるさとの友に送る春の味
赤いバラ贈られ妻は有頂天
旅立ちを見送る母の肩が揺れ

先送りした野暮用に足取られ
ゆうゆうと旅立ちしめる紙オムツ
イクメンの妻はゆうゆうお茶をする

悠悠とクニマス西湖生きつづけ
ゆうゆうと煙草煙らす過疎の村
やることはやっとなと昼寝受験生

日の丸をオリンピックで知る子供
長一

柳花の輪大阪 妻谷 重風報

我が家ではぬくい席には妻とタマ
サクラ咲く受話器を握る手がぬくい
祖母縫うたぬくいねねこ子に孫に

ゼロにしてやりなおしたら大相撲
財産も借金もゼロ明日がある
ゼロベース今年婚活地味にする

そこそこの薄味うまい回復期
足腰も脳もそこそこの喜寿の春

見清 公子 久子 美智代 契子 春代 正子 郁子 順子 幹治 桂子 純子 柳童 信男 黒兎 長一

風 子 重風 昭好 ミヨノ 勇太朗 一幸 薫

そこそこの元気が嫁に喜ばれ
賽銭はそこそこの願い事

松露川柳会鳥取

小西 雄々報

秀才の頭の中を覗きたい
エコ対策頭使って活性化
頭脳よし回転早く気持ちいい

黒髪の手茶髪に何故染める
年輪を重ね頭脳に雲かかる
頭を低く生きて友との輪を広げ

笑顔で尾頭付きの祝膳
未来図は頭のなかに書いている
鱗みな落ちて頭かくなる

高知川柳社 小川てるみ報

合格の横で万歳する努力
生き様があなたに好かれゴールイン
難関突破いつに春がやってくる

採用通知手にしてプラン動き出す
合格へ文殊菩薩も忙しい
見事合格夢の宇宙へ鳥になる

合格へ母の後押し百度石
合格の涙で濡む子の名前前

川柳茶ばしら愛知 板山まみ子報

一人では覗けぬ店も二人なら
うちの子が天童だった五歳まで
はろ酔に無口な奴が喋りだす

春歩むバステルカラーまどう雪

敬子 克衛 智恵子 公美枝 弘子 鈴枝 久子 和代 静江 正光 雄々

健 京子 てるみ 三郎 憲一 千鳥 三千世 ふき

遡行 美千代 雅美 幸子

寒暖の差に忙しい吸入器
朝バナ旅行に出るとリバウンド
性格も親に似てきた咳ばらい

川柳ふうもん吟社鳥取 夏目 一粋報

場違いな賄賂だ正義死んだのか
生命の入口にぎり飯を喰う
妻が病み先ず包丁が錆びてくる

趣味ひとつきプランクのグルーブだ
場違いと思う所に居るカラス
プランクが何じやい好きな人は好き

民主化ヘデモはまんちゃらではないぞ
路地裏のベント怪しくないですか
我が家にはおひとりさまが二人おる

入口はこちらと誘う誘蛾燈
マスクにはため息愚痴も溜つとる
場違いな発言議事を狂わせる

場違いな街で飛べない青い鳥
入口が開いてる妥協したらしい
幾度もプランク越えて今日がある

まんちゃらでどうにか朝が晩になる
不眠症目覚まし時計早く鳴れ
まんちゃらで駅へ動くか新庁舎

小沢さん政治と金はまんちゃらだ
毒のある花に目がゆき困つとる
過労死の前に帰った雪女

先輩に悪の入口伝授され
入口を別にして居る嫁と姑
酒好きだプランクなんか気にしない

かつ子 百合江 まみ子 洋々 一瑠 孝男 妻信 清信 蟹郎 金祥 無限 あしび 昌鼓 節子 雅女 穀 美恵子 秀四 稔 孝二 隆浩 とも湖 一雪 美雪 凱柳 茂登子 振作

会議室バジャマ姿でやつて来る
場違いに耐えて明日へネジを巻く
頭の中ブランクとなる事故現場
ブランクをうめる電話が長話
脳みそにブランクありとレントゲン
単身赴任ブランク埋める熱いキス
入口に客が群れてる美味の店
老いの入口ケセラセラだよ突き進む
困った俺のするくせ孫もする
鬼は外女房は内で俺はどこ
まんぢやらを潰すデモならやるがよい

城北川柳会大阪

伊達 郁夫報

北風の三日月芽えて明日も晴
来る年に引いたおみくじ吉と出た
私の忘れた傘をさしてはる
良い天気感謝しつつも日傘さし
少年が未来夢見るガラス部屋
何カラット聞いてくれるなガラス王
牛鶏を吊う如く噴火煙
手招きの閻魔を払う善を積む
笑顔と笑顔元気を貰うハイタツチ
放任のように見えてつ親の傘
回らない舌にオリブオイル注す
蜚梅の匂うあたりで腰が伸び
惜別の列車の窓にある未練
立証が出来ず閻魔がうろたえる
ガラス張り政治を叫ぶ閻世界
大切な人だガラスに入れておく

主一郎 清帆 重忠 菊香 善夫 喜子 雄太郎 由美子 徹 弘康 一粹

意地っ張り杖の代りに傘を持つ
息切らし百段登る寺詣り
迂闊には洩らせぬ孫は回し者
保育器のガラスの中に住む天使
ガラスの靴が合わなくなったシンデレラ
割り切れぬ円周率の中で生き
梅咲いて絵馬にはさくら咲かせたし
轆轤回し匠が作る美の極意
節分に八百長ばれた大相撲
朝焼けに傘を持たせる祖母の知恵
転地鳴動地球を覆う傘がない
この人の傘のつもりで生きている
友情が心の傷を温める
骨のある閻魔だワイロ受け取らず
寒の月益に浮かべて梅の宴
ガラスでもダイヤに優る愛込める
父の歳越える助走を繰り返す
幸せの原点にある白い飯
もてもての女難の相を逃げ回る

川柳ささやま(兵庫)

遠山 可住報

乱れ髪意いではるようだったの
勘の乱れあるある老いで呆けておく
自由席丁度空いてたラッキーだ
合格へ一足早い春が来た
スマートに老いて花見の予定組む
塩づけの株へ春から乱調子
休肝の予定を乱すメール来る
心待ち孫が中学服姿

勝弘 弘風 じゅんこ 和夫 克己 昭 志華子 野鶴 倫子 柳弘 集一 修 典子 一步 直樹 賢子 たもつ 満洲夫 朝子

書道塾今日はお休み春の雪
うさぎ小屋読みたいだけの本を積む
春の道やさしい詩人にしてくれる
今日の運茶柱たってラッキー日
人間が増えて地球が騒がしい
志望校入學出来てラッキーに
大乱闘海外沙汰と云い切れず
舞台裏心乱れる出番待ち
気が付けば一心不乱に生きて古希

ローズ川柳会兵庫

木村貴代子報

若者の大志地震に碎かれて
時に雨時に嵐も子守歌
梅林の鄙びた駅の草だんご
みの虫がらんこついたけれど咲いた梅
幸せってなんだろうらんこ剥きながら
如月を潤す梅の香のたより
あの夜の軍歌よ父の子守唄

南大阪川柳会

吉川 寿美報

人生の峠へそくり役に立ち
へそくりはかくすものとは知らなんだ
男性がへそくりしたら危険球
ばあちゃんのへそくり孫が狙ってる
再会に互いにはうら肩の雪
一ひらの雪に女の影を追う
写メールで孫が作った雪だるま
スローライフ妻の機嫌にすがりつく
すがりたくなるほど真面目に四股を踏む

真由 哲子 多美子 開子 可住 かはる 幸子 照代 美智子 貴代子 年子 哲子 義子 いわゑ てる 更紗 なぎさ 和雄 直子 郁男 正春 忠昭 柳弘 集一

大雪で正月気分何処へやら

内面を磨くくつきり咲きたした

政治家も僕もひだまり手ばなせぬ

豪雪も灰が降るよりゆるさされる

流す涙があるうちはましハブニング

気が付けば雪の話で月終る

お日様の顔みて心まで温し

心地よくスピーチ誰も聞いてない

豪雪に耐え庭のさくらも春を待つ

人気がようじよう歌手は世界を股にかけ

衝撃が止まらぬままに夜になる

このころ穏やかな日々望めない

師のそばで手ほどき受けて位置を知る

雪を掻く霧島に石降っている

長柳会大阪

坂上 淳司報

民主化のうねり国境軽く越え

二十年越えて元氣な長柳会

句会終えごほうび美女のフラダンス

ライバルの母を越えたか忌が巡る

平均の寿命越えて元氣です

親の背越えたつもりが瓜二つ

迷いつつ捨てて身軽に越える坂

幾山河越えて笑顔の共白髪

寒空に上着も着ずにやせ我慢

寒戻る上着は春へ見栄を張る

ツイードの上着颯爽風を切り

上着脱ぎネクタイ取ると父の顔

上着着て気取って見たがもてなくて

晴子

ふみ

寿々子

春枝

てい子

恵子

蘭

未延子

麗

瑞枝

亜弥

初枝

鶴子

千代

淳司

正一

ヒロ

けい子

よしお

エミ

幸子

正子

輝子

三和子

武男

ふみ

もこ

議員さん上着のバツジ泣いてるぜ

また来てねそとコートを着せるママ

ブライドを捨てて上着が軽くなる

サアどうぞ上着着させた甘い頃

約柄がなにわの街を闊歩する

武士道の「恥の文化」も日本の美

叩かれた記憶を持たぬ甘い影

無駄口を叩いて無くす時は金

平均寿命越えた二人のいい話

挑んでく越えたい私ある限り

断家はサー本题と羽織脱ぎ

内緒ごと内ポケットは知っている

体形と本音隠している上着

修羅越える度毎太くなる絆

惜別の悲嘆知っているこのスーツ

上げ底の箱で照れてる一夜干し

倦怠を胸に畳んでリンゴ切る

基準値がモグラ叩きをして困る

本気で来い叫ぶ親友がちさく見え

新調のスーツどすこい春の四股

あかつき柳会大阪 宮崎シマ子報

子供の無理を聞くと財布が軽くなる

子等巣立ち大きな鍋が知る苦労

年重ね子もある身のありがたさ

子や孫に七ツボタンは着せられぬ

可愛いね抱かせてもらおう隣の子

隣の子親に似合わぬ笑顔よし

女から見れば男は皆子ども

たけし

正博

英美

マサ

隆彦

靖博

一慧

光弘

芳野

孝代

弘光

篤

正美

和代

敬二

和子

久美子

富美子

ともこ

直樹

太郎

たかこ

キイ

のぶ久

武

和雄

いさお

噛み合わせ話老々介護中

待ち合いでやつと噛みあう歳のこと

矯正した歯の謀反かも舌を噛む

ガレキ噛む機械むなししい震災地

あんなって甘噛みばかり意気地なし

窓越しにバントマイムでする別れ

窓際に追いやられても知恵袋

幸を呼ぶ心の窓は開けておく

窓に花わたしに紅をさすように

窓を開けたら神さまが立っていた

夢掴む窓を大きく開けておく

淋しさが消えるまで窓拭いている

幸せの小窓はゆつくりと開く

過去ばかりバッチワークにして老いる

過去は過去キツパリ忘れ前を向く

屈しない彬の過去が今ひかる

過去はみな美化されていく遠い虹

空腹もバブルも過去の一里塚

ええ頃もあつたんでつせホームレス

やがて過去今日を精一杯生きる

初恋はふわふわと夢の過去

叩かれて埃出さない苦労人

シベリアを語る親父の目が潤み

先見えぬ不安犯罪駆り立てる

陽春の笑顔眩しいニューフェイス

翼賛か五大紙増税を主張

川柳塔鹿野みか月鳥取 福西

珈琲にミルクが溶ける春隣

穩夫

美世子

桃花

隆元

廣子

秀夫

克己

一步

すみ子

義

生枝

野鶴

祥昭

見清

忠昭

朝乃

紀乃

哲男

正

蕉子

シマ子

紀雄

篤

敏子

柳弘

勝弘

茶子報

螢

さくら咲く何も競わず城に立つ
暇なので時々ボケて見せている
城下町天守の跡のある誇り
城下町誇りを持つて花飾る
断らぬ求めぬ主義の人事案
乱雑に生きてなんにもまだ未完
メールでは感情見えず物足らぬ
父の背に悲しみにじむ松飾り
雨上がりミルクのやうな雲なびく
雪ダルマミルクで育ちすぐ融ける
満足に旅の小鉤が掛けられぬ
啓蟄と共に出てくる遊びぐせ
春はいも植え虫急ぎ立てて起こす
花がすみホッタルミルクのティータイム
ひとときを浄土と思ふこのお城
二人の子自然のミルクたつぷりと
城下町の名残殿町お堀はた
君が代も校歌も遠くなる記憶
啓蟄の窓から掴む春の雪
君が代に一生涯を誇らせる
城という古に居る物語
啓蟄も戦無い人科這い出せぬ
君が代をオリンピックで聴きたいな
穏やかな胸で飲ませる母の乳
啓蟄やコタツに猫の子守歌
雪の下啓蟄虫は知らぬ顔
君が代にサッカー場で旗なびく
磯で割る牡蠣のミルクに舌鼓
寡婦の城守ると仏に誓つて

美ツ千
いさを
節子
久枝
弘子
（和）和子
幸枝
彩子
照彦
忠良
蟹郎
美恵子
孔美子
富久江
八重
（和）和子
くに子
京
諷人
汲香
永子
露子
惣子
美代子
満
みどり
かおる
重忠
房子

啓蟄の穴から春の夢が出る
君が代の踏み絵を踏んだ敗戦記
ブラックを飲んで大人を誇張する
（和）和子
八十田洞庵報
丸い背な叩く友の手暖かい
一心に火の手叩く刀鍛冶
鞭持ったジョッキ一必死のゴール前
浮ついた匂いが好きな週刊紙
初詣希望の風船ふくらます
追いついて目標失う日本人
ああしんど何を言うても一人者
線香の匂いし何える友の死よ
積もる雪里を偲んで夫恋し
とみさんの遺影を拝み胸いたむ
初詣で希望かなえて今年こそ
好きな人見付けてほしいかくれんぼ
励まされプラトニックで好きな人
三十キロの母を背負って一歩二歩
ふわふわと雪の蒲団は冷たかろ
惜しまれて雪につつまれ逝きし人
別れ雪佳句さまざま思ひ出す
この世での使命果たされ近く浄土
あたたかい匂い集まるおでん鍋
腹郁と匂うが如き人の舞
柳塔さかい天阪
村上
玄也報

小鹿
実満
茶子
富美子
茂平
峻史
貞夫
蛙城
東吉
利武
洞庵
悦子
圭子
清一
寛
富美
さくら
寛庵
洋子
和美
和香
年子
桜琴
清晋
みつこ

お気の毒まだご主人がご健在
同情を拒絶している車椅子
婚礼の前夜に差し歯折れたパバ
ユニークな個性育たぬ多数決
ユニークな変曲をする父の唄
同情を装い忍び寄る魔の手
歌つたら気の毒そう願される
逆転はそのうち今は笑つとく
人真似はしない決めた意地で生き
地球から人がこぼれる日も近い
風向きが変わり同情無駄になる
そのうちにいい事あるといたわれ
そのうちと言つてるうちにおばちゃん
そのうちに私もおむつ使います
そのうちにクシヤミをするだろ冬薔薇
馬鹿さわき何故かむなしくなつてきた
ユニークな案山子が並ぶ村おこし
ユニークであるが誰にも解らぬ絵
真心へやがては天も味方する
番犬が何かもううて懐いてる
バツグよりナツバツグが馴染みだす
そのうちにいい事もある笑つとく
ねえあなたそのうち介護お願いね
そのうちが利かない本を積み上げる
そのうちにお父ちゃんから折れてくる
研修でユニークな芽を摘み取られ
世話してもそのうちきつとわすれられ
変わつてるところが好きと口説かれる
会者定離そのうち元氣取り戻す
敏治
朋月
五月
和夫
好
玄也
時雄
月一
誠一
章之介
公誠
かりん
進
さくら
美代子
扶美代
政男
愿
のん子
澄空
俣子
梓
冬虹
半銭
としお
雅明
八千代
天笑
唯教

ユニークなお答えですと傷つけず
そのうちアラフォー選ってまだ独り
そのうちがテレビの前で根を下ろす
そのうちはそのうちのまま終わるもの

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

おそろしや人差し指にあるパワー
哀しみのふかさ菩薩の指である
そこからは無念無想のにじり口
口は重宝人を泣かせて笑わせる
口下手の父の一喝身に沁みる
口笛が小さく消えていく別れ
お隣と心を交わす勝手口
くるくるばあ言われた人が博士号
幸せはきつとくるくるきつとくる
阿弥陀さまのバンチパーマにない妥協
くるくると時流に乗れぬマイペース
空回りばかりしているベンの先
輪の中で噂くるくる回り出す
身を削りくらし支えたる戦中派
苦を削り楽な杖持つひと旅
不要な言葉削って残すありがとう
揺り椅子で煩惱すこしずつ削る
足枷を少し削ってはじけよう
鳩胸を削ればボタン止まるかな
政治屋の政治とカネが身を削る
たこやきの上でダンスの削り節
身を削る思いがわが子に愛の鞭
体脂肪削ると皺が威張り出す

削り屑集めて心確かめる

はびきの市民川柳会大団 徳山みつこ報

遅い春雷がじつと我慢する
梅林の香り仄かに浸る幸
常習犯運刻はキミの名人芸
ゆつくりと話せばわかるアイウエオ
長時間待たせた化粧その程度
チョコよりもお酒が欲しい鬼と住み
人間が恐いよって来ない鬼
知らぬ間に我が心にも鬼は棲む
仏と鬼あなただ次第でかわります
強がりを一兵卒の鬼が言う
豪雪にじつと耐えてる鬼瓦
嫉妬心顔に出さない自尊心
カレンダー妻の予定に妬いている
肯定も否定もしないから妬ける
ガラガラバツがいであ流す嫉妬心
割かんになると負けない紙コップ
採尿のコップを持ってうろちよろし
コップ酒あおり自分を責めている
ワンカップ掲げて左遷の草履履く
サイターのコップの泡のこぜりあい
乾杯へ迫力のない紙コップ
未練まだコップの底にひとしずく

富柳会大団 古田 千華報

期待され圧力鍋で煮込む骨
原点は芥子粒程の芯でした

カッコ付け破れジーパン履く娘

雑音に惑わされない独楽の芯

寒桜咲いたと友の電話くる
清と濁その真中で生きている
思いやる心は広く身は低く
疑いも迷いも流す寒の月
アナログの芯がゆるがぬ戦中派
再挑戦えんぴつの芯尖らせて
美辞麗句負けてはならぬ薔薇の芯
何もかも褪めてしまった待ちばうけ
旗色を見て決断の金平糖
元気がとむかしの風が遠廻り
うぬ惚れを削ると僕は宙に浮く
屏風絵の余白を狙う冬の月
母と子がタッグを組んで鬼退治
君だけに手造りをするチョコレート
春場所へ期待の星の芽が折られ
野性味を知らぬ蜜は胸で待つ
じわじわと温めて春の愛し方
どん底の影が背伸びをくりかえす
砂時計リセットばかり繰り返す
凍蝶の命をとくす春の雨
弾むの抱いてゆつくり花の芯
ことさらの一言九い輪が歪む
女四人みんな春です赤ワイン

岩美川柳会鳥取 石谷美恵子報

小粒だと言われようとも主義一つ
大きなキャベツ元は小さな一粒よ

世紀子

健吾

像山

千代

輝子

あきこ

保州

めぐみ

英子

精子

登美代

よしこ

克子

徑子

富美子

大輪

准一

よりこ

和香

紀久子

緑良

小雪

富柳会大団

古田 千華報

岩美川柳会鳥取

石谷美恵子報

高鷲

七朗

彦次

紅紫朗

壽峰

田鶴子

和子

よりこ

アキ

伸雄

登子

よしみ

武人

廣子

晴美

千華

奏子

鬼焼

寿之

信子

澄子

恵子

森子

幸安

稔

小粒だがでつかい夢をもっている
負けになる涙一粒こぼれ落ち

大粒の涙に油断して仕舞い

どくだみが咲いていますと自己主張

幸せの瞬をたぐって咲いている

大粒の涙に決意する明日

思いきり咲いてさくらのいさよさ

咲く程に嫌われ杉は涙呼ぶ

棘を持つ薔薇も一度は咲き匂う

鮮やかに咲いた花だに棘がある

きみと私の心に二輪草が咲く

ササユリが咲くと嬉しくなる私

降る雪に負けず耐えたね鉢の花

一人去り二人去りして空屋増え

としよりを守る大きな屋根が要る

半世紀堪えた大屋根葺き替える

本家より一尺低い屋根にする

苦むした屋根にだあれも戻らない

終焉はわが家の屋根の下にする

極楽もあんなところか寺の屋根

正直に生きて恥じない低い屋根

川柳大阪

長井

善純報

尽きる迄本心明かさぬ女王蜂

小細工はしない主義です本音です

本心を言わぬ小沢は墓場まで

本心を言えない人が一人いる

本心がお金の前で狼狽える

本心を見せぬ女の下心

主一郎 螢 一京 一瑠 茶子 幸子 節子 たぬ 菖子 清帆 雅女 重忠 和子 公子 完司 孝男 忠良 蟹郎 一粹 昭弘 美恵子

朝子 美花 柳弘 美龍 司

私の本心どこにあるのやら
本心を見抜けぬ俺が悪かった
老いの坂二人楽しむ春うらら
結論を急ぐと坂が険しなる
坂の上国民暮らし見えますか
上り坂あとは情性で下る坂
婚活も未だ実らぬ無縁坂
空白の章にじっくり愛を置く
じっくりと妻の尋問交わす歳
七合目じっくり息を整える
八百長の力士じっくり反省を
じっくりと原石研ぐ鬼コーチ
じっくりと迷い選んだ今の妻
じっくりと育ててみたいこの恋を
じっくりと見極め決めたこの人と
じっくりと寝かせたワイン香りよし
就活のじっくり選ぶ余裕ない
じっくりと話せば解けるわだかまり
失敗を重ねじっくり亡父の声
じっくりと煮る母さんのかくし味
じっくりと私色に染めました
じっくり日本の追越す途上国
じっくりと見つめ直したい人生

翠洋会大阪

佐々木満作報

青年の主張に青い炎立つ

原発の炎見つめる世界の目

白木連白の庭楽し

まつお 照月 一風 美世子 五月 花笑 哲矢 信醉 丹雄 紀心 鉄生 珠心 勝弘 すがお 川童 義明 喜楽 笑風 彦太 東吉 善純

楓楽 富子 みつ子

M9で地獄の炎燃え上がる
炎とは心の中にあるのか
アリバイの共犯かつて出た五歳
猫の毛でアリバイ崩す名刑事
出来過ぎのアリバイ紙を剥ぐ如く
アリバイは天知る地知る人が知る
お悔やみが言える大人になりました
悔しかった俺を超えよと鍛えられ
痛い目に会った時だけ悔やんでる
亡母の愚痴聞けば良かった悔やまれる
挫折した悔し涙を糧に生き
溜息をつく度數がふえていた
土香る冬眠さめる春の泥
何気ない親切だから暖かい
答弁書棒読み野次の野党席
取りにもどり今度は電気消し忘れ
月末は実家で過ごしてはいる家計
花屋の前で少しおさまる憤り
老いて今いつも笑って生きて行く
釘煮よく腰の曲りを我にみる
ああ神よ三月十日に戻りたい
被災地へわたしに出来る義援金
告白のあと一分へ発車ベル
花言葉愛も恨みも紙一重
雑念を捨てに八十八の寺
さりげなくくれたがあととはくじやない
思い出し笑いの好きな柳の芽

川柳塔まつえ吟社島根 三島

浜丘報

鏡台が和服しばらく見ぬという

町紅

浩二 公平 恭昌 舞夢 照出 真澄 げんい すみ子 紀子 昭 希久子 弘子 集一 知花 正雄 理恵 善之 滋彦 蕉子 志華子 千歩 満作 捷也 千梢 義

ひび割れて分裂症に病む鏡

つつましく生きて曇りのない鏡

鏡には僕の気持が隠せない

三面鏡心の曇も見つめてる

不覚にもしじみは口を閉じたまま

やわらかな舌に不覚の毒りんご

人生の不覚かみしめているわたし

あの時は不覚とったと言う兎

不覚にも妻の手を借り支え合う

不覚にも主役になれぬ紅いバラ

甘え癖つけてしまった憎い人

春の句体重計を甘えさせ

卒寿です甘える妻はもう居ない

人類の甘えに自然炎をすえ

世の中を甘く見過ぎて墓穴掘る

甘えすぎ時々自分いましめる

動かない虫が頭の中にいる

エレベーター気軽に動くから怖い

春ですよ鈍い動きに喝入れ

胎動で未来へ希望沸いて来る

絵手紙に心動かす友の愛

ウォーミングアップしながら春を待つ

うさぎと花に酒にと酔うもよし

兎年うさぎ跳ねて春を待つ

うさぎと羽目をはずして裏を着る

うさぎを隠していると笑う足

うさぎと春の海へと舟を出す

春や春へその辺りが浮かれ出す

芳山

たけし

とも子

注湖

幸代

ゆき

美智子

きみえ

雪代

ちえこ

涼子

寿代

禮子

茂美

長吉

幸

政子

桂子

畔

芳恵

幾子

邦代

たえこ

螢

英子

和歌子

幸子

知恵子

浜丘

川柳さんだ(兵庫)

北野

哲男報

いらいらを子どもに向けて叱ってる

風邪ひいて叱る元氣も消え失せた

叱られてこぶし握って空見上げ

逃げ道のレールを敷いて子を叱る

飲み過ぎを叱る人などもういない

夕焼けにこぼれる程の笑み拾う

ライバルの庭にも同じこぼれ種

内緒ごとと意にこぼれて広がって

孫のつぐビルこぼれた分も飲む

向うからこぼれる笑みで来る悪魔

花便り穴場探しのキータたたく

文芸のくぼみに炎溜めておく

オール電化へ停電の落とし穴

助手席にずっと座っていたかった

八十路まで続いた命平均値

答え無き父を見送る霜の朝

着くまではボケていられぬ一人旅

前向きに歩けば答ついて来る

論吉さま私のどこが嫌いな

コンビニへ子供走らす不意の客

適当と言う物差しが母の味

わかあゆ川柳会(島根)

松本はるみ報

春彼岸おはぎ供えする話

カラフルな頭行き交う世の流れ

故里に捨て石一つ置いたまま

子に孫に遺した遺伝子ちぐはぐに

捨て石に喜怒哀楽を問うてみる
捨て石が転がりついたピラミッド
ちぐはぐな意見に天の声を聞く
友達に誘いに負けて平和です
一徹な裏を見抜いた人間味

川柳あまがさき(兵庫)

田原

一兆報

うす紙に包んだままの恋でいい

咲いてよし散るもまた佳し花の色

二位じゃだめ追い抜き逃げ切り世界一

息の合う踊りもびつたり赤い靴

もう貴方逃げられませんか私から

ピンク色に染まってきたのな色地

色色な色に染まってきたのな色地

何着よか思案してます喜寿様

孫の仕作に口出しいいか思案する

逃げ道を残して叱る親心

春の風ピンクのスカーフひらひらと

老いてなおピンクが似合う母おしやれ

告知受け思案に沈む若夫婦

悩んだり懂れたのに唯の人

雑壇にロールケーキも板チョコも

散り際もピンクのままで姥桜

アフリカの飢饉には遠く米を研ぐ

どうなった今日は頬紅つけている

さっぱりとノーとは言えず思案する

保育園泣く子預けて逃げて出る

水色のワルツを踊る古希の人

歳だけは逃げるすべなく皆一緒

好栄

恵美子

英子

博利

清泉

ひとみ

一兆

洋子

柳明

里江

京江

野薫

靖鬼

あかり

純

ヨシエ

江美

茂幸

幸香

比ろ志

美代子

節子

イサミ

雪菜

哲男

芳治

芳子

今日一日の嬉しいことを抱いて寝る
ピンク系持つてゐるだけの若返り
踏みつけて逃けた男を忘れず
好きだから迷惑かけぬため逃ける
リビートが淋しすぎるよオルゴール
逃げてから戻つて来ても同じ罪
国外へ逃げてでも影は従いてくる
リハビリの箸から逃げる豆を追う
躲す案持つて女房と差し向かう
もう逃げぬつかまつてみる鬼こつこ
叱られた孫の逃げ道祖母のハゲ
ジグザグの思案を棚に上げたまま
意のままにならぬ思案に肩おとす

八尾市民川柳会大阪 富西

弥生報

移りゆく日日細い命に酒注ぐ
カラオケへいくときいきする音痴
わかれ道一番星に聞くゆくえ
抜けがらの退職花のプレゼント
移り気の埋み火を赤くさせた風
手をかけるころ花は咲き誇る
移植した命ドー二人づれ
酒タバコ止めてから鬱が治らない
粗衣粗食卒寿の母は医者要らず
タンポポの綿毛チャンスに乗っていく
友達が百人欲しい春の靴
人間の悪性インフルならと鶏
まだ雷光と影に操られ
爽やかな笑顔だ疑つてみるか

かずお よしひさ 五月 朋月 菜々子 耕治 鹿太 勝巳 美義 和子 キヨミ 紀乃 美龍 耀一 一風 一風 園 寿之 賢子 シルク 紀雄 いさお 留里恵 華 幸生 森子 草風

ホップステップとても短い二十四時
闇夜抜け朝日を浴びてひらく花
野放図な夢が溢れている校舎
臓器移植誠の愛が響く音
明日をふと今寒月の薄あかり
カトレヤのような美人を知っている
青雲を抱く雑魚たちの呑みつぶる

サークル檸檬大阪

松尾美智代報

成す事は無くても今日の日は暮れる
恥かいた分だけ生きたる知恵をつけ
電話では若い美女だと思つてた
錆びたナイフだつて持つて底力
今生きている事こそが快挙なり
よく眠り食べて汁寝合わせとく
お転婆の七十歳を演じよう
若い時よりも充実してる今
多面体の若さと競わない鏡
残念無念若さどどん蒸発す
春風を颯爽と切るピンヒール
まだ若いのめり込むもの持つて
許せないことを許して増える数

京都塔の会

都倉 求芽報

爺ちゃんに太めのローソクバースデー
生きている地球と思う火山灰
ご先祖の棚田が消えるT P P
中東へ突然起こる砂嵐
お相撲さんのケータイ壊れやすいらし

柳伸 朝子 欣之 寿鶴 美代子 扶美代 弥生 房子 久仁雄 昌紀 光久 たもつ 美龍 扶美代 美智代 希久子 義子 いわゑ みつ子 楓楽 ますお としこ 美義 啓子 楓楽

いいとこ取りされて3位となる日本
苦も楽も一緒に積んでゆく絆
祈り込め賽の河原で石を積み
入門書積んでそこから進まない
石垣にも笑つて顔耐える顔
悔いのない命を積んでいける途中
気楽だがやはり淋しいひとり旅
あやふやな意見盲点衝いてくる
幸せの笑みにあやかり婚活を
あやふやな答のなかり婚活を
あやふやな効能だった美人の湯
あやふやな一歩大地を踏みしめる
あやふやな英語でバリをすり抜ける
鶯のテープを流す盆梅展
春はソブラノ水平線から流れ出す
心して聞けという妻の声
未来語る声がだんだん小さくなる
助けてと海の向こうで叫ぶ声
声なき声聞く耳持たぬ金バッジ
声のない妻の戦法ギブアップ
天の声地の声集めクレーダー
今声を出すところす梅の花
植物の芽吹く声聞く散歩道
閉ざされた心に声が届かない

倉吉川柳会鳥取

竹信

照彦報

こころない噂が一人歩きする
世界中国の歩みが変になる
見苦しい与党の歩調みだれ足
川柳を歩いた道は素晴らしい

求芽 朝子 綾子 福子 公之 欣太 庸佑 庸佑 昌乃 満彦 則彦 比志 英旺 宏子 輝美 文代 弘昭 義昭 益子 葉子 美ツ千 次男 龍枝 康子

足きたえ歩いて行くよ冥土まで
 歩けなくならないように歩きます
 スーパーのカート頼りに歩いてる
 本願寺まわりは早いほうがええ
 決断は早い失敗も多い
 早々と日本列島花粉漬け
 飲み会の相談いつもすぐ決まる
 待つて待つて診察五分おだいじに
 早春の天ぶらおいし路の臺
 早く起き新聞読んでまた眠る
 すみません呆けない薬ありますか
 この薬だでもともと後は運
 良薬も親のしつても甘くなり
 晩酌を薬用酒だと言つて飲む
 知らぬ間に酸素いただき有難う
 酸欠の財布が太る年金日
 貧富など関係はない酸素吸う
 これからも酸素のような人めです
 金魚鉢ゴボゴボ音を立てている
 酸素吸入すると女房の不寝番
 ヒマヤに酸素ボンベがごろごろと
 産声が初に酸素で声高に
 泡を吹き水中散歩背に酸素
 いい夫婦酸素のように暮らして
 瓦礫の下早く早く願つたが

川柳同友会みらい(鳥取) 吉田

由紀子 玲坊 和子 石花菜 茶子 貞子 泰輔 喜美子 英子 けいこ 風露 日出子 悠子 祐子 賀寿恵 美代子 萩江 智恵子 瑞子 重忠 鬼一 恭子 美津恵 酔美蓉 照彦 陽子報 勝之 一聴 千恵子

満面の笑顔を見たいお年玉
 確執があつてはつきりノーと言う
 辛いときにつこりすると泣けてくる
 孫が生きる国の未来が見えてこぬ
 雪深く造花でごめん仏さま
 悩みから逃げる寝返り打っている
 木の芽どき病も元氣出して
 半世紀過ぎ追憶のハイボール
 星空を洗い清めるイブの雨
 燃えるもの消えて無風の中にいる
 信じてる人にわたし信じられ
 十七の恋もやまの後ろ髪
 いいパンチもらいもや吹き飛んだ
 失敗は沢山の芽を出し始め
 年老いてだんだんなじむ赤い服
 四季の花咲かせてなじむ町に住み
 落日を胸のフィルムに焼き付ける
 為すことのすべてがうまくゆかぬ日も
 生きるとは罪をたくさん作ること
 プライドのお陰山越えなんのその
 冬の樹に欲の炎を論余す
 欲張った10年日記持て余す
 災いを起こさぬように控え目に
 手になじむそして口八丁になる

西宮北口川柳会兵庫 小林

ひとみ 久司 山ふみ子 温子 美恵子 章子 陽子 寒之 みち子 嘉子 敦子 くにこ 信子 安子 勢津子 引ふみ子 華蓮 和代 菜美 遊子 はるお 公弘 折抗 歳子 わこ いわゑ

口紅で女の業を塗り潰す
 抜摺を赤鉛筆が塗り替える
 塗り替えぬ老舗の顔の古看板
 矢印も気兼ねしている喫煙所
 矢印が見えない人が増えている
 それで良いの貴方の道を行きなさい
 矢印の方角鬼が待つていた
 人生にナビがあつたら何処へ行く
 気まぐれで矢印描くといけません
 三月は矢印ばかり工事中
 矢印の距離の長さに気力萎え
 釘緩み矢印板が向きを変え
 矢印に逆らひ仲間外される
 いち病が身をかはいつ息災に
 癖あつてよし癖なくてよし仲間
 人生の画布にいつばい花を描く
 スケジュールいつばいにしえてよく眠る
 満席の居酒屋錆を溜めている
 目いつばいもう反抗の三才児
 不安より夢いつばいの独り立ち
 口上手いつばい食わずの夜の蝶
 精いつばい生きて今日の灯たみます
 いっぱいの酒では効かぬ不眠症
 子育ての頃はいつばいあつた夢
 がんばれニッポン世界も動く支援の輪
 巨大地震あ津波まで引き連れて
 原発の推進これで止まるだらう
 添え文がくき煮の旨味引き立てる
 自画像に苦勞の点を描き加え
 過去は過去陽気な風と手をつなぐ

わこ報

秋果 奮水 比ろ志 玲子 千代 紀乃 盛夫 敏忠 浩司 いたる 正和 光子 美龍 キヨミ ひとみ 美津子 弘子 基輔 野鶴 朋限 無限 茂 武臣 勝弘 宏造 光直 光久

罪なことひとつ余分に買うケーキ

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田

耕治

スイーツな酒に油断をした不覚
オリオンに互いの夢を語った日
御免なさい直ぐに謝る猿芝居
ひと芝居打って見舞の客帰る
いかなこを作って嬉し春の味
ひと芝居打ったつもりが仇となり
どまわり根無し草だが共達者
駆け引きの出る幕がない我が家計
結末を次へ持ち越す紙芝居
裏切らぬ土と暮して茄子植える
希望持ち今日のがんばり明日作る
伝授せな腕が錆びない今のうち
はにかんで作る笑顔に騙される
響かない頓智にひとり悦に入る
一休に負けじととんちひねり出す
疲れてる父はとんちが調わず
インタビュートんちに富んだ受け答え
仲たがい友のとんちで救われる
淋しさを孫のとんちに癒されて
役者だねとんち連発人気者
みどり児のこぶしの中にある未来
謝ると心がほっと軽くなり
嬉しい日心の窓が全開だ
雪の日に静かに近づいた母の胸
ありがとうこの一言で人育つ
ころころと妻が笑うと溶ける僕
木瓜の花私の悩み笑つて

殺報
いわゑ
みつ子
光久
美穂
武臣
繁義
和弘
和子
武彦
基輔
順子
政一
盛夫
芳江
礼甫
寿朗
浩司
弘子
保雄
利子
千賀子
夏子
忠貞
弘子
洋一

悪口はちゃんと聞こえる遠い耳
絵馬祈願祖父はかくして祝い金
シナリオは以心伝心徳儀

義博
美恵子
能子
無限
無敵

天災になすすべもなく天仰ぐ
ハッピーエンドドラマのように終りたし
尊厳死そんな言葉と冬こもり
カンニングトップニュースになる平和
裏の裏読みふり出しにまた戻る

義博
美恵子
能子
無限
無敵

岸和田川柳会(大阪)

仲谷

弘子報

オクターブ下げて固める守備範囲
巣立つ子を陰で見守る母一人
約束を守り小指も安堵する
サザエさん歳とらぬまま半世紀
少子化で先が見えない新世紀
大津波神おられぬか今世紀
幾世紀ドラマ見てきた大公孫樹
大きさを競う世界にナノ技術
小さいが誰にも負けぬ夢がある
小さい嘘わたし小縛り付け
バレンタイン孫も小な胸焦がし
ボランティア普段は声の小さい人
逢うたびに小さく見える母の背
与野党に小異捨てよと来た地震
愛情の注ぎ過ぎからもやしつ子
注がれた愛の不足で追越れる
注がれた愛を返している介護
母さがす少女に涙そぐだけ
子に注ぐ愛は見返り求めない
春宵一刻ここでお酒を注がれたら

哲矢
香代
房枝
いさお
泰弘
弘子
仁緑
洋

妻よりも初鶯に気を注ぐ
愛という一字注いでくれた母
パソコンを課長に指導ニユーフェース
不景気で今年も見えぬニユーフェース
御局が妬み苛めるニユーフェース
ニユーフェース女子に群がる男の目
川柳やがわ(大阪)
龍島
恵子報

義泰
ダン吉
清
つかさ
和美
東吉
博泉
亜成
郁夫
柳弘
賢子
朝子
美智子
弘一
弘風
祥昭
薫
仁清
かすみ
修
麗
洋
一風
忠央
美江
さち子
茜
ルイ子

先手打ち逃げ口上を封じとく
逃げ方は知らぬ真つすく生きたから
太陽に向かつて逃げる鳥のつる
まし化粧女の先手だと思ふ

豊中もくせい川柳会大匠 藤井 則彦報

教壇であのお転婆が威儀正す
ギャップなど言わず階段駆ける意気

参観日親の行儀を垣間見る
老夫婦ギャップもあるがもめもせず
宇宙には行けても防がない津波

すっぴんでは一歩たりとも外へ出ぬ
あなたとは違うギャップがありすぎる
雨戸開け私の起床知れわたる

諦めの早い男でまだ独り
春を待つ心へ原子炉の煙
君とのギャップ冥土着けば消えるだろ

ヒヤシンス白い無口が喋り出す
生煮えの恋のリズムが乱れ出す
抒情歌を口ずさみつつ春の朝

たつぷりとまではいかぬがある未来
行儀良くぬいだ履物家の顔
最後まで粘る明日からの答

棘抜いた指に優し母の舌
口だけは達者ですぬと言われても
根性に粘りをつける四股を踏む

三つ指のつき方はあちゃんに習う
戦中戦後耐えて育ってきた粘り
二日前の日記をつけて呆け防止

朝ひよいと出た歌今日の家事リズム

三郎 じゅんこ
とし子
恵子
隆
夢
堅坊
志津子
紀乃
能子
遠野
満子
哲子
則彦
瑠子

ひと言の口添え力いただいた
回転ドアひらり小雪も連れて入る
好きな人の為に粘って出す勇氣
ギャップなどなかった頃の大家族
被災地を思いながら呑んでいる
埋めようのないギャップそのまゝについて行く

気楽じゃと母は粘って同居せず
粘るのよそう足もと見られてる
改めて蛇口の水に感謝する
価値観の違うところにひかれてる
口元がほころぶ春のランドセル

米子住吉川柳会鳥取 渡辺多美子報

会釈してはてな何人と振り返る
影と一緒に転ばないよう気をつける
梅一輪ご免なさいと鉢入れ
美容院よりも安いと煙草吸う
矢面に立ちほだかつて独居老

ときめきに逢いに行くかと誘う酒
初節句皆で歌ったひなまつり
雪が消え歩きやすくてスニーカー
何故という疑い捨ててただの人
雪雪といつてるうちに春がくる

マフレスト空手形だと攻められる
川柳塔すみよし大阪 岩崎 公誠報

妻のため料理マスターする夫
都合よく物事とらえ生き上手
お日様が一番好きな旅かばん
斜めから物事を見て拗ねている

求芽 美龍
見清
美智代
勝弘
寿美子
由一
わこ
美義
葉子
千代

まずまずの志だと誉められる
カクテルは虹マスターの選るグラス
冤罪も晴れて錦の里帰り
凡人でよし春の陽があたたかい
面接はまずまずの出来通知待つ

物事にけじめをつけたら消えた僕
まずまずの成果明日への夢つなく
涙ぐむ癖で物事丸く済む
お早うと納豆まぜる家族の和
三歳児アンパンマンを歌いきる

マニアルの通りに物事運ばない
好きだから全部マスターするあなた
淡い芸マスター級の斬られ役
シナリオに無い物事にうろたえる
せっかち屋順序があると叱られる

べっぴんのわりに物事考えぬ
持ち時間足りないようなでかい夢
ふり絞った汗どん尻ゴールする
物事にこだわってみる好奇心
こだわりを捨てて身軽になる心

送葬のマスターをして巡が来る
雨上がる晴れたところ虹が立つ
親方が黙って土をこねている
まずまずのメークに鏡うなずいた
けりつけて心晴れ晴れ一人酒

まずまずの基準が親と子で違い
晴れた日はひなた取り合う婆と猫
信じた道歩いて晴れた道に出た
シナリオの出来はまずまずとやる氣
騙されて知る物事の裏表

芳香 珠月 美龍 定子 桃花 のん子 半銭 たかこ 温子 昌紀 朝子 柳弘 勝人 岳人 りつえ ダン吉 チエコ 庸佑 妙子 賢子 シマ子 克博 裕之 五月 美世子 蕉子 公誠 遠野

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 藤井寺	15日(日) 午後2時締切 いちにち・充電 席題(共選)	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	15日(日) 午後2時締切 生きる・効く・根くらべ	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
豊中 もくせい 川柳会	16日(月)午後1時40分締切 漏れる・祝日・いつも・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳 さんだ	17日(火) 午後1時から 意地・探す・楽譜・さわやか 自由吟	三田市中央公民館 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸和田 川柳会	21日(土) 午後1時半締切 精神・揃う・ちゃらちゃら ネクタイ	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川柳塔 みちのく	21日(土) 午後5時締切 万歩計・熱愛・ぶんぶん	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
はびきの 市柳会	22日(日) 午後2時締切 武者・意外・バイク・突然	綾南の森 公民館 近鉄高鷲駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川柳 ふうもん 社	22日(日) 午後1時半締切 残高・カット・時間切れ	鳥取駅 2F シャミネホール 〒680-0872 鳥取市宮長205-45 萩原美雪
南大阪 川柳会	23日(月) 午後6時から タワー・装う・まるで・雑詠	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪府中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	23日(月) 吟行 開く・あわや・話	行く先・梅の宮大社 集合・11時 梅の宮神社前バス停 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松露 川柳会	23日(月) 午後7時半締切 一枚・指・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
川柳クラブ わたの花	27日(金) 午前9時半から 蛙・旅・揺れる・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川柳塔 すみよし	28日(土) 午後2時半締切 口・救う・まだまだ	住吉区民センター 南海高野線沢之町下車3分 〒558-0041 大阪市住吉区南住吉3-16-8-206 鶴田遠野
和歌山 三幸柳会	28日(土) 午後0時30分から まだ・インスタント・開ける	和歌山商工会議所4階 第2会議室 〒640-8111 和歌山市新通7-17 古久保和子方 和歌山三幸川柳会事務局

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

5 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	7日(土) 午後1時開場 裂く・ショック・上品・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
富 柳 会	7日(土) 午後1時開場 先・耳打ち・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉 吉 川 柳 会	7日(土) 午後2時締切 子・兜(かぶと)・暮らす	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え	7日(土) 午後2時締切 浮気・感謝・削る・くどくど	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町1388 安達幸子
八尾市民 川 柳 会	8日(日) 午後1時半締切 手帳・風・掴む・雑詠	八尾神社内 西郷会館 3F 近鉄八尾駅西口徒歩5分 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川 柳 塔 わかやま 吟 社	8日(日) 午後1時40分締切 炭・分ける・ふつつつ 野球用語	近鉄カルチャーセンター 2F JR和歌山駅前 〒640-8482 和歌山市六十谷1188-14 川上大輪
西宮北口 川 柳 会	9日(月) 午後1時45分締切 頑固・引きずる・はらはら 自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川 柳 あまがさき	10日(火) 午後2時締切 泥・着る・きっかけ・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほ たる 川 柳 同 好 会	10日(火) 午後1時半締切 別・計る・〇中	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎
川 柳 塔 な ら	12日(木) 午後1時開場 繋がる・拳・待機	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口 徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
あかつき 川 柳 会	13日(金) 午後2時締切 帰る・顔・浪費	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2階) 地下鉄[谷町6丁目]駅③番出口から3分 道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川 柳 塔 さ か い	14日(土) 午後1時から バイキング・見栄え 「ぶどう(折り句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳大阪	14日(土) 午後2時締切 響く・点・理想	地下鉄長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純
川 柳 塔 打 吹	14日(土) 午後2時締切 荷・奉仕・悩む	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
川 柳 ねやがわ	15日(日) 午後2時締切 デフレ・度胸・お茶・自由吟	寝屋川市立総合センター 4F 第1研修室 寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉

柳界展望

★第20回播磨文芸祭川柳大会は2月27日姫路文学館で開催。参加者137名。秀句に姫路文学館館長賞。本社同人の秀句は次の通り。

起承転列車は弥陀の駅に

着く 池 森子

憎しみがまだ氷点として

残る 両川 無限

夢売りの列で出会ったの

があなた 両川 無限

誰とでもつなぐ野心のな

い両手 両川 無限

★第11回春はくろはこ川柳大会、4月3日倉吉の新日本海新聞社にて開催。参加者132名。(投句を含む)

全日本川柳協会賞

にんげんの味に終着駅は

ない 夏目 一粋

総合成績2位に両川無限

氏、3位倉益一瑤さんが

入賞。

その他天位

門番の僕と城主の妻が住む
古今堂蕉子

気まぐれで言つてはならぬ

ことを言う 両川 無限

★3月29日朝日新聞「天声人語」に路郎師の「俺に似

よ俺に似るなと子を思ひ」

「湯ざめするまでお前と話

そ夢に來よ」が採り上げら

れた。

▽同人動向△

☆小島蘭幸主幹は4月3日

(田)ふあうすと川柳大会選者

のため神戸行き。

☆西出楓楽理事長は4月3

日(田)春はくろはこ川柳大会

二次選者のため倉吉行き。

☆大橋政良さん(同人・砂

川市)は5月3日、川柳あ

きあじ吟社主催、第15回黙

朗忌・幹事長寿祝賀川柳

大会に於て、米寿のお祝

を受ける。

▽柳界動向△

◇米子住吉川柳会会長・竹

村紀の治氏は、4月1日か

らNHK文化センター(米子)

の川柳講座講師を務める。

◇鳥取県川柳作家協会の役員交代。会長は小林由多香氏から森山盛枝氏に。小林氏は顧問に就任。

▽御芳志御礼△

○小沢淳氏 同人・札幌市

より金一封を拝受。

▽出版△

○「川柳の理論と実践」(新

葉館出版) 著者・新家完司

さん。B6版326頁、一六

〇〇円十税

▼計報▲

●堀端三男さん(理事・和

歌山市)は、平成23年3月

20日逝去。享年93歳。通夜

及び告別式には川上大輪副

主幹・福本英子理事他、多

数の同人が参列した。

(追悼文は6月号予定)

●高田美代子さん(参予・

藤井寺市)のご夫君、寛さ

んは平成23年3月20日逝去。

享年83歳。

▽お詫びして訂正△

▼2月号P109上段2行目、

泰子→奏子。P117上段、19

行目、賢明な→懸命な。

▼3月号P34下段17行目、

新同人紹介

吉井菜々子

— 耕治・正和・遠野・美籠推薦

茶を刻む→菜を。P65下段

23行目、彩の切つて→切手。

P97下段20行目、光のも→

光るのも

▼4月号P40上段6行目、

三歩さがつて→さがった。

P51上段18行目、副音の→

福。P124上段19行目、脇取

り→美美子→扶美代。

▽新誌友紹介△

鳥取市 岡崎美知江

紹介者 田中紀美恵

次回P5月6日(金) 午後13時30分、

川柳塔のホームページをリニューアルしました。

本社句会の各題、天・地・人や各地句会案内など掲載しています。

ぜひ御覧ください。

創立54周年
第22回 時の川柳交換川柳大会

日時 5月15日(日) 10時30分開場
会場 兵庫県民会館 9階ホール

(TEL 078-321-2131)

(市営地下鉄県庁前下車 東出口
徒歩5分)

兼題 各題2句 欠席投句拝辞
「鉛筆」 西口いわゑ 選
「曲る」 谷垣 郁郎 選
「潤む」 板尾 岳人 選
「童話」 岡田 俊介 選
「帰る」 恒弘 衛山 選
「答」 赤井 花城 選
「雑詠」 平山 繁夫 選

特別課題 1句
「砕く」 岡田 玖美 選

特別課題の特選賞に楯と賞状、入選句に呈賞
会費 2,000円(記念品・発表誌呈)
昼食は各自お済ませください。

締切 12時
賞 知事賞、市長賞ほか多数
主催 時の川柳社

第65回 京都塔の会
春の吟行句会

日 5月23日(月)

集合時間 11時

場所 梅の宮神社前バス停

集合次第出発

行く先 梅の宮大社…境内神社…参集殿
(昼食・句会)

昼食 12時から

句会 1時から

題 「当日雑感」「開く」「あわや」
「話」(各題3句)

会費 4,000円

申込先 都倉 求芽

TEL 075-351-4109

主催 京都塔の会

初心者はもちろん、中級者やベテランにも役立つ
川柳における重要項目を理論と実践から多面的に捉えた
総合川柳入門の決定版!

川柳の理論と実践

- ・著者 新家 完司
- ・装丁 B6判・326ページ・ソフトカバー
- ・定価 本体 1600円 + 税
- ・送料 1冊300円、5冊以上無料

——— ご希望の方は下記出版社へご注文ください。 ———

新葉館出版

〒537-0023 大阪市東成区玉津1丁目9-16 4F
TEL 06-4259-3777 FAX 06-4259-3888

編集後記

★韓人の服に最も風薫る

薫風

★3月11日午後2時46分以後、日本中から平和・平穩

団欒・笑顔・希望が消えた。今号、霜石さんの「津軽発おもしろ景色」は、いつものユーモアあふれる霜石節ではない。塩竈市に住む霜石さんの弟子の被災状況が生々しく綴られており、迫力がある。

★東日本大震災は私たちの運命を大きく変え、人生をズタズタに引き裂いた。が、一方で日本はもうろん、世界中から善意の輪が広がっている。敗戦から、神戸の震災から立ち直った日本人の底力を、私は信じる。がんばれ、東日本。がんばろう！日本。

★初めて川柳塔の本社句会に出たのは、何時のことだったか……記憶が定かでない

が、昭和の終りころではなかったか。会場がメンズフアッションセンターだったことは覚えていて。句会の日には会社を早退して、いそいそ、わくわく出かけたように思う。

★会場近くの喫茶店でコーヒを飲みながら、ひとり席題を考えるのが苦しくも楽しい時間であった。句会場の一番前の席には黒川紫香副主幹と並んで西尾葉主幹が座っていらつしやうた。ご挨拶に何うと何時もニコニコとお優しい言葉をかけて下さった。おおかかな包容力のある先生でした。

★先生が亡くなられて今年十七回忌。その間、薫風・天笑・蘭幸と主幹が交代。歳月の流れの速さ・重さを実感する。同人の方々に葉先生の思い出を綴って頂いた。どのエピソードも葉先生の暖かさに満ちており、懐かしさに胸が熱くなる。

ひとこと

わかりにくい川柳

ゼロ年代と呼ばれる2000年以降の10年間には、小説の読み方も随分と変わってきており、短歌にもわかりにくいと感じるものも次々と出ているという。同じ短詩型の川柳ゼロ年代の特徴として「わかりにくい」と感じる句が次々と詠まれている。

川柳の場合、余りにも抽象的で

詠み手のなかで像を結ばないし、場面がわからないなどの表現が完結しておらず、適宜抽象名詞を使っている。柳人がみられるようになった。作者は、「穿ち」のつもりかも知れないが、現実から離れて具体性を欠いては、一般読者はなかなか理解しにくい。これでは川柳人のための川柳としか考えられない。

(井上 桂作)

★麻生路郎がまだまだ熱い。読本にエールを送って

下さったのは、現代川柳の新鋭評論家として、川柳作家として活躍中の小池正博さん。「菠薐草が伸びるとさ」を存分に味わっていたきたい。

★恒例の暑中広告を募集します。表紙裏を参照の上お申し込み下さい。(朱)

◇裁判を傍聴する時は比較的冷静に、客観的な態度でいられる。が遺族の場合には事件を忘れる事はなく、裁

判にも神経が昂るのである。

◇殺人罪の公訴時効がいろいろ検討されている。遺族にとって殺人事件は生涯忘れることはない。時効など考えられぬことである、と

時効の廃止を訴えるのである。

◇弁護士や学者の一部にはそれに異議を唱えている。時効が設けられたのは事件が経過とともに証拠が散逸することが大きなネ

ックになっている。しかし、DNA鑑定が飛躍的に向上

し、現在、4兆7千億人に一人の確率までになった。

この事は「証拠の散逸」というネックを取り除いたのである。現在殺人罪は25年であるが米、英などは時効がない。

◇ちなみに、車のひき逃げ

による死亡事故の時効は7年である。年金の受給権の時効は請求権が発生してから5年で、それを過ぎると消滅する。権利義務に関し

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(7月号)地名

都道府県
市町村
姓
雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201



檸檬抄投句用紙

「不揃い」 (5月15日締切)

7月号発表

山本希久子 選 — 共選 — 三宅 保州 選

B

A

B

A

地名

市都
県道府

姓
雅号

地名

市都
県道府

姓
雅号

切らないで下さい

左右に同じ句を書いて下さい



個人用

暑中見舞広告 原稿台紙

料金は払い込み用紙をご利用下さい。

1/9頁 1/6頁 1/3頁 2/3頁 1/2頁 1頁

(希望の大きさを○で囲んでください。)

原稿を貼布される方は、
この位置に貼り付けて下さい

電 話	住 所	姓・雅号
()	〒	
()		

川柳など掲載希望事項

送付先

〒543-0052

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号

花野ビル201

川柳塔社



作品募集

7月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (8句) 小島蘭幸選
水煙抄 (8句) 西出楓選
愛染帖 (3句) 新家完司選
檸檬抄「不揃い」 (2句) 三宅保州共選
山本希久子
一路集 (3句) 「敷く」 長浜美籠選
「泡」 樋口輝夫選
「ライン」 鈴木公弘担当
初歩教室 「まずい」 (3句) 鈴木公弘担当

8月号

檸檬抄「利那」
一路集「季節」「きまぐれ」
初歩教室「ぞろぞろ」
「ポーズ」

本社5月句会

とき 5月6日(金) 午後5時開場・6時20分締切り
開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウイナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06-6772-1441
おはなし「花ものがたり」
兼題「角度」「バランス」
「物腰」「追る」「狡い」
会費 10000円
投句料 5000円 (各題2句以内) (切手可)

小島蘭幸選 村上玄也選 池井正雄選 藤村美花選 森村公誠選 岩崎朱夏選 木本公誠選

本社6月句会
7日(火) 午後5時から
兼題「定食」「やっと」「筆まめ」
「黒」「誤解」

第29年度 夜市川柳募集

第12回「弁当」 小島蘭幸選
ハガキに3句 5月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)・檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円 (送料84円)

半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇一一年(平成二十三年)五月一日発行

発行人 小島和幸

編集人 木本朱夏

印刷所 美研アト

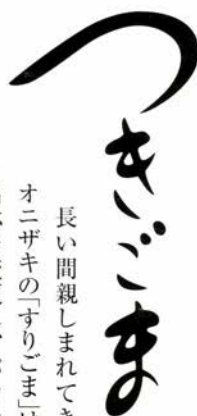
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七

花野ビル201号室

発行所 川柳塔社

電話(〇六)六七七九一三四九〇番
振替〇〇九八〇一四二二九八四七九番

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。
オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。

株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

自費出版

川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美 研 ア ー ト

☎530-0022 大阪市北区浪花町9番4号

TEL (06) 6372-1178

FAX (06) 6372-1196

E-mail : bikenart@wonder.ocn.ne.jp